

プロローグ

落日は近い。数秒間に一度ずつ漏れる少女の灰白い吐息が、凜とした風に散って空へと消えていく。茜色に染まったその夕空に向かってシャッターを切る彼女の姿を、一匹の小犬が涼しげな目で眺めている。

由里はカメラを一度胸元に戻してから、初めてその小犬の存在に気付いた。首輪が無い所を見るとおそらく野良犬だろう。毛並みの綺麗な犬で、まだ幼い。彼女がにこりと微笑みかけると小犬はキョトンとした表情を一瞬見せ、踵を返して歩き始めた。

公園のベンチに腰掛けながら、カメラを両手で弄ぶ。スーパードで買ったばかりの使い捨てカメラ。今夜のクリスマスパーティー用に購入したのだが、この日に限ってヒロミが風邪を引いたり、エリコの祖母が骨折で入院したり、次々と不幸が重なって中止になってしまったのだ。

しかし、彼女にとってこれは逆に好機でもあった。「高校生の分際で、恋人と繁華街に出掛ける事など許しません」と両親に言われた事があり、今まで彼と二人きりで夜を過ごした事が無かったのだ。こんなチャンスは滅多に無い。由里はパーティーが中止になった事は両親に告げず、恋人とイタリアンでも食べに行こうかと計画した。大勢でゲームをしたり、甘ったるいケーキを食べたりするより、恋人と二人きりで聖夜を過ごす方が何十倍もいい。

彼のバイトが終わるまで、あと三十分もある。待ち合わせ場所までこの公園から三分も掛からないので、由里は暇を持て余していた。

公園に人影は無い。今年は暖冬なので身体を震わせるほどの寒さでは無かったが、それでも三十分もじっと待つには抵抗がある。この付近は住宅街なので、公園以外に時間を潰せそうな場所など無かった。

彼女が公園にやって来てから十分も経っていないのに、既に夕陽は見えなくなっていた。街灯が点き、由里の周囲がぼんやりと照らされる。

——あの公園、時々出るらしいわよ。

——何が？ ユーレイ？

——暴走族よ。だから六時以降は絶対行っちゃダメだからね。

ふと昨日のミホとの会話を思い出して、心臓の鼓動が早まる。

(ああ、早く来ないかなあ)

彼はどうしてこんな危ない公園の近くを待ち合わせ場所なんかにしたのだろう。暴走族に扮装して自分を驚かせるつもりなのだろうか。派手な特攻服に身を包んで戯ける彼の姿を想像して由里は吹き出しそうになる。どうせなら、サンタクローズの衣装にして貰いたいものだ。

高校生ぐらいのカップルが、公園の入り口前を横切った。会話に集中していて、由里の方には目もくれない。あと二十分もすれば、あんな風に彼と楽しい時間を過ごせるのだ。もう少しの辛抱だ——。

風が強くなって来たので、由里は立ち上がった。

(少し、歩こうかな)

彼女は公園の外側を一周する事にした。それほど大きな公園では無く、一周に三分も掛からないだろうけど、動いていた方が身体は温まる。何周かしていればその内彼が現れるだろう。

由里は早足で公園の入り口までやって来た。時計回りに一周しようか、それとも反時計回りに……など下らない事を考えていた時、遠くから獣の唸る様な音が聞こえ始めた。バイクだ。

バイクが数台、この公園めがけて近づいて来る。

彼らは不気味な笑い声を上げながら、あつという間に由里を取り囲んだ。逃げる時間も無かった。アイドリング音が幾重にも重なり、彼女は思わず耳を塞ぐ。

「ようー！」

茶髪の男が勢いよく声を掛けてくる。ヘルメットは被っていない。由里のイメージと違い彼らは特攻服では無く、黒革のジャンパーにジーパンを身に纏っていた。

「一人？ これからさ、遊びに行かねえ？」

「カラオケとか好きだろ？ まあ、行こうぜ」

由里は男達の言葉を無視し、彼らを一瞥して逃げ道を探す。族は全部で十人だ。その内、二人乗りのバイクが三組。皆一様に獲物を見る様な目つきで由里を眺め回している。

ベンチで待ち惚けしていた時と違い、不思議と恐怖心は湧かなかつた。暴走族に襲われるかも知れないという目に見えない恐怖と不安よりも、今目の前にある現実の方が、彼女にとっては気が楽だったのかも知れない。

「おい、聞いてんのかー！」

スキンヘッドの男の怒鳴り声を合図に、由里は一番体格の小さな男が乗っているバイクめがけて体ごとぶつかった。予想外の行動に、男は為す術もなくバイクごと転倒する。

由里は身を翻し、悲鳴を上げながら一目散に駆け出した。一瞬遅れて、彼女のすぐ背後で「この野郎」という罵声と、バイクのけたたましいエンジン音が交錯する。

彼女は一人がやっと通れそうな狭い路地に入り込んだ。走りながら族の方を振り返る。彼らはバイクを諦め、自らの足で走り始めた様だ。だが幸いな事に、追跡の先頭が太った男だったので、由里と彼らの間隔はどんどん開いてゆくばかりだ。よし、このまま人通りの多い場所に出てしまえば――。

長い長い蛇の様な路地を、由里は大通り目指して駆け抜ける。

(子供の頃から、短距離走には自信があるんだから……)

彼女は走った。

すぐ目の前に微かな光が迫っている。

光はどんどん大きくなる。

由里はラストスパートを掛けた。

(抜けた！)

彼女は路地を抜け、ホツとした表情で眩い光の方に目を向けた。

それは、街灯では無かつた。

ネオンサインでも無かつた。

その正体を認識した瞬間、

由里は宙を飛んでいた。

闇を切り裂く様な急ブレーキの音が、
雷鳴が轟く様な衝撃音が、
彼女の聴覚全てを支配する。
五メートル離れた地面に叩き付けられる彼女の身体。
持っていた鞆が投げ出され、
倒れている彼女の目の前に携帯電話がスライドして、
そして止まった。

「何てこった」

「おい、逃げなよー」

暴走族の声が遠ざかっていく。

由里は身体を起こそうとした。

だが、かろうじて動くのは右手だけだった。

彼女は携帯電話に手を伸ばす。

幾つかボタンを押す。

『もしもし、由里か？』

電話口から聞こえる、優しげな彼の声。

大好きな彼の声。

『遅くなって悪かったね。もうすぐそっちに着くからさ』

「メ……」

『もしもし？ どうしたんだ？ 由里』

「メリー、クリスマス……」

由里は、最愛の彼の名を呼ぶ事は出来なかった。

最期の瞬間、

彼女は、魂が肉体から離れてゆくさまを、

確かに感じていた――。

1

カタカタ。チャコチャコ。二種類のパークッションが、才人のすぐ両隣で歯切れのいいビートを刻んでいる。愛妻弁当をお腹に詰め、身も心もすっかりフレッシュした彼は、そのステレオサウンドに酔いしれながら、リズムに乗って口笛を吹き始める。奏者達はびっくりにした様子で彼の方を見る。だけど演奏は止まらない。

才人は空っぽの弁当箱を鞆に仕舞い、代わりにA4サイズの茶封筒を取り出した。そして、すぐに思考をお仕事モードに切り替える。ここはコンサートホールでもライブハウスでも無く、職場なのだと認識する。巨大ビル群が立ち並ぶ新宿オフィス街の一角にある、メトロタワービルの十六階。その中にある株式会社サイダーハウスのインターネット事業部が、今彼が籍を置いている場所である。

ホームページ制作やシステム開発などのIT業務を専門とするこの会社の名前が、サイバーでは無く何故サイダーなのかは、謎に包まれたままだ。社長の孫の健太郎君の好物がサイダーだからとか、どうせそんな下らない理由だろうな、と才人は思う。ココアが好き

だったらココアハウス、みたいな。奴はそんな大雑把な男なのだ。

ああ、温かいココアが飲みたい——。才人は喉を鳴らす。この部屋では熱さに弱い電気機器を守るため、暖房は殆ど効いていなかった。最近のコンピュータは摂氏三十度の日が数週間続いてもオーバーヒートを起こす事が無い様、頑丈に設計されているのだが、社長は「機械は熱に弱いのだ」と信じきっており、コンピュータルームでの暖房を毛嫌いしている。夏ならば冷房が効いていて快適だが、冬は厚着をして防寒するしか無い。狭い部屋で男三人がコートを着込んで横一列に働いている姿は、とても一流企業とは思えない空しさを感じる。

先程から才人の両隣で繰り返し響いているパーカッションは、楽器では無い。右側の男がカタカタと音を立てているのはキーボード。左側の男がチャコチャコと音を立てているのはマウスである。いずれもパソコンの周辺機器、才人達の商売道具の一つだ。

マウス男が手を止め、雑誌を読み始める。音がカタカタだけになってしまったので、才人は目の前にあるマウスで、音を足してやった。カタカタ、チャコチャコ、再び合奏曲が始まる。キーボード男は失笑気味で才人の方をチラチラと見る。ご機嫌なのはいいけど仕事して下さいな、と言いたげだ。はいはい分かっていますよと才人は目で合図し、自分のパソコンを起動させた。

まだ昼休みは終わっていない。だから本来ならば、こうして口笛を吹こうが鼻歌を歌おうが自由な時間帯なのだが、どういう訳かこの会社では昼食を終えた人間はすぐに仕事を始めるのが暗黙の了解となっている。

突然ノックの音がし、才人はそちらを振り返る。どうぞを言う暇も無く、ジーンズにセーター姿の根岸多恵子が深刻そうな面持ちで入って来た。

「三嶋さん、ちょっと宜しいですか？」

「何かな」

この部屋で三嶋という苗字は才人しか居ないので、当然彼が返事をする。ちなみにキーボード男は田中、マウス男は木下と言う。二人とも才人の後輩で、同じウェブデザイナーだ。「例のグッド不動産のホームページの件ですが」

「グッド？」

何処の不動産屋さんだそれは？ と口にしかけたが、才人は喉元ギリギリで思い出す。

「ああ……確か五十ページ物のやつだったね。グッド不動産でグッドな暮らしと……何とかって言う、変なキャッチコピーの」

「はい。さつき先方さんから電話があつて、費用をもっと安くして欲しいと」

「それは無理な相談だ」才人は即答する。

「しかし、五十ページで三百万円は吹っ掛け過ぎでは」

「先方は僕を指名して来てるんだらう？」

「はい」

「という事は、その指名料に百万。企画構成費に三十万。後は、一ページ二万円で合計百万。これを全部足すと……」

「二百三十万円です」

「あ、そう……」

計算が合わない。「残りの七十万は……ああ、そうそう、確かこのホームページ、イラ

ストを二十点ほど載せるんだつたよね。その制作費つて事で」

「藤原^{ふじわら}さんは、一点につき三千円程度でいいつて仰つてました」

「ああ、そう……」

藤原と言うのは、当社専属のイラストレーター藤原千鶴^{ちづる}の事だ。才人は舌打ちをする。

「とにかく安くするのは無理だ。断つて」

「はい」

根岸多恵子は一礼して部屋から出て行った。相変わらず無表情な女だ。喜怒哀楽を司る神経が切れてしまつているとしか思えない。事務を担当している彼女を才人は三年間見て来たが、笑顔を見た事は一度も無かつた。

笑えば結構可愛いはず。今度脇腹をくすぐつて無理矢理笑わせてやろう、などと才人はニヤニヤしながら考へる。年は二十七歳。才人より四つ年下なのに、キリリと引き締まつたその表情は、彼女の方が大人っぽく感じさせる事がある。

才人は、グッド不動産の仕事には最初から興味が無かつた。打ち合わせの時にその不動産屋を訪れたが、出されたお茶は不味かつたし、壁を油虫が這つていた。金を取れる仕事では無いと即座に判断した。見積もり費用通り三百万円をすぐに出せるなら大したものだが、やはり出し渋つて来たのだ。

(馬鹿だな、僕を作るホームページなら、すぐ元が取れるのに)

才人は煙草に火をつけながら、溜息をつく。

「それにしても三嶋さん、凄いつすねえ」

雑誌を読んでいたマウス男木下が、突然呟いた。某有名デザイン誌の『日本が誇る天才ウェブデザイナー』という記事だ。そこには才人のインタビュ全文が掲載されている。

『サイトを作る上で最も大切なのは、ユーザに対して強烈なインパクトを与える事ですね。一度話題になれば後はマスコミとか口コミとかで、大した宣伝をしなくとも人は集まるものです。だってインターネット人口の大半は若者じゃないですか。親しみやすいページとか、目に優しいページとか、そんな物は好奇心旺盛な若者世代にはすぐ飽きられてしまふ。僕は特定の層にターゲットを絞り込むなんて真似は絶対にしません。とにかく話題性を持たせて、日本中、いや、世界中の全ての人間の目を惹きつけるんです』

そんな記事が五ページに渡つて続いており、最終ページには才人のプロフィールと制作実績が細かく書かれている。プロフィールの傍らに掲載されている写真には、彼の自信に満ちた微笑が映し出されている。

元々才人は長髪だったが、撮影の前に美容院に行つてバツサリと髪を切つた。「マトリックス」のキアヌ・リーブスに憧れ、あの映画の彼に似た髪型にしてみらつたが、美容師の腕が悪いのか、それとも元々あのようなショートカットが似合わない貧相な顔立ちなのか——おそらく後者——自分ではあまり気に入っていなかった。

それでもカメラマンの腕前は流石である。キアヌの様にはいかないが、モデル雑誌の表紙を飾つても可笑しくないほど、凛々しい表情に出来上がつている。

彼が雑誌に掲載されたのはこれが初めてでは無い。三嶋才人の名は今やデザイン業界で知らない者は居ないほど浸透している。現在抱えているプロジェクトが成功すれば、業界だけで無く、世界中に大きく報道される事は間違いない。

「三嶋さん、三嶋さん」キーボード男田中が才人の肩をポンポン叩く。

「あ、うん」慌てて才人は我に返る。

「これ、どう思います？ 丸越デパートのリニューアルなんですけど」

デパートが新装開店する訳では無い。ホームページのデザインを一新させる作業を、田中が担当していた。才人は彼のパソコン画面を覗き込み、目を細める。

「うーん、ちょっと赤がきついけど、いいんじゃないかな」

「ありがとうございます」

「ただ、このメニューボタンはちょっと単調過ぎるね」

「はあ、見やすくていいと思ったんですけど……」

「ただ見やすければいいってもんじゃない。四角いボタンが縦に十個並んでいる。確かにこれだとユーザは見やすいし、押しやすい。しかし、これじゃ面白くも何とも無いだろう？

重要なのはエンターテインメント性だ。ユーザがボタンを押す操作自体を楽しめる様にして」と

「ははあ……でも、どうすれば？」

「そうだね、僕なら」

才人は指をクルクル回転させる。頭の回転を良くするための癖だ。「例えば、デパートと言えば、エレベーターが付き物だ。このホームページのボタンをエレベーターのボタンっぽくするんだ。そしてそこに書くのは階数だけで、他には何も書かない」

「えっ、しかしそれだと、どのボタンを押せばどのコンテンツに移動するのか分からなくなりそうです」

「それでいいんだ。ご丁寧に案内なんかしてしまつと、ユーザは自分の興味のあるコンテンツしか見なくなるだろう？ あえて何も書かない事によって、ユーザは必ず全てのボタンを押す事になる」

「なるほど」

「ボタンを押すと、扉が開いて、そこにコンテンツが表示される様なアニメーションを作るんだ。ボタンを押してから扉が開くまでの間、少しタイムラグを持たせて、エレベーターの移動音や、フロアに到着した時のチーンって音も、丸越デパートに行つて録音した物を使うと面白いね。アクセスが集中すると重量オーバーのブザーが鳴るって言うのはどうだろう？ ……まあ、後は自分で考えるんだね」

「はい、やってみます」

田中は軽く頭を下げて、作業に戻った。才人も自分の作業に戻る。現在彼が行っている仕事は、スカイビルが来年夏新発売する缶ビールの紹介サイトの制作だ。ポスターやパンフレットを含め、広告媒体のデザインは全て才人が一任されている。三千万円を賭けた巨大プロジェクトで、彼の持つ力の全てを注ぎ込んでいる。才人は猫の手も借りたいほど多忙——と言いたい所だが、彼の提出した企画やデザイン案がスムーズに先方のお眼鏡に適ったため、若干スケジュールが余っているほどだった。

才人はマウスをクリックする。ビールの写真が次々と画面上を流れてゆく。

画面を舐めたらビールの味がする技術が、いつか開発されればいいのにな。そう言えば匂いが出る装置が開発されてるんだっけ。あれを使えばもつと面白くなるかも。

才人がそんな空想に耽っていた時、営業社員が二人、バタバタと音を立てて部屋に駆け込んで来た。ただならぬ雰囲気、才人達三人は同時に立ち上がった。

「たっ、大変だっ！ 社長が逮捕されたぞっ！」

2

それから五分も経たない内に、メトロタワービル十六階には取材陣が押し寄せた。社員はその直前に一つ下の階の会議室に、隠れる様に避難済みである。今頃マスコミは血眼になって捜している事だろう。

会議室に集まったのは田中と木下、根岸多恵子ら合計十人。才人の知らない顔は無い。意外と社員少なかったんだな、この会社……と、彼は暢気に考える。

社長が逮捕されたのは、満員電車での痴漢行為だった。よりによって常習犯らしい。社長クラスになれば運転手付きの外車にでも乗れそうなものだが、健康のため、と言って毎日電車を使って移動していた。まさかこういう魂胆があったとは、一報を聞いた社員は皆、しばらく呆れて物も言えない様子だった。

「この会社、どうなっちゃうんでしょうね」田中が呟いた。
「借金を抱えたわけじゃ無いから、潰れはしないと思うけど」

才人は、クライアントが契約を切って来ないかどうか、何よりの心配だった。この不祥事がマスコミに大きく取り上げられれば、サイダーハウスの評判はガタ落ちである。

「このままでは、まずいんじゃないでしょうか？」

多恵子が言った。社員達は顔を見合わせ、唸る。

「加藤、社員代表でマスコミのインタビュ、受けて来いよ」

「ば、馬鹿言え、全国放送で恥を晒せるかよ」

「しかし誰かが行かないと、騒ぎは収まらないぜ」

「田中、お前行けよ」

「ええっ！ 何で僕が！」

「確か高校生の時、全国弁論大会で優勝したとか言っていたじゃないか。その実績を活かして、頑張れ」

「無茶言わないで下さいよ！ 何の準備も無しに、マスコミ相手に下手な事言えませんか！ ……そうだ、三嶋さん、お願いしますよ。有名人だからマスコミ慣れしてるでしょう？」

田中がそう言うと、社員全員の視線が一斉に才人の方へと集中し始めた。彼らの瞳は太陽の様に燦々と輝いている。弁論大会で優勝経験のある田中に一票を投じたかったのだが、彼らの目は才人を捉えたまま、一向に動かない。

「……仕方無いなあ」

才人は欠伸混じりに立ち上がった。会議室のドアノブを掴むと、「やばくなったら助けに行きます！」と木下の声が掛かった。「やばい」という状況を会議室に居ながらにしてどうやって察知するのかは分からないが、彼が来た所で加勢になるとも思えなかった。

才人はエレベーターで十六階に移動した。扉が開くと同時に、一斉に才人にカメラが向けられる。「おおっ三嶋才人だ！」「ウェブデザイナーの三嶋だ！」という歓声と同時に、写真撮影が始まった。フラッシュの閃光が目にも痛すぎる。一躍タレントにでもなった気分だが、出来ればもう少しいい話題で取材して欲しかった。

「三嶋さん、社長が痴漢容疑で逮捕された事に対して、一言お願いします！」

小柄な記者が、鼻息を荒げながらICレコーダーを突き付ける。一言といっても何を答えていいのか分からないが、ひとまず率直な感想を述べてゆく事にした。

「ええ……同じ男として許せませんね。最低です。是非とも厳罰をお願いしたいです」

才人は記者の方を見て言った。『同じ人間として』と言った方が、インパクトがあつたかも知れない。

「今回の一件で、サイダーハウスが請け負っているスカイビールのプロジェクトが、打ち切りになるのではという噂も出ていますが？」

また別の記者が尋ねた。今度は大柄で、面長だ。

「ええつと……スカイビールさんを信じたいと思います。弊社は社長だけの物ではありません。社員一人一人が協力し合つて築いて来ました。このプロジェクトを通じて、我々の想いはきつと日本中の皆さんに伝わるはずですよ。決してイメージダウンにはなりません」

「三嶋さんが次期社長になる、という事はありませんか？」

「ノーコメントです」

質問の意図が分からない物は、ノーコメントで通す事にする。

「社長と三嶋さんは、反発する事が多かったという話を耳にしましたが？」

「それも、ノーコメントで」

「他の社員の姿が見当たらない様ですが、今どこに？」

「会議中です」才人は視線を床に落とす。

「それは、今回の対処についての会議という事ですか？」

「いいえ……先ほども言いましたが、我々は仕事に対して情熱を持っています。社長個人の不祥事に対して話し合う事など、何一つありません」

「社長の事はどうだつていって言うのか？ ちよつと無責任じゃないのか？」

突然誰かが怒鳴る様に言った。声の主が分からないので、才人はその声のした方へと視線を向け、むつとした表情で言い返す。

「無責任？ 社長が痴漢を働き、被害者を傷つけたその責任を、どうして我々社員が負う必要があるんですか？ 確かにウチの会社の社長が、その様な不祥事を起こし、ご迷惑をおかけした事はお詫び申し上げます。しかし実際に責任を取るのは社長ただ一人でしょう」

そう言うと、男が一人、才人の前に歩み出て来た。

「やれやれ、とんだ世間知らずのおぼっちゃまだな。あんた、会社の事を何にも分かつちやいない。一人の不祥事はグループ全体の不祥事。会社全体が連帯責任を取るべきだ。今抱えている全案件をストップし、一ヶ月間の営業停止を行う事を、今ここに提案する。それぐらいの誠意を見せない会社は、潰れるぜ」

取材陣がしんと静まり返つた。暴言を吐いた髭面の男は、ニヤニヤと不気味な笑みを浮かべている。才人はカチンと来たが、ここで怒鳴つてはマスコミに対して悪印象なので穏やかな表情で男を見据える。見た所、男はカメラやマイク等は携帯していない。

「……取材の人間、じゃ無い様ですね」才人は男を睨んだ。

「さあ、どうか」

「三嶋さんに対して何て口の利き方だ！ 取材の邪魔だ！ つまみ出せ！」

記者の一人が叫ぶ。髭面の男は警備員二人に両脇を掴まれる。

「また逢おうぜ、三嶋才人さん」

男は警備員の拘束を乱暴に振り解き、非常階段の方から出て行った。「何だあの男は」という声がチラホラ聞こえる。才人にもさっぱり分からない。

「それで、話は戻りますが……」

一人の記者が新しい質問を投げようとした時、才人の真後ろでエレベーターが開いた。「きゃっ、何これ！」という素っ頓狂な声がフロアを響き渡る。才人が振り返ると、鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をした藤原千鶴が立ち尽くしていた。また取材陣が一斉に撮影を始める。

「ね、ね、何この人達？もしかして才人、また何か賞獲った？おめでとう！」

千鶴は猫の様な身体を才人に預けて狂喜乱舞する。才人は慌てて彼女を引き離す。取材陣には「違います、違います」と両手を振る。何が違うんだろう？と彼は心の中で自問するが、とにかく違うものは違うのだ。誤解されては困るので、才人は彼らに、千鶴がサイダーハウスに勤めているイラストレーターである事を説明する。

「藤原千鶴です。キュート系からグロテスク系まで何でもOK。お仕事待ってまーす。ニコッ！」

彼女の奇妙な挨拶に圧倒されたのか、取材陣は黙って揃い足で去って行った。これが生放送で無い事を聞いて、才人はホッとする。

ひとまず騒ぎは収まったので、会議室の連中にその旨を連絡し、才人はコンピューターに千鶴を連れて行く。大きなピンクのリボン髪に結わえた彼女は、いつ見ても「どこかの少女漫画から飛び出して来たんだ」と突っ込みたくなる。年は二十一歳だが、小学生にも中学生にも見える童顔な顔立ちと、低い背丈。イエローとグリーンのストライプTシャツ、紅生姜に一晚浸した様な色調のハーフパンツといった、色彩に統一感の無い派手な服装。イラストレーターなのに、このファッションセンスの酷さには呆れてしまう。

「へえー、社長逮捕されたんだ」

千鶴は田中の椅子に腰掛け、膝を伸ばす。「それで何で才人が取材受けてんの？」

「有名人って損だね……」才人は襟元を正しながら言う。

「はあ？」

「いや、何でも無い。……ところで、グッド不動産の件だけ」

「あつ！考えて来たよ！」

千鶴はピョンと椅子から飛び降りて、鞆からスケッチブックを取り出し、開いて見せた。カエルのようなキャラクターがいくつも描かれている。

「見て見て、これがマスコットキャラクターのミスターグッド君。で、こっちが女の子バージョンで、グッドちゃん。可愛いでしょ！才人はどっちがいいと思う？」

「……断ったんだ」才人は彼女から目を逸らす。

「それで、これが……えっ？」千鶴は目を合わせる。

「グッド不動産の件は、無くなった」

「……何で？」

千鶴は才人を睨み付ける。童顔のくせに妙な迫力がある。

「クライアントが三百万円も出せないと行って来たんだ。それで」

「いいじゃん、安くしてあげれば。何ならあたし、タダで描いてあげてもいいし」

「あのね、これは子供のお遊びじゃ無い。選ばれしプロの仕事だ。どうして君は自分の作った物をそんな風に安売りしようとするのかな？ 僕には理解出来ない。立派な作品には、立派な報酬が与えられるのは当然じゃないのかな。ゴッホやピカソの描いた作品が、何億という大金で取引されるのと同じ事だ」

才人はボールペンを回しながら言った。彼女は才人から目を背けると、スケッチブックを閉じて、寂しそうな顔を浮かべた。

「あたしはただ、自分の好きな絵を描いていただけなのよね。お金なんて、どうだっていいの。ずーっと好きな人の傍で、そうやって生きていけたら」

「でも、お金が無ければ生活が出来ない」

「ぷー！ もういいですう！」

千鶴はふくれっ面でスケッチブックを鞆に詰め込み、大袈裟に足音を立てて部屋を出て行った。

好きな事をして生きていきたいだけ、か。確かにそれも一つの生き方だし、才人自身も好きな事をして生きているつもりである。しかし実力のある者には、自らの作品に値打ちをつける権利があるはずだ。自分の芸術を安売りする様な人間にはなりたくはない。

金に欲があるわけではない。芸術の価値を、世界中の誰もが一目が分かる数値で示した物——それが金以外、今の世の中には存在しないからだ。才人は「ウェブデザイナー」という名の芸術家として、インターネットの世界で名を馳せている。

才人が高校生の頃は、まだインターネットが日本に普及しておらず、ウェブデザイナーという職業は聴いた事が無かった。広告メディアと言えばテレビやラジオ、紙媒体が主流だった。その存在を初めて彼が知ったのは、通っていた大学の卒業が迫ったある日の事だ。実習室のパソコンにインターネット環境が導入され、そこで初めて彼はインターネットを体験した。検索エンジンで見たいホームページを検索し、アクセスする。ここでは毎日の様に新しい情報が更新されていく。ボタンを押せば別の画面に移動する。ゲームも出来る。新聞やチラシと違い、紙も無駄にならない——などなど、次々と新しい感動と興奮を得て、当時は何もかもが新鮮でたまらなかった。

才人はその頃からウェブデザイナーになりたいと思っていたわけでは無かった。彼が卒業制作で作ったシューティングゲームを自分のホームページで幾つか公開した所、これが話題を呼んだ。しかし、掲示板に書き込まれていた意見はゲームの内容に関する物では無く、何故かホームページに関する感想の方が多かった。ゲームのコンテンツに辿り着くまでの過程が楽しいと言うのだ。ホームページにアクセスした途端、ユーザは宇宙空間にワープした様な感覚を味わう事が出来る。そんな仕掛けを才人は作っていたのである。

彼自身大した宣伝をした訳でも無いのに、次々に問い合わせが殺到し、やがては有名雑誌に掲載された。『ゲームの内容は今一つだが、ホームページの仕掛けが素晴らしい』というレビューを読んだ後、もしかしたら才人はゲームプログラマーよりウェブデザイナーに向いているのかも知れない、と思い始め、この職に就く事を選んだ。

大学卒業後、二年間アルバイトを続けながらウェブデザインを本格的に学び、二十四歳の春に株式会社サイダーハウスに入社した。斬新な企画とデザインで次々とコンペを勝ち取り、彼は日本が誇るウェブデザイナー・三嶋才人として、新聞や雑誌で大きく取り上げられるまでに上り詰めた。

その数年後、彼はこの会社の事務員をしていた暁子と結婚した。今では幸せな夫婦生活を営んでいる。

3

才人は「ただいま」を言いながら玄関で靴を脱ぎ、正面のリビングのドアを開いた。

リビングの傍らに置かれているプラズマテレビが、サイダーハウス社長の丸顔を大きく映し出しながら、事件の詳細を報じている。喋っているのは清楚な雰囲気的女性ニュースキャスターで、「痴漢」という単語にやけに力が入っている。

「おかえりなさい。大変でしたね」

リビングの奥にあるダイニングキッチンでは、妻の暁子が夕食の準備を進めていた。真っ白なエプロン姿の彼女は、心配そうな顔で才人を見る。彼は「心配いらないよ」と言わんばかりに微笑みかけると、暁子はホッとした様子で少しはにかんだ。

「随分と大きく取り上げられているんだね」

才人はリモコンでチャンネルを次々と変える。他二つのチャンネルで、サイダーハウス社長逮捕のニュースを報じていた。

「さっき、才人も映りましたよ」

「髭面の男は映らなかった？」

「えっ？」 暁子が首を傾げる。

「いや、何でも無い。どうでもいい事だった」

才人は鞆から空の弁当箱を取り出し、暁子に渡す。「今日の唐揚げ弁当は旨かったよ」「良かった。この間、お料理教室で教わったばかりなんです。うまく出来るかどうか心配だったんですけど」

「グッドだね。グッド不動産よりもずっと」

暁子はぎこちない笑顔で応える。今のはオヤジギャグだったか、年は取りたく無いものだ、と才人は苦笑する。

才人は席に着いた。食卓に置かれたシチューには、野菜がたっぷり入っている。昼が唐揚げだったので、夜は肉系を出来るだけ省いたのかも知れない。バランスが取れている。こうして健康で居られるのは彼女のおかげなんだ、と才人は実感する。

六時半のニュースが終わり、下品なバラエティー番組が始まったのでテレビを切った。準備を終えた暁子も席に着く。二人は揃って「いただきます」と手を合わせた。

この瞬間が、才人にとって一番の幸せだと思う。

才人は周囲からは仕事一筋の人間と認識される事が多い。それは、日本を誇るウェブデザイナーと呼ばれるまでになったのは、才人が寝る間も惜しんで努力をして来た結果だと、世間が勘違いしているからだ。確かに仕事には真剣に取り組んでいるし、誰よりも情熱を注いでいるつもりだ。しかし、締め切りに間に合わないかも知れない案件が無い限り、彼は必ず定時で帰る様になっている。仕事を大切にする一方で、プライベートの時間も同じくらい大切なのだ。特に、暁子と過ごす時間は、かけがえの無い時間である。

暁子がまだサイダーハウスに勤めていた頃、インターネット事業部には「クイーン」と呼ばれる美しい女性が居た。外国人では無い。田中や木下、営業部の人間らが勝手にそう

いうニツクネームを名付けたのだが、まさにイメージ通りで、気品溢れる顔立ちに、栗色の艶やかなショートヘアがとても印象的だった。性格は明るく、おまけにナイスボディ。一時は社内でファンクラブまで出来たほどで、田中は今でも彼女の写真を財布に挟んでいるらしい。

大勢の男達が煌びやかな彼女に惹かれていく中、地味で大人しめの暁子の方が、才人にとっては新鮮に思えた。目や鼻は小さく、化粧気は少ないが、心地の良い純朴さを内に秘めている。また、上品かつ丁寧な口調でゆったりと話す彼女の声に才人は癒され、彼はクイン・ファンクラブには入会せず、暁子に急激に惹かれていったのだ。

「どうですか？」

暁子が突然尋ねた。才人は一瞬間の意味が分からなかったが、彼女の視線が彼の口元に注がれているのを見て、把握した。

「ああ、うん。旨い」

「少し塩分が多かったかも知れません」

「そうかな……でも、旨いから」

「何だか今日の才人さん、上の空ですね。あんな事件があったとは言え、いつもの才人さんらしく無いです」

「いや、何となく色々と昔の事を思い出していてね。暁子がまだサイダーハウスに勤めていた頃の事とか」

「突然どうしたんです？」 暁子がクスツと笑う。

「今日は何だか色々と考えさせられる。姫川さんって、今何してるんだろうね」

「懐かしいですね、クイン・ファンクラブ。社内の誰が姫川さんと結婚するか、内心興味あったんですけど、結局幼なじみの方と結婚されて寿退社だったんですよ……。姫川さん、本当は才人さんの事が好きだったんですよ」

「でも当時の僕は、アキコ・ファンクラブのただ一人の会員だったから」

「才人さんって、他の人とは感性がまるで違うんですね」

暁子は真剣な眼差しで見つめる。他人と違う感性を持つ事、それは努力する事よりも大切だと才人と思う。そう言えばそんな話をしたら、「単に捻くれてるだけじゃないか？」と笑って返した同級生が居た。彼も相当変わっていた気がする。卒業後はどこかのホテルに就職してしまった。あれ以来連絡が途絶えてしまったけど、元気でやっているのだろうか。

夕食が終わった時、電話が鳴った。暁子は食器を片付けようとしていたので、才人はサイドボードの上の電話に手を伸ばす。

「もしもし。三嶋ですが」

相手は無言だった。故障かと思い、才人は五秒後にもう一度「もしもし？」と呼びかけた。

『お前の子供を預かっている』

ぶっきらぼうな男の声だった。

(子供？ 子供だって?)

才人は思わず唾を呑み込む。自分には子供は居ない。どういう事だろう？ ただのイタズラなのか？ それとも頭がおかしいのか？ あるいは――。

「……失礼ですが、どなたかとお間違えじゃ？」

才人がそう言うと、突然男は笑い始めた。

『馬鹿。俺だよオ・レ』

声のトーンが変わったので、才人の頭の声紋データベースが瞬時に検索を開始する。そして大学時代の同級生、関丈史せきたくしの声と完全に一致した。

「なんだ、関か」才人は肩を緩める。

『久しぶりだな才人。相変わらずの天然ぶりだ』

「大きなお世話だ。悪趣味なイタズラはやめてくれないかな。おかげで寿命が十年は縮まった」

『遠回しに探りを入れてみただけさ。というか、結婚して二年も経つてのにまだ子供居ないのかよ』

『何を言ってるんだ、そっちはまだ独身じゃないのか』

『そう、独身さ。日本が一夫多妻制を導入しない限り、おそろく永遠に』

関とは大学時代に知り合った。初めて才人が彼を見た時は巨大ブロッコリーかと思えるぐらい頭が爆発してびびくりしたが、恋愛に失敗したら髪を切ると言って、その一ヶ月後、今度は坊主頭になっていた。信じられない行動力の持ち主だ。

選択教科が全く同じだったという事もあり、彼とはよく話をした。成績は二人揃って落ちこぼれだったが、変わり者同士、大学では唯一気の合う親友だった。

性格は対照的だった。ゲーム好きでインドアだった才人と違い、関は女好きでアウトドアだった。いつも複数の女の子と遊び回っていた記憶がある。きつと卒業後もこうしてフラフラするんだろうなと思っていたが、何と才人よりも早く就職の内定を貰ってしまった。卒業式の時、「大人の遊びには、何かと金が掛かるからな」と彼が笑って話していたのをよく覚えている。その後もしばらくは交流があったが、彼の仕事が忙しくなり、才人の結婚式以来はずっと顔を合わせていなかった。

『それで、何か用なのか？』才人は訊いた。

『ああ、さっきお前がテレビで偉そうに喋ってたろ。マスコミ相手に熱弁を振りまいていた感想を訊きたかったんだよ』

関の口調は明るいけど、どことなく力が弱々しい。確か女に振られた時もこんな風に冗談を言って誤魔化していた。今回も何かがあったに違いなかった。

『何かあったから電話して来たんだろう。正直に言えよ』

才人がそう言うと、関のぎこちない笑い声が聞こえてきた。

『じゃあ言うが、笑うなよ。勤めていたホテルが、今朝潰れたんだ』

『何だつて？』才人は思わず目を丸くする。

『新聞読んでないのかよ。東京トワイライトホテルだ』

『あのホテルか……。まさか、君がそこに勤めているとは思わなかった』

『経営がかなり行き詰まっていたんだとき。色んなトラブルが重なって、どんどん客が離れていった』

『しかし、保障はしてくれるんだろう？』

『期待出来ねえな。残っていたホテルの金をお偉いさんが全部持ち逃げしちまったんだよ。おかげで従業員は大騒ぎ。この事だけはマスコミにはまだ伏せているが、明朝にはニュースになると思う』

「そうか……」

『お互い問題のある社長を抱えると苦勞するよな』関は可笑しそうに言う。

「笑い事じゃ無いだろう。これからどうするんだ？」

『……才人、俺と一緒に会社作ってみないか』

関は突然真剣な口調になった。彼の予想外な返答に、才人は目をもう一回り大きくする。ふと台所に視線をやると、暁子が心配そうに才人を見ていた。ちょうど後片付けを終えた所らしい。

「本気なのか？」才人は小声で訊いた。

『ああ、本気だ。俺は東京トワイライトですつと企画営業をやつて来たんだ。ブライダルやコンサートなど沢山の企画に携わつて来た。だけどさ、どれだけ斬新な企画を作つても、どれだけ汗水垂らして街中を走り回つても、毎月毎月同じ額の給料明細が手渡されるだけ。俺の頑張りの殆どは、お偉いさん方のディナーや女遊びに化けちまうんだ。それでも俺は頑張つて、あいつらの様に毎日豪遊出来る様な身分になつてやるつて、そんな野望を持つていたぜ。しかしそれも儂く散つた。ホテルが潰れたんじゃどうしようも無いからな。再就職して一からスタートする事も考えたが、また同じ日々の繰り返しかも知れないって思うと、何だか空しくてな。そんな時、テレビにお前が映つたんだ。ウェブデザイナーとして大活躍中らしいじゃねえか。お前と一緒にやつていけたら楽しいだろうなつて思つたんだよ。どうだ、一緒にやつてみないか』

「ちょ、ちよつと待つた」

才人は慌てて言う。「君が会社を作るのは自由だけど、僕まで巻き込まないでくれないか。第一、ウチの会社は潰れたわけじゃ無い。第二に、僕は現状に不自由はしていない。第三に、僕には妻が居る。安定した収入を捨てるなんてリスクを背負いたく無い」

『お前が必要なんだよ。つていうか、お前じゃなきゃ駄目なんだ』

「気持ち悪い」

『お前だつて、一度は独立を考えた事はあるんじゃないのか？』

「悪いけど一度も無いね」

『この、分からず屋！』

電話が切れた。電話線ごと切れたのかと思うぐらい、突然だった。才人は一瞬ムツと来たが、関は職を失つたのだ。ヤケになる気持ちも分かる。もしかしたら酒でも入っていたのかも知れない。

「今の電話、関さんだつたんですか？」受話器を戻すと、暁子が言った。

「ああ。彼の勤めていたホテルが倒産したらしい。かなりヤケになつていた」

「まあ……」

「おまけに、上の人間が金を持ち逃げして大騒ぎらしい」

「酷い話ですね。人間つて、偉くなれば偉くなるほど欲が出るのかしら」

「関の所は金銭欲、僕の所は性欲という名の欲望だね」

才人は欠伸をしながら、ダイニングテーブルで頬杖をつく。暁子は「コーヒー淹れます」と言い、再び台所に戻った。彼女の長く柔らかな黒髪を見ているだけで、コーヒーよりも心が落ち着く。彼女が会社勤めしていた頃は結構ぼっちゃりとしていたが、今は結構スマー卜だ。幸せ太りならぬ「幸せ痩せ」と才人は名付けている。勿論、今の彼女も昔の彼女も、

彼にとつては魅力的な女性である事には変わりない。

「才人さんは、これ以上偉くならないで下さいね」

暁子はマグカップにコーヒーを注ぎながら言う。「これからもずっと、今のままの才人さんで居て欲しいです」

「大丈夫だよ。ずっと変わらないから」

彼女は安心した様に微笑んで、カップをテーブルに置いた。

4

翌朝。才人は暁子から新聞を受け取ると、まずは三面記事をチェックした。「株式会社サイダーハウス社長、痴漢容疑で逮捕」という記事が掲載されていたが、昨日知った情報以上の事は何も得られなかった。

朝食をとりながら、昨日の関との電話を思い出す。独立を考えた事は一度も無いというのは事実だ。才人は現状に満足している。デスクでボーッとしていても仕事は舞い込む。与えられた仕事不満ならば断ればいい。こんな素晴らしい生活を捨てるなんて事、出来るわけが無い。暁子だって、今のままの生活を望んでいるのだ。

「これ、今日のお昼です」

「ありがとう」才人は笑顔で弁当を受け取る。

「昨日のシチューがまだ残っているので、今夜はこれでグラタンでも作りましょうか」
「任せるよ。それじゃ行って来る」

才人は玄関を出て、ガレージに停めてある車に乗り込む。マイホームの購入と同時期に新車で購入した物だ。元々才人は三鷹に住んでおり電車通勤が日課だったが、結婚後、会社に近い東中野に引っ越した。新築を建てた家主が、一年も経たない内に海外へ永住する事になったらしく、ほぼ新品の状態で才人達の物になった。広いし、日当たりも良いし、騒音に悩まされる事も無い。こんな良い条件の物件が手に入ったのは、以前彼がホームページを手掛けた不動産屋のおかげである。

会社に到着して腕時計を見ると、ジャスト九時半だった。始業時間は九時と決められているが、口煩い社長が居ない日は、社員達はいつもこの時間に出社している。地下の駐車場に車を入れ、エレベーターで十六階を目指す。

コンピュータールームには誰も居なかった。一瞬臨時休業になったのかと思ったが、才人のパソコンに「会議室へ」と貼り紙があったので、首を傾げながら彼は階下に降りる。

会議室のドアをノックし、ゆっくりと開く。社員達が静かに席に着いていた。まるで授業中の教室に遅刻した生徒が入っていく様な、どこか後ろめたい気分が才人を襲う。社員達は誰も才人の方を見ていない。何事かと思い、彼らの視線の先を追うと、会議室の一番奥に、三十代半ばと思われる男が腕組みをしながら座っていた。

「殿様出勤とは、いい身分だな」

その男が才人を見る目は、明らかに不快そうだった。初めて見る顔だ。しかし、誰かに似ている。センターで分けられた黒髪、眼鏡の中から覗く鮫の様な鋭い目つき。インテリ系という感じだった。

「席に着け」

「あの、貴方は？」

「聞こえなかったのか。席に着け、と言ったんだ」

男は威嚇する様な目で才人を睨む。才人は渋々、空いている席に腰掛けた。

「それでは殿様が揃った所で、説明しよう」

男は手を机に置いて、立ち上がった。「社長が不祥事を起こして警察に逮捕されたのは皆知っているな。昨夜臨時で株主総会が開かれ、逮捕された高瀬代表取締役の解任が決定した」

社員達が騒然となる。

「その内容を事細かく説明しても社長の解任は変わらない。単刀直入に報告しよう。現在君達に動いてもらっている三社のプロジェクトの中止が決定した」

「まさか……！」

木下を筆頭に、何人かが口々に叫んだ。才人も思わず目を見開く。

「スカイビル、笹木製菓、梶谷体力開発センター。いずれも数百万から数千万円が動く大プロジェクトだったが、三社とも契約破棄の連絡を入れてきた」

「しかし、契約は既に……」

「我が社の契約書の署名は高瀬社長だ。代表取締役を解任された時点で、これらの契約は全て無効となる」

「再契約をする事は出来ないんですか？」

社員の一人が尋ねた。男はゆっくり首を横に振る。

「勿論、すぐに再契約の段取りを行おうとした。だがクライアントは皆、我が社との付き合い自体を白紙にしたいと言ってきた。原因は社長の不祥事だけでは無い。問題はその後だ」

「後？」

「マスコミの前で、くだらぬ事を言った馬鹿が居たそうだな」

社員が一齐に才人を見る。

「僕が？」才人は呆然とする。

「社長個人の不祥事に対して話し合う事など何一つ無い、責任を取るのは社長ただ一人がいい、そんな風に言ったそうだな。一部の報道ではカットされた様だが、別の報道ではそのまま報じられたんだ。何故こんな事を言った？」

「騒ぎが大きくなるらない様にです」

「この馬鹿が！」

男は机に拳を叩き付ける。「貴様は会社という物が何なのか全然分かっていない。会社という組織に居る以上、一人の不祥事に対しては全員で責任を取るのが当然なのだ。例えば貴様が痴漢で逮捕されたでしょう。その責任は貴様一人が負えば終わりでは無い。社長や他の社員達にとぼっちりが来るのだ。世間は『あの人が痴漢をした』という目では絶対に見ない。『あの会社の社員の一人が痴漢をした』という目で見るのだ。一人のせいでは会社全体が迷惑をする。もしかしたら他の社員も痴漢をやったんじゃないかって疑う輩も出て来る。だからあの場合は、会社の信用がこれ以上失墜せぬ様、マスコミに余計な事は言わず素直に詫びておくべきだったのだ。それを貴様は、自分達には責任は無い、社長一人が責任を取ればいいなどと戯言を抜き、クライアントの神経を逆撫でした。馬鹿な記者な

ら貴様の言う事は間違っていないと思うだろうが、会社の経営に携わった事のある人間であれば、貴様の発言は馬鹿の極みだ！」

彼の言葉は、髭面の男が言った事と全く同じだった。

「何が『日本が誇るウェブデザイナー』だ。こんな馬鹿は日本の埃以下だ。貴様は一ヶ月の謹慎処分。他の者も全員二週間の謹慎だ」

「それじゃあ事実上、営業停止って事じゃ……」田中が言う。

「その通りだ」男は冷たい口調で言う。

「僕の――」

才人が立ち上がった。「僕の発言のせいで、皆まで巻き添えになるのはおかしいと思います。責任を取るなら僕一人で充分じゃないですか」

「これは会社全体の問題だと言ってるんだ」

「では辞表を提出します。それで如何ですか？」

才人は挑戦的な目で男を見据える。「その代わり、他の社員への謹慎処分は無しにして下さい」

「三嶋さん、僕達の事はいいですよ！」と田中。

「そうですよ！ 誰も三嶋さんの事を責めたりなんかしませんって！」

木下が続く。他の社員も何人かが頷いている。才人は男の近くに歩み寄ると、社員バッジを彼の前に置いた。

「貴方が何者なのかは知りませんが、僕個人に対して良い感情をお持ちじゃ無いというのはよく分かりました。僕が辞めさえすればそれでいい。違いますか？」

「随分と偉そうな口ぶりだな」

男は社員バッジを手で弄びながら言う。「ここを辞めて、何かアテでもあるのか？ それとも、独立でも考えているのか？」

「僕を止めるのなら今の内ですよ」

「止める？ 何を馬鹿な事を」

「契約破棄の件だって、どうせ貴方から断りを入れたんじゃないですか。僕を貶めるために。言っておきますが、僕とスカイビールの棚橋たなはしさんとの絆はかなり深い。あの人はそう簡単に契約を切る様な人間じゃ無い。サイダーハウスから僕という優秀な人材を潰した事を後悔するんですね」

才人は勝ち誇った表情のまま、会議室を出た。背後で田中が才人を呼ぶ声したが、「放っておけ」という男の怒鳴り声が聞こえ、その後は何も聞こえなくなった。

エレベーターで最上階に移動し、ラウンジでコーヒーを注文する。才人は自分が間違った選択をしたとは思わなかった。どうして社員が社長の痴漢の尻拭いをしなければならぬのだろうか。全く馬鹿げている。

ウェイターが運んで来たコーヒーを、砂糖もミルクも入れずに才人は飲み始めた。いつもは両方共入れるが、今日は何となく苦いコーヒーが飲みたい気分だった。

才人は鞆を開いた。MOディスクを取り出す。スカイビールのホームページに使おうと思っていたアニメーションが入っている。

(決して無駄にはさせない)

才人は唇を噛み締める。

何となく顔を上げると目の前に根岸多恵子が立っていたので、才人はびっくりしてコーヒーを吹き出しそうになった。彼女は気配を消す事が出来るのか。まるで忍者だ。

「……よくここが分かったね」

「謝られた方がいいのでは」多恵子は静かに言った。

「やっぱり僕が居なくなると寂しいかい？」

「そういう冗談は好きではありません」

彼女は才人を睨んだ。「先ほどの方は、高瀬社長の息子さんです。昨日の株主総会で代表取締役就任したんです」

「ああ……道理で誰かに似た様な顔だと思った。社長だったんだね」

「私は、新社長の言う事は正しいと思います」

「一人は全員のために、全員は一人のために……って考え方は正しくないとは言わないよ。でも、やり方は確実に間違ってる。社長の居ない今、社員全員が協力し合ってプロジェクトを成功させるべきじゃないのかな。社員全員が不祥事の責任を取られるために営業停止なんかしたって、何のプラスにもならない」

「社長が逮捕されているのに、平然とプロジェクトを進めるのは非常識だと言ってるんです。そんなのは、会社にとってマイナスのイメージにしかありません。ここは控え目な態度を取って、ほとぼりが冷めるのを待つべきです」

「終わった事をいつまでも話していても仕方が無い。とにかくもう決めた事だ」

才人は伝票を持って立ち上がる。「このコーヒーも今日で飲み納めか」

「会社を辞めて、どうするつもりなんですか」

「僕個人で、スカイビールのプロジェクトを継続するつもりだよ」

「三嶋さん……」

「さようなら」

才人はラウンジの出口で多恵子に手を振った。彼女の表情は相変わらず怒っているのか呆然としているのか、全く読み取れなかった。

スカイビールのプロジェクトは、才人が今までの人生の中で最も力を注ぎ込んだ仕事だった。正直、根岸多恵子と交わした責任云々の話などどうでも良かった。辞表を提出するに至った理由は、その事とは全く無関係だ。才人が全身全霊で注力した仕事を社長親子に簡単に潰されてしまい、頭に血が上っていた。ただそれだけの理由だった。

サイダーハウスを離れて、自分の力でプロジェクトを成功させる。そして高瀬ジュニアを天高くから見下してやるのだ。

(どちらが馬鹿なのか、今に分かる)

スカイビールの担当責任者である柵橋とは、二ヶ月間打ち合わせを重ね、かなり親しい仲になっている。サイダーハウスとしては無く、才人個人が仕事を引き受ける形にすれば、プロジェクトを続ける事は可能だろう。パソコンさえあれば、いつでもどこでも仕事出来る職業だ。

才人は高瀬ジュニアに退職願を提出し荷物を簡単に纏めると、サイダーハウスを後にした。柵橋のケータイに電話してみたが、留守番電話に繋がった。「三嶋ですが、また連絡します」とだけ吹き込むと、地下駐車場に向かう。

車に乗り込み、これからどうするかを考える。夕べの関との会話がやはり頭に浮かんで

来る。会社を作る。悔しいが、今の自分はそれが簡単に出来る状況になってしまった。

会社設立に関する知識は、才人には殆ど無い。個人事業主としてやっていくより、法人化して動く方が、信頼性が向上し社会的地位も強くなるだろうという事だけは知っていた。(関に連絡を取ってみるか……)

才人には一から勉強している時間は無い。もたもたしていると、スカイビールのプロジェクトが他の会社に流れてしまう。会社を作ると豪語した関なら、きっとその辺りの事に詳しいだろう。

(しかし……)

会社を作る事を、関には昨夜拒んだばかりだ。「今更そんな事を言われても知るか」とそっけなく返されるか、「ほら、俺の言った通りだろ」と勝ち誇った態度を取られるか、いずれかに違いない。そう考えると、ずっしりと気が重かった。

それに、気掛かりな事はもう一つある。暁子の事だ。「今のままの僕で居る」と約束したのに、彼女に相談もせずサイダーハウスを辞め、現状を維持出来なかった事に、どうにも心が痛む。むしろ電話するなら、関よりも暁子の方が先かも知れない。帰る事にした。

5

車をガレージに停めた時、家の前を瘦せぎすの男がトボトボと歩いているのが才人の目に留まった。ぐしゃぐしゃに乱れた髪、落ち窪んだ目、鼻の下には豆粒大のニキビが点々と浮かんでおり、全くと言っていいほど清潔感が感じられない。彼は右手にコンビニの袋を持っており、カップラーメンのパッケージが透けて見えている。昼食を買いに行った帰りなのだろう。

「芳賀君」

車を降り、才人は声を掛けた。芳賀明彦は才人の方を見るとニタニタと笑みを浮かべ、袋を軽く持ち上げる。

「それ、昼飯？」

「は、はい、そうです」

「カップラーメンばかり食べてると、体壊すよ」

「だ、大丈夫、です」

彼はオドオドした口調でそう話すと、頭に手をやり、髪を掻き乱す。

「新作のゲームの方は順調？」

才人が訊いた。芳賀は去年高校を卒業してから、ずっと自宅に籠もってフリーランスでゲーム制作の仕事をやっているのだ。ゲームの事だけで無く、パソコン全般に関してかなり精通しており、以前才人の自宅のパソコンがウイルスに侵された時、隣に住む彼に直してもらった事がある。

「順調、でも無いです……。よ、四郎の^{よんろう}仕事が、遅くて」

四郎と言うのは、彼の唯一無二の親友、桶谷^{おけや}四郎の事だ。芳賀が作成しているゲームのグラフィックを担当しているのが桶谷である。

「今度のもエロゲーなのかな？」

「いい、いいいえ、エロくないです全然。じ、実は今作ってるのは、ホラーゲームなんです、ふふっ……」

「ホラー？ バイオハザードみたいなの？」

「いえ、ちよつと、違う……。夜の学校が舞台、七不思議、ヒロイン、学校から出られない……」

彼の話し方の方がよっぽどホラーっぽいな、と才人は思う。

「何となく分かったよ。学校の怪談だね」

「そう、そうです」

「完成楽しみにしてるよ。君のゲーム結構面白くて、デザインの参考になるから」

「は、はい、是非……。あの、三嶋さん……今日、会社は？」

「うん……」

才人は一瞬返答に困る。「長期休暇」

キョトンとする芳賀を残し、才人は自宅へと入って行く。玄関で「ただいま」を言っても返事が無かった。鍵は掛かかっていなかったで、もしかしたら隣の家何か用事で出かけたのかも知れない。芳賀明彦の家は三嶋家正面向かって左隣にあるが、右隣には暁子と大の仲良しである五十嵐いがらしさつき早月という婦人が住んでいる。

早月の夫は外資系の企業に勤めており、現在中国に単身赴任している。子供も居ないし寂しくは無いのかなと才人は思うが、奔放とした優雅な生活を送っているらしい。

才人はリビングに入ると、ソファーに横になった。スカイビールの棚橋にもう一度電話を掛けてみるが、また留守番電話に繋がった。

(……よし)

才人は勢い良く立ち上がると、タンスの中から昔使っていた手帳を取り出す。

(確か、住所は変わっていないはずだ)

住所録から関丈史の名を見つけ、電話を掛けた。五回ほどコールした後、眠そうな声でハイと応える関の声が聞こえた。

「もしもし、三嶋だけど」

『ご機嫌よう、分からず屋くん』関の声は眠そうだった。

「随分と機嫌が悪いんだな」

『くうー！ 二日酔いなんだよ。飲み過ぎちまったみたいだ。テーブルの上に缶ビールが六本も転がってやがる。三本目までは記憶に残ってるんだがなあ』

「やっぱり昨日は、ヤケ酒飲んで電話して来たんだな」

『会社の話は本気だぜ。もういいけどよ』

「状況が変わった。会社の話、受ける事にするよ」

才人がそう言うと、約三秒間の沈黙が続いた。

『……本当か？』

「ああ」

『本当の本当に？』

「本当だ」

『絶対神ギンガムに誓って？』

「誰だよ、それは。事情があってサイダーハウスに退職願を出したんだ。いつからでも始

められる」

『ひゃっほうー!』

関が突然大声で喚き始めたので、才人は思わず耳元から受話器を遠ざける。

『俺とお前の名コンビで会社を起ち上げれば、億万長者間違い無しだ!』

「大袈裟だな……。早速だけど詳しい話に入りたい。すぐに打ち合わせしよう」

『いいね、いいね。酒でも飲みながら盛大にやろうぜ』

「真面目にやれよ。今から家に来ないか?」

『OK』

才人は自宅の場所を告げる。関は一時間後に行くと言えると電話を切った。

暁子是一向に帰ってくる気配が無い。鍵も掛けずにどこへ出掛けたのだろうか? 才人は窓からチラチラと外を眺めるが、人っ子一人歩いていない。

リビングをざっと見渡す。綺麗に片付けられているので、掃除してから出て行った事は確かだ。この部屋にはパソコンが二台あるが、両方とも念入りに磨かれている。一方は暁子が家計簿をつけたりゲームをしたりする用のウインドウズ、もう一方は才人専用のマックキントツシュである。いずれのマシンもルーターに繋がっており、インターネットが可能である。

才人はマックを起動し、メールチェックを行った。ダイレクトメールが数通と、藤原千鶴からメールが届いていた。

ちづる☆です。

会社やめたって、どーゆーコト?

あたしの居ない間に新社長が決まるわ(しかも超ヤな感じ)、

才人はやめちゃうわ、

笹木製菓の仕事が無くなっちゃうわ、

二週間の臨時休業になっちゃうわ、

マジ信じらんない!

今度会った時、納得の行く説明をヨロシク。

笹木製菓のトップのイラスト、

自信作だったのになー。

残念。しくしく。

まあいつか。

ボツになった絵はあたしのホームページで

フリー素材として配布しよう。

あ、そうそう、

あたしが出社した時さ、

才人の席に変な男が座ってたのよ。

才人の知り合いかなって思って声掛けたら、

無言で出て行っちゃった。
こいつもヤな感じの男でした。
偉そうにヒゲ生やしてました。

ではでは。チャオ！

(髭の男……)

才人は昨日の騒動を思い出す。あの男は一体何者なのだろう。コンピュータールームにまで入り込んでいるという事は、今回の新社長就任と何か関係があるのかも知れない。

それにしてもサイダーハウスは結局、二週間の臨時休業になってしまったのか。意味のある休業だとは思えないが、新社長が何をしようと、もはや自分には関係の無い事だ。あの会社とは縁を切った。しかしこちらの会社が軌道に乗ったら、サイダーハウスの社員を全員引き抜いてやろうと才人は考え、思わず笑みがこぼれ始める。

プロジェクトが全て中止になった事により、田中や木下に作業を引き継ぐ必要が無く、才人がスムーズに退職出来た点は有り難かった。全てが才人の都合のいい様に動いている。唐突に玄関で物音がしたので、パソコンを終了させる。このマックは八年前の機種なので、かなり反応が鈍い。

(会社を始めるなら、もっとスペックの高いマシンを入れた方がいいな)

彼はそう思いながら玄関に向かうと、暁子がびっくりした表情で立っていた。

「才人さん……会社は？」

「うん……」才人は一呼吸置く。「辞めた」

「辞めたって、一体どういう事なんですか？」

彼女はショックを受けた様子だった。二人はリビングに移動し、ソファアに並んで腰掛けた。才人は簡単に事情を説明し始める。暁子はしばらく心ここにあらずという感じで、黙って床を見つめていた。才人は最後に小さく「ごめん」と謝った。

「……どうして、私に相談して下さらなかったんですか」

暁子は哀しげに言った。彼女の瞳はうつすらと潤んでいた。

「でも、そんなに悪い事ばかりじゃ無いと思うんだ。毎日君の傍に居られる様になるし」

「私は、何の相談も無しに勝手に才人さん一人で……こんな重大な事をあっさり決めてしまったのが哀しいんです」

「相談したら、賛成していたかい？」

「勿論、反対してました。だって私は……サイダーハウスに勤めている才人さんが、好きなんです。田中さんや木下さん、藤原さん達と一緒に、一つのプロジェクトに打ち込んで頑張っている才人さんが好きなんです。新しい社長のやり方が気に入らないだけで……たった三つプロジェクトが駄目になっただけで、他の社員を見捨てて辞めてしまうなんて、そんなの才人さんじゃありません！」

暁子は目を潤ませながら、才人を上目遣いで睨む。いつになく興奮していた。

「……勝手に辞めてしまった事は謝る。だけど新社長のやり方がこのまま続けば、必ずサイダーハウスは潰れる。それが目に見えて分かるから、僕はこうする事を決意したんだ。それに他の社員を見捨てたつもりは無い。僕自身が会社を起こして、新社長の餌食となっ

た社員達を救う。僕が、新しいサイダーハウスを作る」

「会社を……？」 暁子は目を丸くする。

「そうだよ。関と一緒にだけど」

「……出来るわけありません。会社を作るといふ事がどんな事なのか、才人さん全然分かっていないんです」

暁子は額に両手を置く。「私の父も、才人さんの様な野望を持って、小さいながらも会社を持った事があります。父には画期的な玩具を生み出す才能がありました。だけど父が今まで勤めていた会社が圧力をかけて来たんです。そのせいで父の作った製品はどの企業にも相手をしてもらえず、日の目を見ないまま、多額の負債を抱えて倒産してしまいました。それからしばらくして、父の企画した玩具と全く同じ物が、別の会社から販売される事になりました。盗用したと訴えても、大企業相手には勝てません。それどころか父の会社が逆に訴えられそうな勢いで……。『素人が会社なんて始めるもんじゃ無いな』と父は笑っていましたが、きつと、とても悔しかったと思います。会社は、才能を持った人間なら誰でも作れる物じゃ無いんです。特に、才人さんの様な人間には、絶対に無理なんです」

才人は黙って彼女の話を聞いている。

「私が才人さんと初めて出逢った時、本当に父に似ているなと思って思いました。才能と自信に満ち溢れていて、人とは違う創造力がある。そういう所に惹かれました。……才人さんがずっとこのままサイダーハウスで活躍し続ける事を望んでいたのは、独立して、父の様な末路を辿る事が怖かったからです。才能と自信、創造力だけで会社を成功させる事なんて出来ないんです。そういう世界なんです」

暁子はそれだけ言うとは静かになった。数十秒間の沈黙が続く。壁に掛けられた時計の音だけが緩やかにビートを刻んでいる。才人の意識はその音から離れていく様にして、深い心の波の中へと沈み込む。

暁子の言う様な末路を辿る事はゼロだ、と才人は思う。

第一に、彼女の父の頃とは確実に時代は変わってきている。才人よりもずっと若い人間がビジネスの世界で活躍している時代だ。その誰もが経営学をマスターしているとも思えない。才人の様な素人でも、徐々に勉強しながら会社を経営してゆく事は出来るはずだ。

第二に、才人は初期投資で借金をするつもりは無い。そんなリスクは一切負わない。オフィスは自宅をそのまま使えばいいし、ウェブデザイナーの仕事はパソコンが一台あればいいだけなので、貯金の範囲内で仕事環境は全て整う。

第三に、現在のサイダーハウスには才人に匹敵するほどの人材が居ないという事だ。優秀な人材を引き抜く事もすぐには難しいだろう。コンペでサイダーハウスとぶつかりあったとしても、勝つ自信はある。

才人は真剣な眼差しで暁子を見つめると、彼女の両手を握る。

「君に迷惑は掛けない。僕を信じて欲しい」

暁子は虚ろな表情で握られた手を見つめている。迷っているな、と才人は察した。

「……分かりました。もう、才人さんの思う様にして下さい」

彼女は諦めた様に肩を落とすと、立ち上がった。

「どこへ？」 才人が訊く。

「早月さんとお買い物に出掛けて来ます。待たせてあるので」

「もうすぐ関が来るんだけど、もし夕食の買い物に行くなら彼の分も買ってきてくれないかな？ あと、僕の昼飯は弁当があるから、五十嵐さんと何か食べて来るといい」

「分かりました」

「怒ってるかい？」

「いいえ」 暁子はにっこりと微笑んだ。「行って来ます」

6

関丈史は、電話から一時間も経たない内に現れた。

バイクで颯爽と現れた彼は、門前で待っていた才人に白い歯を見せる。かなり大きめのリュックサックを背負っていたので、まさか本当に酒でも持って来たんじゃないかと疑いたくなるほどだ。

関は「よいしょっ」と言う掛け声と共にフルフェイスのヘルメットを脱いだ。スポーツ刈りの茶髪。それ以外は二年前と殆ど変わらない。百九十センチの長身、細身だが筋肉質な体型。ワイルドな顔立ちは、大学で女性達の視線的だった。ただ、男友達は少ない。才人自身は思わないが、彼の様なタイプは他の男から疎まれていないのかも知れない。

「でけえ家だなあ」

挨拶より先に、彼は才人の家を眺め回す。「いい事を思いついたぞ。この家をオフィスにするのはどうだ？ それなら賃料は掛からないから、経費が浮く」

「そのつもりだ。でも、このままだとお客さんと打ち合わせする場合に不便だから、少しだけリフォームしたい」

「客との打ち合わせなんか喫茶店でやればいいじゃん。ここは、あくまでも作業場として利用するだけにしようぜ。一階に空いている部屋は無いのか？」

「リビングを除けば、書斎があるけど……」

「書斎？ それだ！ それで行こう！」

関は両手をパンと打って、戸口へと進む。家主の才人が慌ててそれに続く形になる。

書斎と言っても単に本を置いておくためのスペースであって、広さ八畳ほどの洋間である。玄関を抜けてすぐ右側にあるため、ここをオフィスルームにするのは悪くないかも知れない。

「ここにパソコンを二台置く」

関は両腕を広げる。「一つは才人のデスクトップ、もう一つは俺のノートパソコンだ。心配するな、既に秋葉原で格安の良品に目をつけてある。……そして、この辺りに作業用の丸テーブルを置こう。丸い方がスペースをとらなくていいだろう？ うん、本棚はそのまま使えるな。コピー機は……まあプリンタさえあれば必要無いだろう。電話がそこかな」「随分と勝手に決めてくれるじゃないか」 才人は関を睨む。

「善は急げ、って言うだろ？」

「急がば回れ、とも言う」

「そんな言葉は俺の辞書には無い。よし、とりあえず仕事場はこれで問題無いな。さあて、本題に入ろう」

「じゃありビングへ」二人は移動する。

トントン拍子に物事が進んでゆく。本当に関に任せてしまってもいいのだろうか。「ところで会社を辞めた理由って、何だ？」

ソファアの座り心地を楽しみながら、関が訊いた。

「色んなタイミングが重なったから……かな」

「何だそりゃ。まあいいさ。人それぞれ、言いたくない秘密もあるって事か」

「別に秘密じゃ無いけど」

「じゃあ本題。まず社長はどっちがやる？　って言いたい所だけど、これは知名度のある人間がやった方がいいだろうな」

「分かった。僕がやるう」

「よし。次に、会社の形態だな」

「形態って言うと、株式会社とか、有限会社とか？」

「それぞれ。株式会社を設立するには一千万円の最低資本金ってのが必要ならしいけどよ、そのうち法が改正されて、資本金がいくらからでも始められるんだってさ。有限会社っていう形態も来年春には廃止されるらしい」

「意外に勉強しているね」

「お前と違って営業畑だからな。その辺の情報はよく耳にするんだよ」

「いずれ有限会社が無くなるなら、作るのは株式会社の方がいいのかな？」

「いや、株式会社は難しい。取締役や監査役を複数置かなきゃいけないし、取締役会や株主総会など絡んでくると、頭がこんがらがって来る。二人でやるなら、少ない初期投資ですぐに始められて、会社法にうるさくない合資会社がいいだろうな」

「じゃあそれで」

「会社名はどうするよ？」

「会社名か……」

「実はさ、ここに来るまでの間に色々と考えて来たんだ。才人の『サイ』と、文史の『タケ』を合わせて、サイタケ。合資会社サイタケと言うのはどうだ？」

「権茸みたいだね。……他には？」

「三嶋の『ミ』と関の『セキ』を合わせて合資会社ミ……」

「名前の組み合わせ以外の発想は無いのか？」　才人は口を尖らせる。

「へいへい、どうせ俺はセンスの無い男ですよ」

関が拗ねたように頬を膨らませた。「じゃあお前が考えてくれよ」

「そうだね、僕なら……」

才人は人差し指を回しながら考え込む。「僕はウェブデザインで最も大切な物は、インパクトだと思ってる」

「合資会社インパクト？　それはいくら何でも……」

「うん。インパクトという名前の会社は結構あると思う。だから使えない。そこで普通ならインパクトという言葉を選び替えるとか、フランス語やスペイン語で同じ意味の言葉に訳すとかするだろうけど、これもまたありがちな。第一、インパクトという単語を並べ替えてイントパクとか、パンクトイなんかにしても、お客さんにはこれが何の事なのか意味が伝わらないだろう？　フランス語やスペイン語もまた同様だ。フランス料理やスペイン料理の店ならそれでもいいと思うけど、日本のウェブデザイン会社でそんな他国の言葉

を使った所でナンセンスだ」

「じゃあ、どうするんだ？」

「日本人らしく漢字にするんだ。インパクトをね」

「そんな漢字があるのか？」

「無い。だから当て字にする。例えば『印白塔』^{いんぱくとう}という様に」

「なるほど！ さすがだなあ」

「カゲの薄い島と書いて『陰薄島』とか。本当はこういうのが面白いんだけどね。さすがに会社名でこれをやると縁起が悪いから、『印白塔』で行こうか」

「決定！」

関は一人で手を叩いてはしゃいでいる。「事業計画とか、そういう堅苦しいのは徐々に考えて行けばいいよな。とにかく会社名、形態、代表者、事業内容、所在地……これさえ決まれば定款を作れる。テンプレートも用意してある」

彼はリュックサックから、何枚かの書類を取り出してテーブルの上に並べた。定款や登記申請書などの他、法人設立に関する資料やQ&Aなどが印刷されている。相当な量である。

「昔だったら図書館で調べ物か、本屋で買い物つて所だけど、インターネットつてのは便利なものだな。知りたい情報をすぐに探せて、こうしてプリントアウト出来て」

「君の家にもインターネット環境があるのか？」

「まあね。可愛い娘とチャットするぐらいだけだな。でもこの資料は、ホテルが潰れた日に企画営業部のパソコンでこっそりプリントした物だ。どうせ退職金なんか出やしないんだ。会社の金でやりたい放題させてもらっても罪は無いだろう」

「どうせ会社のパソコンでHなサイトとか見てる口だろう？」才人は笑う。

「馬鹿、知らねえ女のエロなんか興味無いっての！」

関が才人を小突く真似をした時、玄関の方でゴトリと音がした。少し遅れて「ただいま」と暁子の声。才人がそれに応えると、関は慌ててテーブルに散らかった書類を一纏めにし始めた。

「や、どうも奥さん！」

リビングにやって来た暁子に、関は懇切丁寧に頭を下げる。口調もいつもよりトーンが半オクターブは高い。学生時代、学内でナンパをする時と同じ口調だ。才人は彼を横目で睨んだ。

「関さん、お久しぶりです。お変わりありませんね」

買った物袋を両手に抱えていた暁子は、関と同じぐらいの角度で頭を下げ、少し微笑んだ。

「奥さんの方は若返ったんじゃない？ どう見ても女子大……」

「随分買ってきたんだね」

才人は暁子が抱えている買った物袋を指差しながら、関の言葉を遮る。

「はい。今日は冷えるので、グラタンはやめてお鍋にしました。早月さんや芳賀さんも一緒に。関さんも食べていらして下さいね」

「いやあ、嬉しいなあ。楽しみにしてるよー！」

暁子がダイニングの方に消えると、彼は表情を急に变えて才人を訝しげに見つめる。

「奥さんには会社の事を話したんだな？」

「ああ、うん。話すには話した」
「なるほど。つまり話したけど、納得はしていないってわけか」
関は顎に手をやると、リビングのドアを見つめる。「才人、俺は何十人もの女と付き合っ
て来たから分かるんだが……彼女の顔、微かに泣いた跡があるぜ」

7

五時半に五十嵐早月が訪れて暁子と一緒に料理の準備を始め、六時少し前に芳賀明彦が
現れた。芳賀は昼前に才人が会った時の服装とはまるで違い、しっかりとアイロンの利い
たワイシャツを身に着けている。髪も整っているの、彼なりにエチケットに気を配った
と思われる。

ダイナーは六時半に始まった。ダイニングテーブルに置かれた寄せ鍋を五人の人間が囲
む。北側に暁子と芳賀、東側に早月、南側に関、西側に才人がそれぞれ座っている。この
席順は誰が決めたわけでも無いのに最も適した座り方だ、と才人は思う。

東西に伸びる長方形のテーブル。関は人一倍肩幅が広いので、南側を陣取っているのは
正解だ。又、家主である才人が上座に居るのも正しい。夫婦である才人と暁子は角で隣り
合っているし、気の小さい芳賀が、見た目ワイルドな関から最も遠い位置に居るのもまた、
正解と言える。人は無意識の内に最適なポジションを選んで生きているのかも知れない。
「やっぱり冬と言えば、あつたかいお鍋よねえ」

毎年お決まりになっている様な台詞を、五十嵐早月が言った。「今年の風邪はタチが悪い」
とも先ほど言っていた。夫がエリートとは思えないぐらい、彼女はどこにでも居る、絵に
描いた様な普通のおばさんっぽい。

「ウチもインターネットを始めようと思ってるの。中国に居る主人がねえ、本当に寂しが
り屋なもので、メールをしようメールをしようって電話でうるさくって」

「そんな事言って、本当は早月さんの方が寂しいんじゃないですか？」

ニヤニヤしながら関が言う。早月とは初対面のはずなのに、相変わらず馴れ合うのが得
意な男だ。

「嫌だわ、この年になるとね、寂しいなんて感じないのよ」

「ご主人は年下なんですか？」

「そうよ。彼はまだ三十四。私は今年で四十」

「えーっ、全然見えないっすよ！ 暁子さんと同じ歳かと思った」

「それは暁子さんに失礼だわ」早月と暁子が微笑を浮かべる。

「……あの、美味しいです」

芳賀がニタニタと笑いながら、突然会話に割り込んだ。暁子はびつくりした様に隣を見
るが、すぐに笑顔になって礼を言う。

「おぼっちゃま、野菜も食えよ野菜も」関が箸で春菊を示す。

「いえ、僕はその……」芳賀は慌てて首を横に振る。

「芳賀君は野菜が駄目なんだよ、関」

才人が代わりに説明してやる。「しかしそれでよく太らないもんだね」

「ええ、まあ、何かそう言う体質みたい……です」

「羨ましいわあ。私なんかこの間のケーキバイキングで、一キロも増えちゃって。細い人を見ると、キーツてなっちゃうのよねえ」

早月が高らかに笑い始める。芳賀は無言のまま笑みを浮かべている。

「ねえ、インターネットって、ダイエットの情報なんかも載ってるんでしょ？」

「沢山ありますよ」

才人が答える。「ただ、最近は情報量が多すぎて、どれが一番信用出来るのか判断が難しい所です。中にはデタラメな情報もありますから、注意が必要です」

「本物と偽物の見分け方って、どうやるの？」

「そうですね……なるべく規模の大きなサイトの方が安心でしょう」

「サイト？」

「ああ、ホームページの事です」

「びっくりした。ご主人の名前かと思っちゃった」早月は笑う。

「こいつはホームページを作るために生まれてきた様な男ですからね」

関が才人を指差して言う。「今度こいつと会社作る事になったんですけど、彼が社長やるんですよ」

「まあ！ それは凄いわ！」早月が感心した様に才人を見つめる。

「おい……」

「もう少し野菜切りましょうか」

暁子が立ち上がり、キッチンに向かう。表情は見えない。

「……少しは空気読んでくれよ。今そんな話しなくても」才人は小声で関に言う。

「別に隠す必要は無いだろう。ご近所さんの前で堂々と発表しておけば、味方が増えていいる？」

「あおう、会社って……」

芳賀が何故か手を挙げながら発言する。「ホームページの制作会社ですか？」

「うん、まあ」才人は頷く。

「ふふっ……面白そう、ですね。僕に何か手伝える事があれば、遠慮なく言って下さい……。ライバル会社のコンピュータをハッキングしたり……お安いご用ですよ」

「ハッキング？」関はギョツとした表情になる。

「冗談ですよ……ふふっ」

「ねえ、ハッキングって？」早月は才人に尋ねる。

「簡単に言えば、他人のパソコンに不正に侵入して、データを盗んだり、改ざんしたり、削除したりする事です。ハッカーって言葉をご存じないですか？」

「ああ、そう言えば聞いた事があるわね」

「本来はハッカーと言うのはコンピュータに精通した人の事を言うんですけど、世間的にはそういう犯罪を行う者をハッカーと呼ぶ人が多い様です」

「へえ……怖いわね。じゃあウチのパソコンも、ハッカーにデータを盗まれたりするのかしら？ 日記をつけているの。読まれたら恥ずかしいわ」

「基本的にインターネットを使わず、他人とデータのやり取りをしなければ大丈夫です」

「それなら安心だわ。私のパソコン、今まで他の人に使わせた事が無いもの」

早月はホッと胸を撫で下ろした所に、暁子が白菜を切って持って来た。鍋に入れると、

無表情のまま彼女は席に着く。才人は暁子の様子をしばらく伺っていたが、ディナーの間、彼女が才人と目を合わせる事は一度も無かった。

8

二週間が過ぎた。クリスマススイブである。

法人登記が無事完了し、『合資会社印白塔』のプレートを三嶋家の門に掲げ、才人と関はその前で一息ついていた。

この二週間、暁子は口数はめっきりと減った。元々あまりよく喋るタイプでは無かったが、才人が話しかけない限り減多に口を利かなくなってしまうた。「会社が軌道に乗れば、奥さんはきつと以前の様に戻るさ」と楽天的な事を関は言うが、才人は出来れば今すぐにも元の暁子に戻って欲しいと願っていた。

暁子の口数が少なくなるにつれ、才人の元氣も確実に無くなっていった。いかに彼女の存在が大きかったかという事を、彼は自覚した。彼は暁子を愛している。彼女の本当の笑顔を取り戻すためなら何だってやりたい。しかしその方法は、才人がサイダーハウスに戻る事以外無いのかも知れない。

藤原千鶴からのメールでは、二十六日からサイダーハウスは営業を再開するらしい。世間は元の社長が痴漢容疑で逮捕された事など、既に忘れてしまっている。また、才人が独立した事も、二日間、一部の報道で話題になっただけだった。

鍋パーティーの三日後、スカイビールの棚橋によく連絡が取れた。「プロジェクトを続けたい」と才人が言うと、「その件で貴方とお話がしたいと思っていました」と彼は快く答えたので、今日の午前十時に会う事になっていた。

「スカイビールのプロジェクトって、そんなにでかいのか？ たかだか新発売のビールの広告なんだろう？」

関は印白塔のプレートを撫でながら訊いた。彼のビジネススーツ姿を見るのは新鮮だ。ホテルに勤めていた頃は、毎日同じスーツを着ていたのだと言う。才人は、自分よりも彼の方が、スーツが似合っている事が、少し悔しかった。

「発売は来年の夏だが、サンプルテストイングの段階で女性やお年寄りに大好評らしいから、爆発的なヒットになるのは間違い無い。その収益を見込んで、僕はこのプロジェクトに三千万円の価値を付けた」

「すっげえなあ。じゃあそれ一つで、三年間は遊んで暮らせるじゃねえか。パソコンでちまちな仕事して、そんなに稼げるんだな」

「この費用はトータルだから、実際はパンフレットやポップ、パッケージの印刷代、テレビCMやラジオCMなどの制作費に削られるけど、それでも半分は僕達の物になる」

「持つべき者は友だな。才人様に感謝感謝」

関は才人の肩をポンポンと叩く。「さっ、そろそろ行くこうぜ」

才人と関がガレージへと歩きかけた時、玄関から暁子が出て来た。ロングコートを着込んでおり、左手に大きな鞆を持っている。

「まさか、家出か？」関が才人に耳打ちする。

「いや……」才人の心臓の鼓動が早くなる。

暁子は玄関に鍵をかけ、門の前に居る才人の方を振り返る。

「出掛けるのかい？」才人が訊いた。

「実家の両親が風邪で倒れたと連絡があったので、今から行って来ます」

「それは大変だ、僕も行くか？」

「いえ、才人さんは大切な打ち合わせがあるでしょう？ 父達の具合が良くなったら、今夜中に戻りますから……」

「慌てなくてもいいよ。お義父さん達を大事にして」

「……やっぱり、私がお家に居るとお邪魔ですか？」

「そんな事は言っていない」

「……ごめんなさい」

暁子は頭を下げると、駆け出した。駅まで送って行くかと思ねる隙も無いほど、彼女は急いでいた。彼女の姿が見えなくなるまで、才人は虚ろな表情で見つめていた。

「おい、俺達も急がないと」関は腕時計を見ながら言う。

「……ああ」

二人は車に乗り込んだ。エンジンが低い唸り声を上げ、滑り出す様に発進する。

スカイビールの本社は新宿にある。高層ビル群の一角にあり、メトロタワービルとは目と鼻の先だ。

新宿区内に入ると、関は助手席でしきりに爪を噛み始めた。そう言えば彼が勤めていた東京トワイライトホテルも、確かこの近くにあるのだ。関にとっても才人にとっても苦い場所である。二人の幸せの場所に変えられる様に頑張らなくては、と才人は意気込む。

来客用駐車場に車を止め、エレベーターで柵橋に指定されたフロアへと進む。ピカピカに磨き上げられた床を、二人はなるべく音を立てない様に慎重に進む。『企画宣伝部』と書かれたドアを見つけ、受付の女性社員に声を掛けると、すぐに彼が現れた。

「どうも柵橋さん、お久しぶりです」

「こちらへどうぞ」

柵橋守は、とても険しい目つきで才人達を奥に案内する。プロジェクトの打ち合わせの時には穏やかな顔だった彼の顔つきが、何故かこの一ヶ月の間に鬼の様に変貌してしまつた様に見える。とても同一人物だとは思えなかった。

丸テーブルの置かれたブースまでやって来た時、関は名刺を差し出そうとしたが、柵橋は「結構」と手で制した。柵橋は二人に席に着く様言い、煙草に火をつける。

「例のプロジェクトの件だが……」

柵橋は煙を吐き出しながら才人を見る。「直接私の口から話さないと、君には信じてもらえないだろうと思ってね」

「どういう事ですか……？」

「我々が契約破棄をした真意だよ。正直に言おう。我々はサイダーハウスを切ったわけじゃない。君を切ったんだ。三嶋才人君」

「そんな……！」才人は思わず目を見開く。

「会社とはね、三嶋君」

柵橋は灰皿に吸い殻を押し潰す。「どんな場合にでも役員と社員が一丸となって、事業に取り組む物なのだよ。自分が担当していたプロジェクトを優先させたいが為に、誰か一

人が責任を取ればいいなどという考え方は、一社会人として失格だ。最初は面白い考え方をする男だとは思っていたが、ここまで社会のルールを弁えていない男とはね。だから契約破棄を決意した。これは私一人の意見では無い。プロジェクトに携わった我が社の人間は皆そう思っている。きつと、ニュースを見ていた他のサイダーハウスのクライアント達も、我々と同じ考えを持っただろう」

「しかし！ スカイビールのプロジェクトは、僕の力無しでは絶対に……」

「君は自分を神様か何かと勘違いしているのかね？ 言い方は悪いかも知れんが、君の代わりなど世の中に吐いて捨てるほど居る。現に今回のプロジェクトでは、君以外にも候補は沢山あった。役員投票の結果、僅差で君に決まったに過ぎない」

「何とか……考え直して頂くわけにはいきませんか！」

才人はテーブルに両手を着き、顔を伏せながら声を上げた。「このプロジェクトは、僕が今までに作ったプランの中で、最高の出来だと思っっています。これで打ち出せば、確実に……」

「残念ながら、もう決まった事だ。お引き取りを」

柵橋は顎で出口を指し示す。「もう会う事も無いだろう」

「柵橋さん……」

「……才人、行こうぜ」

関が才人の肩を掴む。才人は黙って頷くと、肩を落として宣伝部を後にした。

才人はエレベーターの中でずっと首を項垂れたままだった。

「しかし頭来るよなあ、あの柵橋って奴。断るんならわざわざ俺達を呼ぶなっつーの。気にするなよ才人。物の考え方なんて人間皆バラバラなんだから、お前の意見が嫌いな奴も居れば好きな奴も居る。気の合う奴とだけ仕事すればいいさ」

関の言葉が右耳から入り、左耳へと抜けていく。もう何をする気にもなれなかった。何を考える気にもなれなかった。信頼していた柵橋に「三嶋才人」という人間そのものを否定された感覚だ。柵橋だけでは無い。高瀬ジュニアも、根岸多恵子も、そして暁子も――。

(僕は……どうすればいい?)

(どうすれば……)

才人は運転席に座りながら、しばらく虚空を見つめていた。

「……なあ、飯でも食って帰るか？」助手席で関が訊く。

才人は答えない。

「それとも、気晴らしにナンパでも行く？」

才人は答えない。

「……このまま帰る、か？」

才人は黙って頷くと、エンジンを掛けた。

まるで風邪を引いた様な倦怠感と、

地の底に突き落とされた様な絶望感が、

全身を覆い尽くして離れなかった。

どうやって自宅まで帰ったのか、覚えていない。

車中、関が何を話したのかも、何も覚えていない。

(僕は……どうすればいい?)

脳天を突き破る様な大きな電子音が才人の意識を呼び覚まし、彼は突如現実世界へと引き戻される。

瞼を開け、しばらく瞬きを繰り返す。随分と眠っていた気がする。リビングのソファに変な体勢で凭れ掛かっていたせいか、身体中の関節が痛かった。電子音はまだ鳴り続けている。

才人はむっくりと身体を起こし、暗闇の中、手探りで照明のスイッチに触れる。電子音の正体が電話の音だと気付いたのは、部屋に灯りが点されて三秒後の事だった。

「もしもし……三嶋です」才人は目をこすりながら電話に出る。

『こちらは志村警察署の者ですが』

よく通る男の声。また関のイタズラじゃないかと思ったが、才人の声紋データベースの彼の声とは一致しない。まさか本物？ 志村警察と言えば、確か板橋区の警察署だったはずだ。一体何の用事で掛けて来たのだろうか。才人の身内や友人でその地に住んでいる者は居ない。

『三嶋暁子さんのご家族の方ですか？』

「暁子は僕の妻ですが……何か？」才人は首を傾げる。

『荒川河川敷で三嶋暁子さんが倒れているのが発見されました。意識不明の重体で、現在板橋区内の都立S病院に搬送されています。そういう訳なので至急病院の方まで……もしもし？ もしもし、ご主人？ ……』

才人は受話器を放り投げて、すぐさま駆け出した。車に飛び乗り、勢いよくエンジンを吹かし、カーナビをセットする。アクセルを踏み込む右足に力を込める。人通りの無い幾つかの交差点では信号を無視した。

約三十分後、S病院の駐車場に車を猛スピードで滑り込ませると、才人は鍵も掛けずに車中から飛び出した。受付前の待合所に制服姿の警官が二人と、狐色のトレンチコートを着た中年の男が一人突っ立っていた。雰囲気から才人が暁子の夫である事を察知したのか、中年男は息を切らせている彼に声を掛ける。

「三嶋暁子さんのご主人ですか？」

「はい……。暁子は……暁子は、どこに？」

「まだ、手術中です」

才人は額に手を当て、待合所のベンチに座り込む。診療時間はとっくに過ぎているので、男の声は静まり返った院内によく響いた。

「志村警察署の蛭川ひるかわと申します」

中年男は警察手帳を見せると、才人の横に腰を落とす。「電話でもお聞きになったと思いますが、荒川河川敷で心停止の状態で横たわっている奥さんが発見されました。正確には、河川敷に捨てられていた……と言うべきでしょうか」

「どういう事ですか……？」才人は訝しげに蛭川を見つめる。

「どうか、気を確かに持って下さいね。実は奥さんの背中には、果物ナイフが突き刺さっていたんです」

「果物ナイフ……?」

「河川敷付近で刺されたのかどうかは、まだ分かっていません。あそこまで運ばれて、捨てられた可能性が高いと思われますが」

「ちよつと、待って下さい……」

才人は額に手を当てたまま、蛭川を見る。「果物ナイフって、一体どういう事ですか……? 暁子は……誰かに刺された……誰かに殺されそうになった。そういう事ですか?」
蛭川は無言で頷いた。

「……分からない」

才人は呟く。分からない。暁子は何故そんな場所に居たのかも、何故刺されなくてはならなかったのかも、何もかも――。

「背中に刺さったナイフ以外は、特に外傷はありませんでした。暴行を受けた形跡も一切無い様ですし、奥さんは犯人に刺された後、そのままあの場所に捨てられたんでしょうね。ただ……」

「……………」

「奇妙な事に、奥さんは何も身に着けていなかったんですよ」

「身に着けてない……?」

「ええ。発見時は裸でした。奥さんの衣類は、鞆と一緒に近くに捨ててありました。だからあの場所まで運ばれて来た可能性が高いと思っただけですが……。この寒空の下で、長時間あの様な状態で放置されていれば、たとえナイフの傷が致命的で無くとも……」

突然、バタバタという足音と共に、一人の医師が待合所に飛び込んで来た。才人と蛭川は、ほぼ同時に立ち上がる。医師は才人と蛭川の顔を交互に見ると、ゆっくりと首を横に振った。

「嘘、でしょう……?」

才人は笑おうとした。

声を上げて笑おうとした。

しかし声が出ない。

これは夢だ。

まだ自分は夢を見ている。

そうに違いない。

河川敷。

果物ナイフ。

刑事。

あまりに現実離れし過ぎている。

悪い夢だ。

暁子は実家に帰って、

両親の看病をしているはずだ。

なあ、そうだろうか?

暁子。

暁子……?」

「暁子さんは、今どこに?」 遠くの方で蛭川が医師に尋ねる声がある。

「安置室の方に」医師がそれに答える声がする。

「……ご主人、行きましよう」

蛭川は才人に肩を貸し、彼を立たせる。「さあ」

才人は操り人形のように、フラフラと歩き始める。

今チヨイと押せば、ドミノの様に倒れてしまうだろう。

そのまま倒れてしまえば、夢から覚めるだろうか。

才人は無意識の内に、安置室まで足を進めていた。

真っ白なベッドの上に横たわる女性。

それは間違いなく、暁子だった。

才人はその傍らに膝を落とし、

彼女の手に触れる。

雪の様に冷たかった。

その冷気が才人の身体に伝染する。

手に、

腕に、

喉に、

唇に。

夢では無い。

現実。

暁子が死んだという現実。

残酷な現実。

動かぬ身体。

これが人の死？

死。

死――。

「……臨終は、七時三十五分でした」

医師は坦々と言った。「直接の死因は失血死では無く、心臓麻痺です。刺し傷自体は心臓を掠めていたため致命傷ではありませんでしたが、おそらく背後から突然刺された事による精神的ショックと、温かい場所から寒い場所に放り出された事による急激な温度変化によるショックが重なったものと思われます。運ばれて来た時には既に心肺停止状態でした。色々和最善を尽くしたのですが……申し訳ありません」

「……しばらく」

才人は消え入りそうな声で、医師に言う。「……暁子と二人きりに、させて頂けませんか。

お願いします」

蛭川と医師は小さく頷き、出て行った。

「……暁子」

才人は優しく呼びかけた。「……スカイビールの仕事、駄目だったよ。君の言う通り、僕が馬鹿だった。最初から君の言う事を素直に聞いていれば良かったね……。サイダーハウスの新社長にだって、手について謝れば復帰させてくれたかも知れなかった。会社に戻って、いつもの様に暁子と生活していれば……。君は、きっと死なずに済んだんだよね。……」

笑っちゃうぐらいありがちだけど、クリスマスにはチキンを食べて、ケーキを食べて、シャパンを飲んで、最後にプレゼントを交換して……そんな楽しい夜になっていたのかも知れないのに。それを、僕は、僕は……」

喉が焼けつく様に熱を帯び、彼は言葉を失う。

暁子の手をギュッと握り締めたまま、目を閉じる。

去年のクリスマスイブの情景が、

走馬燈の様に動いている。

二人きりの夜、

そう、楽しい夜だった――。

「メリー、クリスマス。暁子」

才人は声にならない声でそう告げ、

うつすらと目を開くと、

暁子の頬を、右手で触れた。

「……っ」

彼女の唇が、微かに震えた気がした。

才人はすぐに気が付いた。

もう一度、

クツ、と震える唇。

動いている。

確かに動いている。

「暁子……っ」

才人は彼女の手を離し、肩を揺さぶる。

「暁子！」

才人の声が、安置室に響く。

暁子は小さく呻くと、

軽く咳き込み始めた。

「ああ……」

奇跡という二文字が、才人の頭を横切る。

彼女の顔に触れてみる。

温もりが戻っている。

そして彼女は目を開いた。

「暁子……」

才人は半ば興奮気味に、

その瞳を覗き込みながら、

優しく微笑みかけた。

――すると、

暁子は目を思い切り見開き、

瞬きを繰り返し、

顔をブルブル左右に振ると、
両手で才人を突き飛ばした。

才人は安置室の床に尻餅をつく。

予想外の反応で、何が何だか分からなかった。

(どうして……)

才人は言葉を失ったまま、

暁子の顔を見つめる。

彼女は身体を起こし、

怯えた様な目つきで才人を睨み、

ゆっくりと口を開いた。

「……あんた、誰？」

10

才人はしばらく彼女を呆然と見つめていた。

彼女は今、確かに才人に対して「誰？」と尋ねた。

聞き違えだろうか？

それとも……。

「……暁子」

才人は再び呼びかける。

「アキコ？ 何言ってるの？ ねえ、ここどこ？」

彼女はキョトンとした表情で訊く。

「ここは、病院だけど……」

「病院？もしかして私、助かったの？」

「そうだ」

「……そっか」

暁子は深い息をついた。「……で、あんたは誰？ 病院の人？」

「は？」

「っていうか、ここ本当に病院？ 何か寒いし、真っ暗だし、窓も無いし」

「ああ……すぐ部屋を替えてもらおうか」

才人はよろめく様に立ち上がる。

「煙草」 暁子が唐突に言った。

「えっ」

「煙草、買ってきて。セーラムピアノニッシモね」

「暁子、何を言ってるんだ」

「だから、アキコって誰なのよ」

「君の事だ。……君は、僕の妻だ」

「妻？ 私が？ あんたの？」

暁子は吹き出した。「ね、もしかしてさ、あんたここの入院患者じゃない？ 頭の病気？
あちこちの病室を徘徊して、色んな女の人に『君は僕の奥さんだ』みたいな事言っちゃっ

たりするんでしょ。当たり？ あつ、当たり前なんだ！ きつと昔本当の奥さんを亡くしちゃったのね。可哀想に」

「暁子……僕が、分からないのか」

「だから、あんたなんか……んっ」

暁子が突然咳き込み始めた。才人は慌てて彼女に駆け寄る。

「どこか痛むのか？」

「何か……声が変わ。妙におばさん臭くなってる気がする」

「いつもと変わらないよ」

「ちえつ、煙草はやめとくか」

「もしかして……」

才人は目を丸くする。「君は……記憶が無いのか？」

「失礼な事言わないですよ。私はこう見えても子供の頃から記憶力だけは抜群なんだから。でも、あんたの記憶なんか、ぜんっぜん無いわ」

「僕の事を覚えてないのか……」

「そうじゃ無くて、あんたに関する事以外なら何でも覚えてるって言うてんのよ。私はあなたの言う様にアキコなんて名前じゃ無いし、顔も見た事も無いあんたなんかと結婚した事なんか一度も無いの。理解した？」

「暁子じゃ……無いって……？」

「そういう事」

暁子はベッドから降りる。「駄目。もう限界。この部屋に居たくない。他の部屋に移してもらおう様に頼んでくる」

「ちよ、ちよっと待つてくれないか」

才人は暁子を押し止める。「僕が行ってくるから。君はここで待つんだ」

「個室でよろしくね」

彼女はにっこりと微笑んだ。確かに口調は全然違うが、間違い無く暁子の笑顔だ。絶対に別人などでは無い。一体これはどういう事だ？ 才人は混乱したまま病室を出る。

何となく壁に掛けられた時計を見ると、午後八時を回った所だった。入院患者の就寝時間はまだ過ぎていないが、面会時間はとっくに過ぎていたので、廊下は仄暗い。

廊下の突き当たりにある喫煙所に目をやると、ベンチで煙草を吹かしている蛭川の姿が目に入った。

「あの……刑事さん」才人が恐る恐る声を掛ける。

「……お別れは、もう済みましたか」

蛭川は煙草の火を灰皿で揉み消す。「身内が逝くと言うのは、いつだって辛いもんです。私も五年前に弟を交通事故で亡くしましてね。子供の頃なんか一度も喧嘩をした事が無いぐらい、仲のいい兄弟でした。病院のベッドに、呼吸する事無く眠っている弟の姿を見て、普段は鬼刑事と恐れられている私が、それはもうボロボロになるまで泣いたもんです。でもね、逆に私の方が先に死んでいたら、弟が私を失った事で心を痛めていたと思います。この先、何十年も心を痛めて生きていく事は辛いです。だから、あいつは苦しまずに死んだ分、良かったのかなって、そう思う事にしたんです。……すみません、こんな時に不謹慎な話を」

「いえ……それより、あの、実はですね、暁子が目を覚まして……」
「えっ」蛭川は目を丸くする。
「さっき、目を覚ましたみたいで」
「……………」

蛭川は数秒間才人の顔を凝視し続ける。気でも狂ったのかと言いたげだった。しかし勿論そんな事は口に出さず、「お待ち下さい」と小走りに駆けていった。医師に連絡を取りに行ったのだろう。

一分も経たない内に彼らは戻って来た。才人達は、一緒に安置室の方へと向かう。

暁子はベッドの上に膝を抱えて座り込み、リラックスしていた。蛭川も医師も、信じられないといった表情で彼女を黙って見つめている。

「部屋、替えてくれないの？」暁子が訊いた。

「こ……こんな事は、あり得ない。何かの間違いだ」

医師は暁子に駆け寄ると、手をおもむろに掴み、脈を取り始めた。

「ちょっと！ 何なの？」

「……脈がある」医師の声がうわずった。

「当たり前じゃん！ 無ければ死んでるよ。あんたってヤブ医者？ それよりさ、早くこの部屋替えて欲しいんだけど。ここの病院って患者にこんな薄気味悪い部屋を提供してるわけ？」

「……あ、ああ。ちょっと待って下さい」

医師は咳払いをすると、何やらぶつぶつ言いながら安置室を出て行った。

「三嶋暁子さんですね。具合は如何ですか」蛭川が訊いた。

「また？ 私、ミシマアキコじゃ無いんだけどさ」

「はあ？」蛭川が言葉を失う。

「あの……………」

才人は蛭川に耳打ちする。「妻はどうもその、ショックのせいか、まだ混乱している様で……………今日の所は……………」

「ああ、すみません。明日改めてお伺いします」

蛭川は丁寧二人に向かつて一礼する。「助かって良かったです」

彼が安置室を出て行くのと入れ違いに、医師が戻って来た。空いている個室に移動しようと言う。暁子は軽く頷いて歩き始める。その様子にも医師は驚いた様子だった。

エレベーターで四階に上がり、412と書かれた扉を静かに開く。四畳半ほどの広さで、ベッドが一つ置かれている他は、椅子が一脚、そしてその手前に小さな洗面台があるだけのシンプルな個室が姿を現した。

暁子は不満そうな表情だったが、文句までは言わなかった。診察時間が過ぎてしまっているで明日また改めて検査をしようと言い残し、医師は去って行った。

「ねえ、どうして皆、私の事をアキコって呼ぶの？」

「本当に分からないのか？ 君は、暁子なんだよ」

「しつこいわね。私はアキコじゃなくて……………」

暁子は洗面台の鏡を見つめ、立ち尽くしている。

「どうした？」

才人も鏡を覗き込む。
いつもと変わらぬ二人が映っているだけだ。

しかし次の瞬間、

鏡越しに彼女の表情が変化し始めた。

「……何よ……これ」

暁子の唇が震え始め、

次第に顔色が青ざめていく。

「どうしたんだ？」

「……私じゃない」

「何だつて？」

「誰なの？ これ……。私……。私は……」

暁子は床に膝をつく。

才人は倒れかける彼女を支える。

「離してよ！」

暁子は彼の手を振り解き、怯えた表情で壁に凭れ掛かる。

「私が、私じゃ無くなってる……」

彼女が小さな声で呟く。

まさか。

まさか——。

才人の頭の中に、一つの考えがよぎった。

暁子の顔、そして身体。

暁子とは異なる口調、そして行動。

これから導き出される結論は……。

「……多重人格？」

才人は思わず口走った。暁子は虚ろな目で彼を見る。

「刺されたショックで、暁子の心の中に眠っていたもう一つの人格が覚醒した。昔そんな話を聞いた事がある。君はもしかしたら、暁子の中に潜んでいたもう一つの人格なのか……？」

「……だとしたら暁子は……？」

「暁子は、やはり死んでいるのか……？」

「それとも、一時的な症状なのか……？」

「……違う」

暁子が強い口調で否定する。「私はこの人の中の人格なんかじゃ無い。私はクリスマスイブの夜、事故に遭って死んだ。どうして事故を起こしたのか、記憶はおぼろげだけど……。そんな中、はつきりと覚えているのは、血まみれで倒れている私から、意識だけが離れてゆくって感覚。ふわっと宙に浮かんだ様な変な感じがして、そのまますうっと風に流されて……気が付くと、あの暗い部屋に居て、目の前にあんたが居た」

「それじゃあ、まさか……」才人はごくりと唾を飲み込む。

「間違い無いわ」

彼女は頷いた。「死んだ私の魂が、この人の中に乗り移ったのよ」

暁子の放った言葉が、すぐには理解出来なかった。

才人はSF小説を読むのが好きだったが、まるで自分がその本の世界に飛び込んでしまった様な奇妙な感覚がまとわりつく。これが現実であるはずが無いと思う反面、ここは物語の世界だから当たり前なのだと、才人の一部が狂った認識をし始めている。いけない。彼はブルブルと首を横に振ると、乱れた呼吸を整える。

「しかし信じられない……。他人の魂が暁子の中に、なんて……」

「ね、確かめてみない？」

暁子が人差し指を突き出して言った。「今日は何年何月何日？」

「……二〇〇五年十二月二十四日。クリスマスイブだ」

才人は困惑しながら答える。

「日は変わっていないのね。私が事故に遭ったのは今日の……午後六時半頃だと思う。まだ二時間しか経っていない」

「そう言えば……暁子が病院に運ばれたって電話が掛かってきたのも、ちょうどそのぐらいの時間だった」

「私が死んだのと、あんたの奥さんが死んだのが、ちょうど同じ時間だったのよ。それで魂がこの身体に飛んでっちゃったわけか」

「じゃあまさか、君の身体には暁子の魂が乗り移ってるのか？」

「そんなの知らないわよ」

彼女は吐き捨てる様に言う。「……魂が離れていく時に見た私の身体、酷くボロボロだったから、もしその人が乗り移ってたとしても使い物にならないかも」

「……どんな事故だったんだい？」

「うーん、それがよく思い出せないのよね。……ドーンって物凄い衝撃があったと思ったら、もう既に宙に浮かんだ感覚がしてたから……。あっ、その時、目の前に投げ出されたケータイの時刻が六時半になってただけは、何となく覚えてるんだけどね」

「じゃあ、場所は？」

「……それも分からない。ああ、私、どうして事故に遭ったんだろ。……そうだ、思い出したわ。私、走ってた。とにかく慌てて走ってた。……もしかしたら誰かに追いかけられてたのかも。……アツシと一緒に楽しいクリスマスイブを過ごすつもりだったのに、台無しだわ、畜生！」

「気持ちには分かるけど、暁子の声でそんな下品な言葉を使わないで欲しい」

「何それ？ 何でそんな事あんたに言われなくちゃいけないわけ？ あんたが好きなのは奥さんの外見？ それとも中身？ 外見が好きなら私の魂がどんな言葉遣いをしようが勝手だし、中身が好きならとっと私の身体でも探しに行つて、そっちとラブラブすれば？」

「屁理屈は聞きたくない」

才人は肩を竦める。「……何とかして元に戻れないのかな」

「さあ。呪術師にでも相談しに行く？」

「ジュジュツシ？」

「呪いとか黒魔術とか使う人」

「あ、知り合いに居るのか？」

「居るわけ無いじゃん」

「……医者に相談しても、おそらく無理だろうな」

才人は溜息混じりに言う。暁子の身体を持つ女は、もう一度鏡の前に立つと、微笑んだり、気取ったりを繰り返す。

「……この暁子って人、何歳？」

「二十九歳。来年は三十……になるはずだ」

「ふうん。道理で声がおばさん臭いと思った」

「君は何歳なんだ？」才人はむっとして訊く。

「そのキミって呼び方さ、マジでむかつくんだけど」

「どう呼べばいいのか分からない」

「ユリ」

「本名？」

「さあね」

彼女は鏡の前で笑顔を繰り返す。

「年齢は？」

「女に年を訊くのは失礼よ」

「さつき君——ユリも、訊いたじゃないか」

「あんたって女だっけ？」

「そうじゃ無くて……」

「うーん」

ユリは両手を頬に当てる。「鼻の形が決定的に駄目なんだなあ。この奥二重も気に入らない。髪型もすっごい古臭いし……。幸い体型は同じぐらいだから、この顔を自分の顔に整形すれば何とか元通りの生活に戻れるかも」

「おい、そんな事……」

「何よ、この先こんな顔で生きていけって言うの？」ユリが睨み付ける。

「こんな顔だつて？ 暁子を悪く言うな！」

才人は思わずユリの胸ぐらを掴んだ。しかし驚いた顔は暁子の顔なので、彼はすぐに手を引つ込める。

「……悪かったわ」

ユリは素直に謝った。「でも私、好きでこの人の身体に入ったわけじゃ無い。ずっとこのまま元に戻らないかも知れないのよ。赤の他人の身体の中で一生暮らさなきゃいけないって気持ち、あんたには分かる？」

「……」才人は俯いたまま黙り込む。

「元に戻るまで、この身体を使う権利は私にあるはずよ。違う？」

「……分かったよ。でも、整形はやめてくれないか。暁子の身体を傷つける事だけは、絶対やめて欲しい」

「じゃ、それ以外なら何しても自由？」

「少なくとも暁子が元に戻るまでは、普段通りの生活をして欲しい」

「普段通りって？」

「僕の家で三嶋暁子として生活する事」

「えーっ、あんたと暮らすの？ 絶対嫌だ」

「しかしその姿じゃ、ユリとして普段通りの生活をする事なんて出来ないだろう」

「じゃあ一人で暮らすわよ、それなら文句無いでしょ？ 別居じゃ不自然だから離婚しよう。離婚届持ってきてくれればサインするから。元に戻ったら、また結婚し直せばいいじゃん」

「あのね、離婚ってそんな紙切れ一枚でどうにかなる様な簡単な事じゃ無いんだよ。第一、暁子の親や近所の人にはどう説明するんだ？」

「実は夫婦仲が悪かったんです！ って言えば通るじゃない」

「百歩譲って理由はそれでいいでしょう。……でも、もし離婚したら、君はずっと一人で暮らせるのか。誰か他の人と結婚したりしないか？」

「そりゃ好きな男が出来たら、その人と結婚するわよ」

「それは駄目だ。絶対に駄目だ」才人は強く言った。

「もうっ、整形も駄目、離婚も駄目なんて、じゃあ私の自由はどこにあるのよ！」

「あまり大声を出さないでくれ。ここは病院なんだ」

「何だかイライラしてきた。あんたみたいな男は絶対に結婚したくないタイプ。友達にだってなってるやんないわよ」

「それはこっちの……」

才人は彼女の言葉をそっくりそのまま返してやりたかったが、ぐっと堪える。

一度死んだ暁子が生き返った。しかし心は別の人間であるという不可思議な現状——。彼女の死を目の当たりにした時よりもずっと複雑な心境に、才人は包まれていた。

いつか暁子は元に戻る、という期待はあった。だがそうになるとユリの魂はどうなるのか。もし元の身体が無ければ、そのまま消滅してしまうのだろうか。だとしたら残りの時間、彼女の好きにさせてやれないのは可哀想だとは思う。だからと言って身体は暁子の物なのだから、何でもかんでもユリの好き勝手にさせるわけにはいかない。

逆にこのまま暁子が戻って来なかったら——。ユリはずっと、暁子の身体で生きなければならぬのだろうか。才人にとつてもショックだが、彼女はもつとショックに違いない。死んでしまった暁子より、生きて苦悩の日々を送らなければならぬユリの事を優先して考えるのが正解なのだと思う。いずれにせよ、今はなるべく彼女の権利を大切にしたい方がいい。

「……分かった。せめて一年だけ、猶予をくれないか」

才人は提案する。「もし一年経つても戻らなかつたら……その時は離婚しよう。以後はもうユリに干渉はしない。整形でも、結婚でも、君の好きな様に生きればいい」

ユリは何も答えなかった。

疲れたので眠りたい、と彼女が言い出したので、才人は頷いて病室を出た。このまま帰るべきかどうか悩んだ末、車の中で一夜を明かす事にした。

病院の出口へと向かう彼は、暁子が居なくなつて哀しいという感情も、彼女の身体が助かって嬉しいという感情も、全て果物ナイフで断ち切られた様な、何とも奇妙な感覚だった。ただ、暁子の死を一度実感してしまっているせいかな、今は心も身体も比較的落ち着い

ている。人間という生き物は不幸が訪れた時、全ての感情をその瞬間に使い切ってしまう者と、小さな感情を後々まで引きずってゆく者の二種類に分けられる。才人は前者のタイプなのかも知れない。

駐車場は静かだ。車に乗り込み、鞆の中からミニパソコンを取り出し、インターネットに繋ぐ。

暁子が刺された事件は、まだどのニュースサイトにも掲載されていない。ユリが警察に事情聴取されたらどう対応すればいいだろう。「事件前後の記憶を全然覚えていない」で通るだろうか。しかしそうなると彼女を刺した犯人は捕まらない――。

ニュースサイトを点々としていく内、何となく株式会社サイダーハウスのホームページにアクセスしてみる。

「何だ、これは？」才人は思わず声を上げた。

サイダーハウスのホームページデザインは才人が制作したのだが、全く別のデザインのページが表示された。以前はインパクトを与えるために写真と機械的なアニメーションを多用していたが、文書主体でオシャレなスタイルにリニューアルしていた。

「田中や木下の仕事では無い。一体誰が……」

スタッフ紹介をクリックして、再び才人は声を上げた。社長逮捕で取材陣が押しかけた時、才人に因縁を付けてきた髭の男の写真がトップに掲載されていたのだ。名前は村瀬秀雄むらせひでおとあった。写真の隣に詳しいプロフィールが書かれている。

『村瀬秀雄。一九七〇年生まれ。K大学卒業後、独学でウェブデザインを学び、有限会社アルタイルズにウェブデザイナーとして入社。友愛生命、スカイブルー航空など数多くの企業サイトデザインを手掛け、第四回ウェブニアコンテストで準グランプリを果たす。それを機にアルタイルズを退社。しばらくアメリカにデザインの勉強に出て、二〇〇五年秋に帰国。同年十二月、アメリカ留学中に逢った弊社社長・高瀬宏明にその才能を買われ、サイダーハウス専属ウェブデザイナーとして新鋭活躍中』

(そうだ、思い出した……)

第四回ウェブニアコンテストと言えば、才人がグランプリを受賞した大会だ。才人は村瀬の事は覚えていないが、村瀬の方は才人の事を知っていて、なおかつ異様な敵意を燃やしていた理由がこれで分かった。

彼の方はライバル意識を燃やしているのだろうが、才人自身は彼の事など眼中に無い。確かにサイダーハウスの新しいホームページは見やすくなっているかも知れないが、これでは駄目だ。社長やデザイナーのプロフィールをこんなに細かく載せた所で、誰が見るんだ？ ホームページの制作依頼を出す客が見るのは実績と価格だけだ。デザイナーの個人情報などどうでもいいのである。

(いけない。仕事の事を考えるのは、やめにしなければ……)

スカイビールのプロジェクトが続けられなくなり、自分の愚劣さを反省したばかりだ。しかしこんな逸材が登場してしまっただけ、たとえば土下座をした所でサイダーハウスには戻してもらえない――。

(暁子……僕が悪かった。だから……早く帰ってきて欲しい。これからは何でも君の言う様にするから……)

才人は窓越しに夜空を見上げる。

人は死んだら星になるといふのは本当だろうか。
満天に煌めく星屑の中に、暁子が居なければいいなと思った。

12

関丈史は缶ビールを片手に浴室を出た。冷たい空気が肌に触れ、すうっと快楽の波が押し寄せる。しかしたった今まで飲んでいた缶ビールがスカイビールの商品である事に気付くと、彼は途端に気分をそがれた心地がして、即座に缶を握り潰しゴミ箱にダンクシュートさせた。

関の部屋には暖房器具が無い。だから冬は睡眠前の二時間は浴室で過ごす事にしている。風呂で酒を飲むのは危険だからやめると元恋人に何度も注意されたのだが、バンジージャンプやスカイダイビングに挑戦するのと同じ理屈だと彼は思う。勿論それを理解された事は一度も無い。

ジャージに着替えて寝支度をしていた時、何かを踏んづけた。それは、二ヶ月前に元恋人が別れ際に捨てていったゲームソフトだった。あれから二ヶ月も部屋の掃除をしていない事を思い出す。恋人が居た時は最低限のマナーとして毎日の様に掃除をしていたが、振られてしまつてからはそれをする意欲はどうにも湧かない。また彼女が出来れば掃除人間に戻れるのだろうけど。

(そう言えばこのゲーム、まだクリアしてなかったっけな)

関はソフトのパッケージを眺め回した後、「よしっ」と呟いてパソコンを起動させた。操作出来る状態になつてから、彼はゲームのCDROMを挿入する。

(……と、その前に)

会社の方に何か連絡があるかも知れないと思い、インターネットに接続する。合資会社印白塔のホームページにアクセスする。会社名と、三嶋才人と関丈史の名前、そして目安となる発注価格がずらりと書かれているだけのシンプルなサイトだ。

インターネットの世界では、未完成状態のページは「工事中」という表現が使われる事が多い。印白塔には制作実績がまだ無いため、当然「工事中」と書かれているわけだが、面白い事に三匹の子豚が一生懸命家を作っているアニメーションが見られる。おまけに時間帯によつてアニメーションのパターンが変わる。現在は深夜なので怠け者の二匹の子豚は眠つており、残りの一匹だけが煉瓦を積み上げ、セメントを塗るといった作業を繰り返しているのだ。ちなみにこの働きの一匹が寝る時間が約三十分間だけあると言う。それが一体何時何分なのかは、才人は教えてくれない。

昼になると、この三匹の子豚は作業をする手を休め、仲良く弁当を食べている。また、おやつの時間になると、一個のケーキをめぐつて三匹の争奪戦が始まる。この様子がとても滑稽で、料金表以外何も無いページなのに、ユーザはアクセスするのが楽しみになるのだ。

働きの子豚の姿を見てから、関はメールをチェックする。会社のアドレスに届くメールは、才人の家からもそのコピーが受信出来る様に設定してある。

メールは七通届いていた。「子豚ちゃんが可愛いです」「誰が描いてるんですか?」といった物ばかりで、仕事の依頼は一通も入つてなかった。才人はこの手のメールに絶対に返事

は出さない性格なので、関がその一通一通に丁寧返信していく。子豚を描いたのはイラストレーターの藤原千鶴という女性らしいが、「それは絶対に企業秘密だ」と才人に釘をさされたので「秘密です!」と返しておく。

全てのメールに返事を出し終わった後で、ふと思いついて関は才人にもメールを書いておく。

関様より愛を込めて。

今年のクリスマスは孤独じゃ(泣)。

だから本当は言いたく無いけど、メリークリスマス!

スカイビールの件、残念だったな。

でもあんまり気を落とすなよ。

正月明けまで会社は休みって事だけど、

近い内に一度そっちに顔出すので、

また飯でも食おうぜ。

奥さんを大切にしろよ。

それじゃバイバイ。

追伸

子豚ファンのベイビー達には俺が返事を出しておいた。

イラストレーターの子は可愛いのか? 一度会わせろ。

俺の勘では二十歳前後とみた!

(これでよし、と)

関はメールが送信出来た事を確認すると、ゲームに没頭し始めた。

13

混沌としたまま眠りにつき、混沌としたまま目が覚める。そんな気怠い朝を迎えた三嶋才人は、親指で目をこすりながら身体を起こす。思っていたよりずっと暖かい聖夜だった。車には常時毛布が積んであったが、それを被って寝ると逆に暑いくらいだ。

午前五時五十六分。まだ日は昇っていないが、薄紫色の空は柔らかな光を帯びつつあった。病院はそろそろ起床時間だ。才人は車を降りると、身体を伸ばした。

「おはようございます。お早いですね」

才人のすぐ傍から声があったので驚いて振り返ると、蛭川が立っていた。どこから瞬間移動したのだろうと思うぐらい突然現れたので、才人は言葉に詰まる。

「ああ、驚かせてすみません。実はずっと病院の門の所で待機していましたね。奥さんが生きていると犯人に知られたら、また襲いに来るかも知れませんから。警備のために」

「なるほど……」

「昨夜の内に、今回の殺人未遂事件の捜査本部を立て、目撃者の聞き込みから始めております。近い内に犯人を捕まえられる様、全力で捜査に当たります」

「殺人未遂……?」才人は一瞬、耳を疑った。

「どうかしましたか?」

「いえ……それはそうですね……」

この事件はあくまでも未遂として処理される――。周りから見れば暁子は生きている事になるのだから、当然と言えば当然である。しかし、もし暁子がそのまま戻らなければ、結局彼女は、犯人に殺されてしまったという事になるのか……。

犯人が捕まったとしても、暁子の身体がピンピンしている限り、犯人が殺人容疑で裁かれる事は永遠に無いのだ。そう思うと心の奥底から犯人に対する憎しみがこみ上げてくる。魂だけが殺され、暁子の身体はすぐ近くで生きて動いている残酷な矛盾を目の当たりにした才人にとつて、たとえ事件が解決しても、彼の心の中にあるジレンマは永遠に解放出来そうに無かった。

「もう起床時間ですね」

蛭川が自分の腕時計を見ながら言った時、ボタンという物音が建物の方から聞こえた。見ると、ナースが三人、慌てて正面玄関から飛び出して来た。

「どうしたんです?」蛭川が訊いた。

「それが……三嶋暁子さんが居ないんです!」

ナースの一人が泣きそうな顔で言った。

(ユリが?)

才人は驚いて四階付近に視線を移す。

「居ない? トイレとかじゃ無いんですか?」

「いえ、全部確認しました。でも見つからなくて……」

別のナースが答える。「非常階段の内鍵が開いていたので、もしかしたらそこから……」

「非常階段はどこですか?」

「裏側です」

才人は駆け出した。少し遅れて蛭川とナース達も後に続く。

建物の裏手に回ると、各階の非常口と連結した白い螺旋状の階段が姿を現した。病院の外周は才人の背丈より僅かに高い金網のフェンスで囲まれているが、足を引っ掛ければ誰でも簡単に乗り越えられて外に出られそうさだ。

「非常口は外側からは開かないんですね?」蛭川が訊く。

「ええ。内側からロックを外さない限りは……。消灯時間の時に確認しましたが、その時は鍵が掛かっていました」

「となると暁子さんは自分の意思で非常口から……。でもどうして……。ご主人、何か思い当たる節はありませんか?」

才人は黙って首を振る。だが本当は彼女が居なくなった理由は分かっていた。

「寂しくなって自宅に戻られたという事もあります。とにかくご主人は一度自宅の方にお戻り下さい。我々はこの付近一帯を捜索してみます」

「分かりました。ご迷惑おかけして申し訳ありません」

才人は深々と頭を下げながら、家になんて帰れるはずが無いと思った。ユリには、才人

の家がどこなのか話していないどころか、身元を証明する物など何も持たせていないのだから。おそらく暁子の荷物一式は殺人事件の捜査のためにと警察が保管しているに違いない。彼女は金も持たずに寝間着のまま外に逃げたのだ。

彼女はそのまま自分の家に戻ったに違いない。しかし彼女の自宅がどこなのか、才人は分からない。せめて苗字でも分かっていたら話は別だが、ユリという名前だけでは彼女が何者なのかを調べる事は出来ない。そもそもユリという名前が偽名という事も十分考えられる。

彼女と交わした会話の中で、何か手掛かりになりそうな物は無いだろうか。だがすぐに思い浮かぶのは、標準語で喋っていたから東京の人間だろうとか、暁子よりも年下とか、吸っている煙草はセーラムピアニッシモだとか、何の役にも立たない情報ばかりだった。

駐車場に戻り、車体にもたれ掛かりながらグツと拳を握り締める。彼女はもうここには戻って来ない。そう才人は直感した。この広い東京で、一度会ったきりの赤の他人と再会する確率がどれだけ低いか、計算しなくとも分かる。きつと気の遠くなる数値が出る事だろう。

(待てよ……)

——私が事故に遭ったのは今日の……午後六時半頃だと思う。

(そうか、事故だ)

いくら東京が事故多発地域であるとは言え、死亡事故であれば新聞に載るはずだ。昨夜の事故であれば、今朝の新聞に載っている可能性は高い。そこから何か情報を得られないだろうか。もし載っていないければインターネットのニュースサイトで探す手段もある。

才人は踵を返し、病院に戻る。ちょうど係の人間が待合室のロビーに新聞を配置する所だった。彼は新聞を受け取り、三面を覗き込んだ。

「……あった」

才人は新聞を目に近づける。

『女子高校生、車にはねられ死亡』

二十四日午後六時三十分ごろ、板橋区浮間舟渡駅付近の大通りで、都立L高校二年生、春川由里さん(一七)が、同区内の建設作業員、新見純さん(二四)運転の普通乗用車にはねられ、全身を強く打って死亡した。目撃者の話から、由里さんが突然大通りに飛び出してきた事による事故とみられているが、一方で現場から逃げ去る数人の男が目撃されている事から、由里さんが飛び出してきた理由に何らかの関与があるものとして、志村警察署では詳しい原因を調査する方針』

他にも幾つか交通事故の記事はあったが、ユリという名前が出て来るのはこれだけだった。それにしても、彼女の言動から才人よりもずっと年下であろうとは思っていたが、まさか高校生だとは思わなかった。

とにかく彼女の本名と通っていた高校だけは判明した。L高校に行けば彼女の自宅の住所を教えてくれるだろうか。学校側は見ず知らずの人間に生徒の個人情報を漏らす様な事はしないだろうから、訊くとするなら彼女の同級生という事になるが。

才人は病院を出て車に乗り込むと、L高校にカーナビを設定する。

(少し、早いかな)

まだ六時を回ったばかりだと思いつく。ユリが才人の自宅に戻っているとは考えられないが、この付近をうろついて警察に睨まれるのも面倒なので、一度帰る事にした。

14

関丈史は、自分のくしゃみで目が覚めた。

ゲームの途中で眠ってしまったらしい。パソコン画面には洞窟の中でじっと突っ立っているキャラクターが映っている。宝箱の三步手前でストップしている。こんな所で俺が凍死しちまったらこいつ可哀想だな、と関は苦笑する。

関はもう一度くしゃみをしながら立ち上がる。食パンを袋から取り出し、オーブントースターに放り込みスイッチを入れる。「あつー」と思った時には既に遅かった。ブレーカーが落ちたのである。

(くそつ、おんぼろアパートめ)

関はブレーカーを上げ、慌ててパソコンに向かう。

(寝る前にゲームをセーブしている賢い自分に賭ける！)

しかしそんな思いも空しく、データは彼が昨晚ゲームを始める前の状態だった。途端に憂鬱な気分になり、パソコンを終了させる。特に面白いゲームでも無い。きっとこのまま二度とプレイする事は無いだろうと関は確信した。

冷蔵庫から缶コーヒーを取ると、中身を全てマグカップに移した。トーストが焼き終わったら電子レンジに入れて加熱するのだ。恋人と別れる前は薬缶でお湯を湧かし、きちんとしたコーヒーを淹れていたが、一人身だとしても行動が大雑把になってしまう。

関は玄関ドアの新聞受けから朝刊を取り出す。その三面記事の一角を見て、彼は飛び上がりそうなるほど驚いた。

『有名ウェブデザイナー妻、刺される』

そこには才人の妻、暁子が何者かに果物ナイフで刺され、都内の病院に搬送された事が細かく書かれていた。大変だ。トーストなど焼いている場合では無い。関は慌てて携帯電話をゴミの山の中から探し出すと、才人に電話した。

「くそつ、何で出ねえんだよ！」

この大変な時に電話に出ないなんて、と関は怒鳴りそうになるが、冷静に考えてみれば大変な時なら電話に出ている暇など無いはずである。

着替えている間に、チンと音が鳴ってトーストが出来上がった。関はそれを二つに折り畳んで口に詰め込むと、ヘルメットを被り表に飛び出した。停めであるバイクに跨り、間髪入れずにロケットスタートさせる。苺ジャムの無いトーストの味は最悪だった。せめて塗ってから出て来るんだった――。

関は才人の自宅を目指して走る。本当は暁子が運ばれたという病院の方に直行したい所だが、新聞にはどの病院に運ばれたのかまでは書かれていなかったので仕方が無い。

信号待ちの交差点で頬張っていたトーストを抜き、腕時計をチェックする。午前六時四十分。路肩に停めてもう一度才人に電話するが、繋がらない。

(あいつ、大丈夫かな)

才人は自信家だが、精神的には決して強くない。暁子が何者かに殺されかけたという事実を目の当たりにして、一ヶ月や二ヶ月で立ち直れる様な人間では無いのだ。会社を辞め、犯人が捕まるまでは、ずっと暁子の傍についてやるなどと言いだしかねない。勿論彼がそれを望むなら止めはしないが、それが才人にとって正しい選択とは思えない。

関は幼い頃に父を亡くしたため、母と姉、妹の三人の女性に囲まれた家庭で育ってきた。血が繋がっているのにかなり性格の違いがはつきりとした三人で、彼女らの生き方を間近で見ている内に、女とはどういう生き物であるのか、関は概ね理解する事が出来た。女性の心理を見抜く事は、彼の生まれ持った能力なのだ。

逆に、男性の心理は全くトレースする事が出来なかった。そのせいか中学、高校時代、彼には男友達が極端に少なかった。男子生徒から、関はいつも女子とくっついていて嫌な奴だと思われていたに違いない。だがそれでも構わない。自分には男の友達など必要無いのだ。当時の彼はそう深く胸に刻み込んでいた。

大学に入って数日経った頃、女友達に囲まれ談笑をしていた関に声を掛けてきたのが三嶋才人だった。関の軟派振りを気にするでも無く、良かったら飯でも食べに行かないかと気軽に誘って来たのである。

彼と生協の食堂でオムライスを食べていた時、そこでお互い初めて自分の事を語り合った。才人の思考はとても面白かった。彼はいつも何かを観察している。その時はオムライスに掛けるケチャップの量は年代別に違うのだというレポートをノートに纏めていて、関が呆れて「そんな事をして何の意味があるんだ？」と訊いたら、「誰も考えもしない事をする事に意味があるんだ」と彼は答えた。この男はアホだ。しかし豊かな獨創性を持っている。もしかしたら自分も含め、周りの人間の方が全員アホなのかも知れない。ただ一つ確かなのは、彼が周囲の人間とは違う考え方を持っていなかったら、きっと二人は親友になる事は無かった。

だが獨創性という点では優れていた才人でも、感情的になると短絡的かつ稚拙な思考に走ってしまうという欠点があった。そしてその時とった彼の行動は、客観的に見てもいつも正しいと言える物では無い。

サイダーハウスの社長が逮捕され、彼のインタビューをテレビで見た時、才人が受け持っている仕事に大きな支障が出る事は誰の目から見ても明らかだった。そうなるに才人はおそらく感情的になって、何か早まった行動を起こす。さすがに自殺したり、暴力事件を起こしたりする様な人間では無いが、会社を辞めるぐらいの事はするだろうと思っていた。そうなる前に関が才人に電話し「会社を作らないか」と持ちかけたのは、彼の短絡的な行動のその後をカヴァーする意味合いがあった。サイダーハウスを辞めても、自分達で会社を起せばいいという救いを、彼に持たせるために。

ただ一つ気掛かりなのは、暁子の事だった。関が彼女と話した事があるのは結婚式の時一度だけなので、彼女の心理までトレースする事は出来ない。才人を信じているなら独立の話は大いに賛成するだろうが、万が一暁子の身近な人間が会社経営に失敗したという過去を持つているなら、絶対に反対する。

関は三嶋家を訪れ、それとなく暁子を探る事にした。才人は全く気付いていなかった様だが、彼女には微かに泣いた形跡があった。鍋パーティーの時の暁子の笑顔は、吹っ切れたのでは無い。才人の事が信じられなくなった証拠だ。その後、彼女はこうするだろう。

他の男と浮気するか、離婚を突き付けるか、蒸発するか、自殺するか——いや、才人を殺す事だつてあり得る。暁子の様なタイプは、愛する人を信じられなくなった時には、何をしでかすか一番分らないタイプなのだ。

(そして、昨日の事件……)

暁子が何者かに刺されたと聞いた時、一瞬才人の顔が頭をよぎった。もしかしたら口論になって——。しかし関はすぐにその考えを捨てた。才人は絶対に人を暴力的に傷つける様な人間では無い。

刺された、という事は暁子が自殺したとも考えられない。となると強盗にでも襲われたのか、彼女が他に何らかのトラブルを抱えていたのか。

関が思考をあれこれ巡らせている内、バイクは三嶋家に到着した。ガレージにセルシオは停まつていない。やはり病院に出掛けたのだろう。

バイクを降りてヘルメットを脱ぐと、インターホンを鳴らす。当然返事は無い。ドアには鍵が掛かっているの、中に入って待つ事も出来ない。

(無駄足だったか……)

関は溜息をつく。

「あのう」

突然背後から声が掛かった。縁のごつい眼鏡を掛けた、丸々と太った学生風の男が、関の方を上目遣いで見ていた。

「三嶋さんならさつき一度戻つて来て、また出て行かれましたよ」

「君は？」

「ああ、僕は桶谷と言います。三嶋さん家の隣に住んでる、芳賀さんの後輩です」

「才人がどこに行つたのかまでは聞いてない？」

「はい」

「そうか……運転中だからケータイに出られないのかな」

関は自分の携帯電話を見ながら言う。彼からの着信は無かった。

「えーと、世田谷君だっけ？」

「桶谷です。桶谷四郎です」

「ちよつと悪いんだけどさ、芳賀君の家で待たせてもらえないか、彼に訊いてもらえないかな。トイレも借りたいし」

「別に構わないと思いますよ。どうぞ」

「ありがたい。感謝感謝」

関は桶谷に連れられ、芳賀明彦の家に行って来る。玄関口で靴を脱いでいた時、「おいこら、四郎、遅いぞー!」という怒鳴り声が二階から聞こえた。

「あれ、芳賀君の声？」 関が桶谷に囁く。

「はい」

「へえー、昨日とは別人だな」

「僕に対してはあんな感じなんです。先輩後輩の関係ですから」

「後輩は大事にしないと駄目だな。ちよつと驚かせてやろうか」

関は忍び足で階段を上がる。突き当たりのドアが開いていて、パソコン画面に向かっている芳賀明彦の背中が見えた。関はニヤニヤしながら忍び足で彼に近づくと、両肩を掴み、

「わっ！」と脅かした。「ぎゃあー！」と言う叫び声と共に、芳賀は椅子から転げ落ちた。「よう、おぼっちゃま。元氣そうだな」

「あっ、あっ、あっ……」

芳賀は関を呆然と見つめながら、口をパクパクさせている。

「悪い悪い、才人が留守だから、連絡がつくまでちよつとここで待たせて欲しくてさ」

「お、驚かせないで下さいよ……ぼ、僕、心臓弱いんですから……」

芳賀は胸に手を当てながら、立ち上がる。少し遅れて桶谷が部屋に入ってきた。

「芳賀さん、買ってきたっす。焼肉弁当」

桶谷はコンビニ袋をテーブルの上に載せる。

「うん、うん……ありがとう」

関が居るせいか、彼の口調は消極的になっている。

「それ、朝飯？」 関は弁当を指差す。

「え、ええ。まあそんな感じですよ……」

芳賀は弁当箱を開け、焼き肉から食べ始める。よほど美味しいのだろう、先ほどまでの緊張した表情が解け、ニタニタとした笑みへと変わっていく。

「芳賀君さあ、何で野菜食わないんだ？」

「な、何でと言われましても……その、まずいからです」

「親に怒られないか？」

「ええ、まあ、結構怒られました……。子供の頃は、無理矢理食わされてたんですけど、親から解放されて、好きなもんばっかり食う様になってしまった……という感じですよ」

「親と同居してないのか。でもこの家、一軒家だし、結構新しいよな」

「芳賀さんの家、すっごい大金持ちなんです」

桶谷が答えた。「この家も、親に買ってもらったんですよね？」

「へえ、真正正銘のおぼっちゃまなわけか」

芳賀は照れ笑いを浮かべる。彼が食べるのに夢中になり始めた様なので、関は部屋を見回す。まず一番多いのはフィギュア類だ。漫画かアニメのキャラクターだろうか。髪が緑色や紫色の女の子キャラが多い。その方面に疎い関には、それが誰なのかはさっぱり分からない。

二番目に多いのはCDだ。音楽を聞く様な人間には見えないけどなど思いながらジャケットを見てみると、何とそこにもアニメのキャラが描かれていた。

「それ、ドリームプレイランドのヒロイン、薫子ちゃんですよ。萌えるでしょう？」

桶谷が説明する。「そっちのCDは疾風レディー戦隊のヤンヤンちゃんのテーマ。僕の好みはリンリンちゃんなんですけど、作画が中堀連太郎から安藤ルキノに変わってからはヤンヤンちゃんの方が色っぽくなったっていうか、くびれの描き方がそるっていうかヤンヤン？ リンリン？ まるでパンダだな、と関は心の中で突っ込む。

「あっ、芳賀さん、今日からヤンヤンちゃんのカレンダーが予約開始みたいですけど、白ヤンヤンと黒ヤンヤン、どっち注文しときます？ 安藤ルキノ絵なら両方とも即買いなんですけどねえ」

「うるさいぞ、食事中……だ」

芳賀は口をもぐもぐさせながら言う。桶谷はしゅんとなって黙り込む。

先ほどまで芳賀が使っていたパソコン画面が、多角形が飛び交うアニメーションに変わった。画面焼けを防ぐためのスクリーンセーバーというやつだ。

「ちよつとインターネット使わせてもらっていい？」

関が訊いた。芳賀は「ど、どうぞ」と言い、慌てて席を譲る。

マウスに触れると、画面が再びデスクトップに戻る。何かのプログラミングの途中の様だ。関はそれに触れない様に、インターネットブラウザを開き、ニュースサイトにアクセスする。

三嶋暁子が刺された事件について、詳細記事が更新されている。彼女は背中に果物ナイフが突き刺さった状態のままの姿で、荒川河川敷の土手に倒れていたらしい。凶器に使われた果物ナイフは刃渡り約十五センチ。二十四日の午後六時半前後に刺されたものと見られている。病院に搬送され約二時間後に暁子の意識は戻り、命に別状は無い。

おかしな事に犯人の情報は何一つ書かれていなかった。彼女は犯人を見ていなかったのだらうか？ 背中を刺されていたのだから、見ていなくても不思議は無いが。

「あ、その事件……」

芳賀が横から覗き込む。「酷いもんですよね……。何でも、荒川河川敷の土手に、裸で倒れていたらしい……です」

「裸？ そんな事はどこにも書いてないけど」

「もっと詳しく書かれたサイトがあるんです、ふふ……秘密ですけど」

「どうせデマじゃ無いのか？ ネットなんて大きなニュースサイト以外の情報は信じられないからな」

隣人が刺されたと言うのに、ニタニタと薄気味悪い笑みを浮かべている芳賀に、関は少し苛立ちを覚える。一通りニュースサイトを巡回したが、目新しい情報は無かった。

何となくブラウザの閲覧履歴を開いてみる。芳賀が最近アクセスしたと思われるサイトの履歴がずらりと表示される。アニメのページが多かったが、一つだけ「出会いを求めチャオ」という名前のサイトがあった。気になったのでアクセスしてみると、女の子の写真がトップに数枚表示される。一瞬アダルトサイトかと思ったが、どうやら出会い系サイトの様だ。自分の名前とメールアドレス、性格や好きな異性のタイプなどを入力して会員登録する。会員同士、登録されたプロフィールを見て、お互い好みに合った異性とメール交換が出来るというシステムだ。

「ふうん、芳賀君ってさ、アニメのキャラクター以外興味無いと思ってたけど、こんな趣味もあるんだな」

「え、ええ……まあ」

芳賀は頭を掻く。「アニメもいいんですけど……そろそろ生身の人間の恋人が、欲しいなって……ふふ」

「だけどさ、出会い系なんかで果たして芳賀君に恋人が出来るのかねえ」

「例えば、僕はゲームのプログラムをしているので、その、ゲームが大好きな女の子と……いい雰囲気になれるかも、なんて……」

「芳賀さんには絶対に無理ですって」

桶谷が横から口を挟む。「生身の女の子と違って、リンリンちゃんは裏切りませんよ。ね、一生リンリンちゃん萌えて生きましょーうよ」

「う、うるさい」芳賀は桶谷を小突く。
「芳賀君って、どんな感じの女の子が好きなんだ？」
「そ、そうですね……外見は、お隣の暁子さんみたいな清楚な感じがピッタリです……。
中身は、ええっと、ちょっとツンツンとした感じの、気の強い人が好みです……」
「外見清楚で、中身はツンツンねえ」
関は鼻を鳴らす。「アニメの見過ぎじゃねえの？」

15

「高校の生徒に変質者だと睨まれない様、三嶋才人は男子生徒に「事故で亡くなられた春川由里さんのお通夜に伺いたいんですが」と尋ねていく事にした。ここが女子高で無くて幸いである。

三人目に声を掛けた生徒が偶然彼女のクラスメイトだった。昨晚クラスの連絡網で事故の一報を聞き、今晚お通夜が執り行われるそうだ。

由里——正確にはユリの体——が間違い無く死んでいる事が確定したため、彼女の体の中に暁子の魂が入っていたとすれば、彼女の魂の生存は絶望的だった。それとも、通夜の席で生き返るのだろうか。そうなった時のために、何としてでも自分は通夜の席に参列しなければいけない。そして、ユリは間違いなくこの通夜に現れる、と才人は思った。

由里のクラスメイトに住所を聞き、才人は車を走らせる。S病院から二キロも離れていない。もしかしたらユリは、もうそこに向かっているのかも知れない。

指定された場所付近を回っていると、喪服を着た男が何人かうろついていたので、才人はすぐ近くの百円パーキングに車を止め、歩き始める。赤い三角屋根の一軒家の入口を、葬儀会社の職員と思われる者が数人、慌ただしく出入りしていた。家の前を通り過ぎ様にちらりと表札を確認めると、「春川」とある。

午前八時二十分。まだ通夜の準備すら始まっていない。思ったよりも早くユリの自宅を見つける事が出来たので、一度引き上げる事にした。家の周辺を一周しながら辺りの様子を窺ったが、ユリがどこかに隠れている様子は無かった。

駐車場の入口まで戻って来た時、才人の携帯電話が鳴った。

「もしもし」

『ああ、やっと繋がった』

関丈史の安堵の声。『才人、大丈夫なのか？』

「何が？」

『何がってお前……奥さんに決まってるだろう。刺されたんだろ』

「ああ……うん」

才人は一瞬何と答えていいのか分からなくなる。「大丈夫だよ」

『そうか、良かった……。お前の方は大丈夫なんだな？』

「僕？ 僕は刺されてないけど」

『馬鹿、そんな事を言ってるんじゃないやねえよ。奥さんが刺されて、その、早まった事をしてないかって事だよ』

「早まった事って？」

本当は関が何を言おうとしているのかは分かっていたが、才人はあえて惚けた。

『もういいよ。今、奥さんの病院なのか？ 俺もすぐ行くから場所教えろ』

「いや、来なくていい」

『どうして？』

「一応、面会謝絶なんだ」

『そんなに酷いのか？』 関が驚いた声で言う。

「そうでは無いけど……ほら、朝から警察の事情聴取なんかがあって、今かなり精神的に疲れてるんだ。だから今日一日はゆっくり眠らせてあげないと」

『なるほどな。確かにそうした方がいいな。……分かった。お前も色々と疲れてるだろう。あんまり無理するなよ』

『ああ。分かっている』

『ところでさ、奥さんは犯人の顔を見ていないのか？』

「えっ……」

『色々ニュースを見てるけどさ、犯人に関する情報がどこにも書かれてないんだよ。奥さんが生きていると犯人が知ったら、また殺しに来るかも知れねえから、もし犯人を見ているのなら警察に言った方がいいと思って』

「それが、後ろから刺されたから、見てないらしいんだ……」

暁子は見えていた可能性が高いが、ユリは犯人どころか、自分の身体が果物ナイフで刺された事すら知らないのだ。犯人に関する有力な情報は彼女から一切得る事が出来ない。目撃者が居る事を祈る他無い。

『まあとにかく、何か困った事があったら連絡しろよ。会社再開は、落ち着いてからでいいからな』

「あかさ……会社の事だけだ」

『辞めないよな？』

「えっ？」

『やるしか無いんだ。奥さんを納得させるまで、死ぬ気で頑張れ』

関はそれだけ言うと、電話を切ってしまった。

才人は虚ろな表情のまま、車に乗り込む。

(暁子を納得させるまで……か)

関の言う通りかも知れない。才人は暁子の言う末路にならない様にと身を退く事ばかり考えていた。納得しないまま居なくなってしまうけれど、是が非でも会社を成功させて、サイダーハウスに居た頃以上に、幸せな生活へと迎え入れてあげよう。

会社は続ける。いつか帰ってくる、暁子の笑顔のために――。

青山表参道にてウィンドウショッピングを楽しんでいた藤原千鶴は、先ほど訪れた店で購入した虹色のセーターに早く着替えたくて、ウズウズしていた。店内の試着室で着替えても良かったのだが、これから昼食をとるのだから汚れては困るのだ。

八百円以内でランチが食べられるお店に入ろうと適当に歩き回っていると、街の一角に

行列が出来ているのが目に入った。店の前にずらりと並んでいるのはカップルばかりだ。興味をそられて、千鶴は最後尾についた。行列を見ると並びたくなる性分なのである。並び始めてから、初めてその店の看板に目を留める。桜草を象ったロゴマークの傍に「サクラドール」と書かれている。

思い出した。二年ほど前に青山にオープンした人気のチョコレート店だ。マスコミに取り上げられるほど絶大な人気を誇っていたが、去年の暮れに経営者が亡くなって店が潰れてしまった。それでも、もう一度サクラドールのチョコレートを食べたいというファンの声が多かったため、今年の冬に復活するという情報が、確か女性週刊誌の片隅に載っていた。

明日から出勤日だ。会社の皆に買って行ってあげよう、と千鶴は思った。ただ、あの憎らしい新社長と、髭面の男には絶対にあげないでおこう。

行列にカップルが多いのは、どうやら恋人同士でチョコを購入すると三割引になるというクリスマスセールを実施しているからの様だ。独り者にはむかつく売り文句だが、チョコが美味しければ、それに免じて許してあげるとするか。

「久しぶりだね、和久田」

千鶴の順番まであと一組まで迫った時、前に居たカップルの男の方が、突然店員に挨拶し始めた。和久田と呼ばれた店員と顔馴染みの様だ。彼は爽やかな笑顔を浮かべる。おいおい、このまま何十分も話し込むつもりじゃ無いだろうな。

「去年までどこかの菓子工場で働いていたと思ったら、突然こんな有名店の店長になるとは驚いたよ」

「はははっ、何と言ってもこのチョコレートの味を出せるのは、お菓子博士の俺しか居ないからな。前の経営者の弟さんから、是非にと頼まれたわけよ」

「そう言えばこの間、マキムラさんから絵ハガキが……」

「ちよつとネイロ君！ その辺にしとかないと後がつかえるでしょ！」

カップルの女性の方が怒った様に言う。綺麗な人だった。男は一発で静かになった。『ネイロ君』と言うのはその男のニックネームだろうか。千鶴が見る限り、どう見ても彼が日本人であるのは確かだ。

「この生チョコを二箱ちょうだい」女性の方がVサインを作りながら言う。

「あいよー」

威勢のいい返事をする、和久田という男は箱を取り出し包装を始める。いい手際だった。しかし三割引でも一箱二千円近くもする。カップルは会計を済ませると、軽く挨拶してから幸せそうに帰って行った。

「どうも、いらっしやいー」

コック帽をかぶった丸顔の彼はにこやかに千鶴に声を掛ける。でっふりとした巨体に、腕力のありそうな太い腕。この顔を一目見れば二度と忘れないというぐらい、インパクトがある男だ。名札には「店長・和久田翔平」と書かれている。

「あのおー、あたし、ここのチョコレート初めてで、よく分かんないんですけど、どれが一番店長さんのお勧めですか？」

千鶴が訊いた。和久田は「うーん」と唸り始める。

「どれも旨いんですけどねえ、さっきのカップルが買って行ったこの生チョコは如何でしょ

う？　とろける様な舌触りで、それはもう絶品ですよ」

「明日まで持ちます？」

「へい、冷蔵庫に入れて冷やしておけば大丈夫かと」

「じゃあそれを二箱ください」

「あいよー」

彼は即座に包装を始めた。「カップルだと三割引なんです、お客さん可愛いので特別におまけしちゃいましょう」

「えっ、いいんですかあ？　ありがとうございます！」千鶴は両手を叩いて喜ぶ。

「その代わり口コミ宣伝、お願いしますね。お客さん顔広そうだから」

「あ、分かります？　実はあだし、広告作るお仕事やってるんですよ。主にホームページのイラストを描いてるんですけどー」

「それは凄いな。是非今度ウチのホームページ作ってもらおうかな」

「じゃ、名刺、あげます。メールかお電話くださいねっ」

千鶴は和久田に名刺を渡した。彼はえびす顔でそれを受け取った。

生チョコを買い終え、サクラドールを出る。お腹の虫が鳴ったので、近くの店で昼食をとる事にした。鼻歌交じりに手頃な店が無いかキョロキョロしていると、建設中の工事現場の脇を、ふと見覚えのある女が横切った。

(あれっ……)

千鶴は思わず振り返る。しかしその女は千鶴の方に振り向く事の無いまま、喧噪に紛れて消えていった。その黒いワンピースの女は三嶋才人の妻、暁子にとてもよく似ていた。

(人違いか。あの奥さんが青山を一人でうろつくはず無いもんねっ)

千鶴は勝手に納得した。

表にパスタランチが八百円という看板が出ていたので、彼女は「ガットネーロ」という名のそのイタリアンレストランの扉を開いた。店内に入ると、思いの他暖房が効いていたので、チョコレートが溶けないかどうか心配だった。

「いらっしやいます」

髪を金髪に染めた、コワモテ風のウェイターがやって来た。

「パスタランチ一つくださいー」千鶴は指を一本立てる。

「はい……パスタランチがお一つですね」意外と応対が丁寧だった。

「あつ、それからね、さつきそこでチョコレート買ったんですけどお、暖房の熱で溶けちゃいそうだから、悪いんですけどお店の冷蔵庫に入れといてもらえませんか？」

「はい、いいですよ」

「ありがとうございます」

親切な店だ。こういう店はきつと味もいいに違いない。千鶴はチョコレートの入った紙袋をウェイターに渡すと、彼は厨房に戻っていった。

五分もしないうちに料理が運ばれて来たので、作り置きしていたのでは無いかと思ったが、彼女の最初の予想を裏切る事無く、パスタは最高に旨かった。

喪服に着替えてから、三嶋才人は春川由里の自宅に向かった。

車中で、もし故人との関係を訊かれたらどう言い訳しようかと考える。「友達です」と答えようにも年が違いすぎる。それに才人の顔は全国放送のテレビに映し出されているので、下手な嘘はつけない。さんざん悩んだ末、とある私立高校のホームページを制作する時に、彼女には取材に協力してもらった、と話す事に決めた。

才人は午後六時四十分に春川家に到着した。家の周辺には、既に人だかりが出来ており、当然の事ながら制服姿の高校生が目立った。

ちょうど焼香が始まったばかりの様だ。才人は年配の男の集団に紛れる様にして、受付の列に並ぶ。一礼をし、香典を渡す。帳面には正直に『三嶋才人』の名を書いた。顔を上げた時、受付脇に立っている親族と思われる年配の女性と目が合った。由里とどういう関係なのだろう、という目で才人を凝視していたので、後で事情を説明しなければならぬ。

才人は列に続いて祭壇の前にやって来る。遺影の中の春川由里は予想とは違い、真面目な優等生といった感じの顔立ちで、くりつとした大きな目と、少しだけはにかんだ様な口元がとても印象的だった。

焼香を済ませて、表に出る。すすり泣く女子高生達。涙は出ていないが俯いたまま消沈している男子生徒達。そして親族達の悲哀に満ちた表情が、やりきれない無念さを物語っている。

そう言えば、才人にとってこの通夜は暁子の通夜になるかも知れないのだ。そう思うと、ずっしりと心の中に重みが増した。彼女は死んでいないという想いと、彼女の死を悼まねばならないという二つの反発した想いが、才人の精神を駆け巡っていた。

受付の近くで立っている、やはり先ほどの女性が才人を気になったのか、近づいて来た。反射的に才人は小さく「この度はご愁傷様でした」と呟きながら頭を下げる。

「由里の母でございます。お忙しい中、わざわざお越しいただきまして、本当にありがとうございますございました」

「いえいえ……」

「あの、大変失礼ですが……」

「あっ、僕は三嶋と言います」

尋ねられる前に才人は名刺を差し出した。「ホームページを作る仕事をしていまして、ある高校のホームページを制作する時に、由里さんと知り合いました。彼女には取材に大いに協力して頂きました」

「……取材と申しますと、どの様な？」

「いわゆる意識調査というやつです。この付近の高校生百人に学校生活に関する簡単なアンケートを採っていたのですが、由里さんに声を掛けたら、是非積極的にお手伝いしたい……と言われました。色々と聞かせて頂きました。おかげで大変助かったものです」

口からでまかせだったが、母親はそれを聞いて肩の力を緩めた様だ。

「はあ、なるほど、そういう事でしたか。……お役に立てて何よりです」

「……交通事故だったそうですね」

「ええ……。後で聞いた所、恋人とご飯を食べに行く約束をしていたそうで、その待ち合わせの最中に車にはねられて……。あの辺りは暴走族が多いと聞きますので、多分からまれて、その人達から逃げている時に大通りに飛び出したものと……」

「そうですか……」

「事故を起こした運転手の家族が今朝謝罪に来られていましたが、とても恨む気にはなれませんでした。勿論、娘をそんな危険な所に一人で待たせた男の子も恨む気にはなれませんが、恋人を失った哀しみを考えると、責める事など出来ません……。むしろ恨むとすれば、娘を追い込んだ暴走族の人達です」

「そう言えば最近、かなり数が増えてきているらしいですね」

本当はそんな情報は全く知らないが、才人は話を合わせる事にした。

「ええ。つい最近、河川敷の方で乱闘騒ぎがあったとかで、何人かは捕まったらしいんですけど……相手グループに報復するために、どんどん仲間を増やしているとか……本当に恐ろしい世の中になったものです」

母親は深々と頭を下げ、また別の人間に挨拶をしに行った。

人だかりは増える一方だった。だが大半は高校生なので、暁子の様な年齢の女性がうろついて居れば目立つはずだ。才人はユリの姿を探す事に集中し始めた。

一時間が過ぎ、そろそろ焼香が終わろうとしていた。

(もしかしたら明日の葬儀の方に来るのかも……)

才人が諦めて帰ろうとした時、

(——ユリ)

黒のワンピースを身に纏った女性が現れた。紛れもなく暁子の姿だった。

才人が声を掛けようとしたが、学生の列に阻まれ近づけない。暁子——いや、ユリは受付に軽く頭を下げ、香典も渡さずに中へと入って行った。

学生達を避け、才人は彼女の後を追う。

祭壇の前に彼女は立っていた。

両手を合わせたまま、彼女は動かない。

じっと動かない。

才人は声を掛けるのも躊躇われ、

その様子を黙って見つめる。

数十秒後、

ユリは両手で顔を覆い、

その場に膝をつき、

泣き崩れた。

才人は駆け寄ると、

彼女を抱き留めた。

ユリは泣き濡れた顔で、才人を見る。

暁子のそんな顔を見た事は、一度も無かった。

彼女は才人のシャツを乱暴に引き掴みながら、

縋り付く様にして思い切り泣き始めた。

才人とユリは、車に乗って共に家路についた。彼女の精神力は大したもので、車に乗る

頃には既に平静を取り戻していた。彼女の表情から、ある種の決意の様なものが才人には感じられた。

「お葬式の方は、どうする？」才人が訊いた。

「……もういい。行きたくない」助手席のユリが吐き捨てる様に言う。

「そうか……そうだね」

「……ねえ、それより昨日の年間契約の事だけどさ」

ユリの声が少し明るくなる。「あ、年間契約って言うのはね、昨日あんたが言い出した、一年経ったら離婚して、整形でも結婚でも、私の好きな様に生きればいってやつ
の事ね」

「うん。分かってるよ」

「一年でいいのね？」ユリが訊いた。

「え？」

「一年でいいのかって訊いてんの」

「ユリ……」

「契約する。要は一年間だけ、あんたの奥さんを演じればいって事でしょ？」

「いいのかわ？」

「いいのかって……」

ユリが笑い出す。「元々あんたが言い出した事じゃん。馬鹿じゃない？」

「……ありがとう」

「馬鹿って言われた事が？」

「……ありがとう」才人は真剣な眼差しでユリを見て言った。

「前見てよ前。運転中でしょ」

「ああ……」才人はハンドルを切る。

「ただし、この契約を交わすためには条件が七つ必要よ」

「多いね」

「まず一つ目、他の人が居る時は暁子と呼んでもいいけど、二人きりの時は私の事をユリと呼ぶこと。二つ目、キスもHも一切無し。三つ目、毎月お小遣いをくれること」

「ちよつと待った。いくら欲しいんだい？」

「うーん、最低三万円かな。現金を直接手渡しでちょうだいね」

「何に使うの？」

「本とか、CDとか」

「それならクレジットカードを渡しておくからさ、好きなだけ使っていよいよ」

「現金じゃなきゃ駄目なの」

「……分かった。五つ目は？」

「五つ目は……ちよつと、何誤魔化してんのよ。四つ目でしょ。四つ目は、せめてお化粧やコーデイネイトぐらいは私の好きにさせる事。五つ目は私があんたを引っぱたく事はあっても、絶対にあんたは私に暴力をふるわない事」

「僕は女性に暴力をふるった事なんて一度も無いよ」

「OK。六つ目、『暁子ならこうしてた』とか『暁子はそんな事はしなかった』とか、いちいち奥さんと同じ行動を強要しない事。七つ目、私の正体を絶対誰にも漏らさない事」

「言わないよ」

才人は口を尖らせる。「言ったとしても誰にも信じて貰えないだろうけどね」

「でも人前であんたがユリとか呼んだりしたら、何かおかしいと気付くよ」

「なるべく気をつけるよ」

「条件は以上。契約を結んでいい？」

「僕からも一つ条件、いいかな」

「それは駄目」

「まだ言っていないよ」

「何なの？」

「その『あんた』って呼び方は、やめて欲しいな。出来れば名前で呼んで欲しい。二人きりの時は別に苗字でもいいけど」

「あんたの名前、何だっけ？」

「才能ある人と書いて、才人」

「サイト？ 名前負けしてない？」

「たまに言われる」

「へえー、才人か。才人君」

「さん」

「才人さん？」

「うん。暁子はそう呼んでた」

「ちよつと、いきなり六つ目の条件破らないでよ。契約破棄するわよ」

「ごめん。……まあ、好きに呼んでいいよ」

「二人の時は呼び捨てで、皆の前ではさん付けで呼べば文句無いよね？」

「まあ、そうかな」

「分かった。そうする」

ユリは座席を後ろに倒して、リラックスし始める。

「ああ……ユリが戻った事、警察に連絡しないと」

「警察って？」

「病院から脱走しただろう。あのせいで朝は大騒ぎだった。もしかしたら今も警察の人達が病院の周辺を探し回ってるかも知れない。伝えないと……。ところで、どうして脱走なんかな？」

「色々事情があったのよ。気持ちの整理もつかなかったし」

「大体、お金も持っていないのに、その服はどうしたの？」

ユリは左手を才人の方に差し伸べる。一瞬意味が解らなかった。何の変哲も無いただの左手。暁子の手は小さい。しばらく見ている内、強い違和感が生じた。

「……まさか」

才人はハツとした表情で言う。「暁子の結婚指輪を？」

「質屋で五万円だった」ユリは左手をパーにしたまま、引っ込める。

「何て事を……」

才人は路肩に車を幅寄せし、ブレーキを踏んだ。

「だって結婚指輪を売ってはいけないなんて約束、あった？」ユリは悪びれる様子も無く

言う。

「あれは暁子との結婚が決まった日に、限定販売されていた大切な指輪なんだぞ。それをよくも……」

「その割には随分安かったよ」

「……買い戻す。どこの質屋なんだ？」

「S病院の、すぐ近く」

才人は溜息混じりに車をUターンさせる。

「きつと、もうお店閉まっちゃってるよ」

「叩き起こす。誰かに買われたら大変だ」

才人はステアリングを握り締める手に力を込める。

「ねえ、どつかで晩ご飯食べて行こうよ。私、朝から何も食べてないんだよね」

「そんなのは指輪が無事だったらの話だ」

「無事じゃ無かったら、晩ご飯抜き？」

ユリの言葉を無視し、才人は再び舟渡方面へと車を引き返す。横目で車内のデジタル時計は午後八時三十五分を指していた。信号待ちをしている間に、急激にユリに対する怒りが込み上げて来る。金が無ければ病院に戻って来ればいいだけなのに。しかし彼女の疲れきった表情は暁子が時々見せるそれと全く同じで、才人は苛立ちを心の内に封じ込めるしか無かった。

「才人の奥さんってさ、どんな感じの人？」ユリが訊いた。

「ユリとは正反対の性格だった」

「分かりやすい説明をありがとう」

ユリは頬を膨らませる。「きつと真面目で、おしとやかで、優しい人だったのね。頭も良さそうだし。よく見ると品のある顔立ち」

「そうだね、まさにその通りの性格だった。……過去形にするのはやめようか。暁子は、姿形はとも地味な雰囲気だけど、人に安らぎを与える、温かみを心に秘めているんだ。僕は彼女のそういう所に惹かれた。……そう言えば、あの遺影を見る限りでは、ユリも結構優等生っぽくて、品のある顔立ちに見えたけど」

「まあね。私はね、クラスでは近年稀に見る天才児と恐れられていたわ」

「それは無い」

「奥さんは専業主婦だったの？」ユリは話題を変える。

「うん。元々は僕が前に勤めていた会社で事務を担当していたけれど、結婚して退社した。暁子自身がそれを望んだんだ」

「私はきつと駄目だなあ。専業主婦って何かさ、家に拘束された感じがして窮屈なのよね。結婚しても働きに出てさ、うーんと身体を動かす仕事がしたい」

「今時の女の子って、そうなのか。専業主婦を望む人が多いと思っていたけど」

「そんなの人によりけりじゃない？ 私の友達は、専業主婦を望んでいる人が多いよ。……でもさ、最近は共働きしないと、安定した生活が出来なくなったじゃん。きつとこの先、専業主婦なんてものは、どんどん減っていくんだよ」

「そうかも知れないね」

「才人ってさ、何の仕事してるの？ 奥さんが専業主婦だし、金ならいくらでもーみたい

な事をさつき言ってたし。結構、大金持ちのボンボンだったりするんじゃない？」

「ウェブデザイナーをやってる。最近会社を作ったんだ」

「えっ、社長なの？」

「……まあ、そういう事になるかな。僕と友達だけでやってる、いわゆるSOHOというやつだけ」

「へえー。凄いんだ。ちよつと見直した」

「経済力の方は、お世辞にもあるとは言えない。ただ、僕と暁子はお酒も煙草もギャンブルも一切やらないし、お金の掛かる趣味があるわけでも無いからね。おまけに暁子が儉約家だから、生活に掛かる支出が少ないというだけ」

才人がそこまで言った時、懐に入れてあった携帯電話が鳴った。右手で取り出して画面を見ると、見知らぬ番号が表示されている。運転中は電話に出られないので、そのままカップホルダーに立て掛ける。しかしなかなか鳴り止まない。

「ね、私、出てみようか？」ユリは訊いた。

「大丈夫か？」

「大丈夫、大丈夫。こういったコミュニケーションも一応練習しないとさ」

「くれぐれも対応は丁寧に。もし何か分からない事があつたら僕に尋ねる事」

「分かってるって。……はい、もしもし」

ユリは電話に出た。「えっ、ああー、はい、無事です。……うん？ あ、今ね、ちよつと運転中です。……えー、今からそっちに？ それはちよつと……どうしてもですか？ うーん……」

「どうした？」

「志村警察署の人。今から署まで来られないかってさ」

「分かった。あと三十分もすれば着くって言って」

「事件について、奥さんから話を伺いたって言ってるんだけど。事件って？」

「ああ……そうだった、弱ったな……」

ユリが帰ってきた事だけを伝えればいいと思ったが、よく考えると彼らは暁子殺人未遂事件の捜査をしているのだ。彼らの本来の目的は、被害者から事件の詳細を訊く事にある。

しかし最大の問題は、ユリに事情聴取しても無駄だという事である。暁子が刺された時の事は記憶が飛んでいるという理由で押し通すしか無いが、暁子は実家に戻ると言って家を出ている。そこから約八時間近くの空白がある。彼女が昨日一日どんな行動を取っていたのか、全て覚えていないというのはさすがに無理が生じるのでは無いか。かと言って、先ほど春川由里の母親についた様な嘘が、警察にも通用するとは思えない。仮に通用したとしても、捜査に支障をきたす恐れがある。

「とにかく、あと三十分で着く様に言ってくれるかな」

「あ、もしもし。あと三十分で着く様に言ってくれるかな、って言ってます。はい。じゃあ」

ユリは電話を切った。「で、どうするの？」

「どうしようか……」

彼女の昨日一日の行動を、分かる範囲で調べる必要がある。「ちよつと携帯貸して」

才人は携帯を受け取ると、再び車を路肩に停車させた。暁子の実家に電話するためだ。

二回ほどコールした後、暁子の父親が出た。才人の家に何度も連絡したが繋がらない、

と怒っていた。そう言えば彼には才人の携帯電話の番号を連絡していなかった。

『それで、暁子はどこに病院しているのかね?』父親の大きな声が耳元にこだます。

『ああ、もう退院しました。今一緒に……帰る途中です』

『そうか。しかし心配したぞ。刺されたと聞いた時には、君が刺したんじゃないかと思つて気が狂いそうになった所だ』

『はあ……』

『で、犯人はまだ捕まってないのかね』

『そうみたいです』

『何を悠長な事を言つとるんだ! 元はと言えば夫であるお前がしつかりしとらんから、こういう事に……』

次から次へと罵声を浴びせられる。いつもの事だが、彼女の父親とはどうも気が合わない。それにしても、彼はとても病気で寝込んでいる人間の声だとは思えない。完治したのだろうか?

『あの、お義父さん……』

『ああ? 何だね?』

『風邪の具合は、もう大丈夫なんですか?』

『風邪だと? 馬鹿を言うな。生まれてこの方風邪など一度も引いた事が無い。夫婦揃つてピンピンしとる!』

『えっ』

彼が強がりで言つてる様には思えなかった。となると、暁子が『両親が風邪を引いて寝込んでいる』と言つたのは嘘なのか? 彼女が才人に嘘をついた事は今まで一度も無かつた。一体何のために?

『おい、聞いたとるのか! 大体お前はいつも私の話を聞かんだ! 今回の件は、元はと言えお前が……』

話がループし始めたので、才人は電話を切つた。

(暁子は実家に帰っていない……)

暁子の実家は横浜だ。彼女が発見されたのは板橋区の荒川河川敷。全く逆方向である。暁子が自宅を出てから、犯人に刺されて河川敷に放置されるまでの間、一体何があつたのか。才人には見当もつかなかった。

『多少無理があるけど、事件当日の事は何も覚えてないと話すしか無い』

才人はユリを見て言つた。「何か聞かれても、知らないと言うんだ」

『だって本当に何も知らないしね』ユリが肩を竦める。

『僕の知つている事だけ、先に言つておく。暁子は昨日の朝九時頃に『実家に帰る』と嘘をついて家を出た後、行方が分からなくなった。……そして夕方、何者かにナイフで刺されて、荒川河川敷に裸で放置された状態で暁子は発見されたんだ。警察から僕に電話があつたのは六時半頃』

『裸で放置?』ユリが聞き返す。

『暴行の跡は無いと警察の人は言つていた。刺された後で服を脱がされたのか、服を脱がされた後で刺されたのかは知らないけど……。ナイフが背中に刺さつたままだったらしいから、後者の方が可能性は高いかな。死因は——生き返つてなかったら——刺されたシヨツ

クによる心臓麻痺らしい。ナイフの刺し傷自体は、命に関わるほどでは無かったそうだけど……」

「そう……」

ユリは哀しげな表情で俯く。そう言えばユリには、暁子は刺されて病院に運ばれたのだという事は一言も話していなかった。事故では無く、何者かに刺されたと聞けば、いくら気の強いユリでもショックを受けるのは当然の事だ。

「ユリが気にする事は無いよ」才人は優しく言った。

「……このまま私がこうして生きていて、ずっと奥さんが戻らなかつたら、犯人が捕まっても殺人未遂罪って事になっちゃうよね？」

「仕方が無いよ。殺人を犯すよりも軽い刑で犯人が裁かれてしまう事は、確かに納得はいかないけれど……。『身体は無事でも、魂が死ねば殺人罪』という法律でも出来ない限り、僕にはどうする事も出来ないから……」

「……奥さん、いつか戻るといいね」

ユリは呟く様に言った。「そうなつたら私は、消えちゃうね」

彼女の言葉に、才人の胸が締め付けられる様な痛みを覚えた。そうなのだ。明日には春川由里の身体が火葬されてしまう。この世から消えて無くなってしまう。暁子が自分の身体に戻る事があれば、ユリの魂はこの世界から――。

「……指輪は諦めるよ」

才人はエンジンを掛ける。「警察に寄つた後、何か美味しい物でも食べて帰ろうか」

19

セーターもチョコもパスタも大満足の日だった。クリスマスイブには良い事が何も無かつたけれど、クリスマスは幸せ尽くし。やっぱり神様って居るもんだね、と藤原千鶴は実感する。

両手いっぱいの手提げ袋を抱えて、千鶴は千駄ヶ谷のマンションへと帰つて来た。一日中買物を楽しんだので、くたくただった。でも会社の体制が大きく変わったため、明日は八時半には出勤していなければならない。八時まで眠る彼女にとって、何より辛い規則だ。

（才人は今頃どうしてるんだろ）

千鶴はリビングのテーブルに荷物を置き、五年間愛用しているマッキントッシュを起動させ、前に座つた。モニタには無理を言つて三嶋才人と一緒に撮つてもらつたプリクラが大量に貼られている。家に居ると、彼の事ばかり考えてしまう――。

藤原千鶴がサイダーハウスにイラストレーターとして入社したのは彼女が十九歳の時、すなわち二年前の事だ。幼い頃から絵だけが取り柄だった千鶴は高校卒業後、美大への進学を熱望していたが、学科試験に彼女が大の苦手とする国語と英語があつたせいで、あえなく落ちてしまった。両親に「大学が無理だつたら就職しなさい」と言われていたため、即就職活動の道を歩む事となった。

絵を描く事が三度の飯より好きな千鶴は、当然その方面での就職口を探していた。漫画家になろうと考えた事もあつたが、それを親に話すと「とにかく就職をしなさい」の一言

で片付けられてしまったので、渋々言う通りにする事にした。

イラストを専門に請け負っている会社での求人情報を職安で探してみたが、思ったよりも少なかった。それを友人に話したら「馬鹿ね、職安なんて古い古い。今は皆ネットに求人広告を出すんだよ」と言われ、インターネットを始める事にした。

サイダーハウスというホームページやパンフレットの制作などをメインに行う会社がイラストレーターを募集しているのを発見し、彼女はすぐに履歴書と作品を封筒で送った。二日後に「即採用」の電話があった。普通は面接を行って、それから採否を決める所が多いが、ここはあくまでも実績を重視する会社の様だった。

初めて会社を訪れた時、その自由奔放さに驚いたほどだ。社員全員が私服で動き回っている。営業に出る者は更衣室でスーツに着替えてから出掛けているが、インターネット事業部のウェブデザイナーは一日私服だったのだ。嬉しくなって、二日目から彼女はお気に入りのピンク系の服で出勤した。文句も言わなければ、褒める事もされなかった。

三嶋才人ときちんと話す機会があったのは、入社三日目の事だ。「仕事が出来る人間」と言うのはオーラが違う。どの社員よりも輝きに満ち溢れていて、とても格好良かった。

千鶴はそんなオーラを胸に感じ、彼に惹かれていた。何度かアプローチを掛け、デートをして貰ったが、才人は既に事務員の森田暁子と婚約しており、千鶴の恋は儂く散ってしまった。当時は暁子に激しく嫉妬したが、結婚式での彼女の幸せそうな顔を見ると、敗北感を味わざるを得なかった。

それでもサイダーハウスで毎日才人と顔を突き合わせる事が、彼女の楽しみだった。辞めたと聞いた時は酷く落ち込んだけれど、才人が新しく会社を作り、そのホームページのイラストを個人的に任せてもらえる事になった時は、飛び上がって喜んだ。彼を自分の才能でサポートする事が出来て、最高に幸せだった。

ようやくマックのデスクトップ画面が表示された。ずっと愛用しているマシンだが、起動が遅い事だけは玉に瑕だ。インターネットに接続し、メールチェックをする。一通だけ届いていた。

青山サクラドールの和久田です。さつきはどうも。

ホームページの件ですが詳しく聞かせて下さい。

当方初心者です。

パソコンはあるけどインターネットが使えないので、

方法を教えて下さい。待ってます。

(わっ、あの店長さんからだ！)

千鶴はすぐに「了解ですー！」と返事を出した。和久田からのメールは携帯電話から送信されている様なので、あまり長い文章は送れない。

(それにしても、うーん、インターネット接続からかあ)

機器との接続や設定は全て友人にやってもらったので、千鶴自身はその辺りの事には詳しくくない。サイダーハウスの技術担当でも連れて行くのかな、などと考えるが、堅物の新社長と髭面の男が、初心者をサポートまで引き受けてくれるだろうか。

「あっ、そうだ！」

いい事を思いついた。何もサイダーハウスにこの仕事を渡す必要は無い。才人だ。彼の会社にこの仕事を渡してしまおう。千鶴は才人宛にメールを書き始めた。

ちづる☆です。

今日はちょっとお願いがあります。

え？ いつもお願いしてるだろって？

それは言わない約束（笑）。

実は、青山に「サクラドル」という、それはもう美味しい美味しいチョコレート屋さんがあるんですが、そのの店長さんと仲良しになっちゃいました。

そのよしみで、

ホームページのお仕事を任せてもらえるかも知れません。

で、サイダーハウスのタコ連中に渡すくらいなら、

才人の会社に渡した方が百倍良いと思われるので、

一度話だけでも聞いてやって下さい、です。

店長さんは初心者さんらしく、

インターネット接続からお願いたいそうですが、

やりますか？ っていうか、やって下さい。

お返事待つてまーす。

ではでは。チャオ！

千鶴はメールを送った後、才人の会社のホームページにアクセスした。ちょうど三匹の子豚のうちの一匹が、布団に入った所だった。

20

志村警察署の前で蛭川刑事が煙草を吸っているのが目に入る。三嶋才人は署の前の駐車場に車を止め、ユリと共に降りた。

「どうも、ご足労おかけしました」蛭川が声を掛ける。

「色々ご面倒をおかけしてすみませんでした」

才人が頭を下げた。「実は今朝暁子の親戚で、突然不幸がありました……」

「その人がもう今にも死にそうで、私もう居ても立っても居られなくなって、ついつい才人さんを放ったらかしにして、病院を抜け出して親戚の元に行っちゃいました。そうしたら既にお通夜の準備が始まって、ああ、結局死んじゃったんだーって感じです。ごめんなさい」

ユリはまくし立てる様に釈明する。

「ははあ、それで慌てて病院を……。納得しました」

二人の喪服姿を見て、蛭川は意外とあっさり納得した様子だった。「しかし暁子さんが助かった事は、テレビのニュースなどで犯人が知っていると思われますので、いつまた狙われるか分かりません。しばらくはあまり一人で出歩かれない様にお願いますね」

「そうだぞ、あまり心配をかけない様に」才人がユリを睨んで言う。

「では、こちらへどうぞ。すぐ済みます」

二人は会議室の様な所に通された。テーブルが四卓、口の字型に並べられており、入り口から見て左側の席に、男が二人着席していた。

室内は程良く暖房が効かされているが、二人の男の内、年配の方はハンカチで額の汗を拭っていた。よほど暑がりなのだろう。

「はじめまして。警視庁捜査一課の後藤と申します」

「同じく捜査一課の本条です」

二人は座ったまま順番に名乗り、同時に頭を下げた。二人とも殺人未遂事件の捜査本部に派遣されて来たのだと蛭川は紹介した。

ハンカチで顔を拭っているのは後藤という刑事の方だ。歳は五十代前半ぐらいだろうか。ごつごつとした体格で、屈強な印象を受けた。顔も岩の様に硬そうで大きい。髪は禿げ上がっていて、汗で光っている。

一方の本条という刑事は結構ハンサムな顔立ちで、髪は長い。痩せぎすで顔色は悪いが、丸眼鏡の奥から覗く鋭い眼光は、ぞっとするほど冷たかった。

「お掛け下さる」

蛭川は才人達を促す。二人は席に着いた。

「えっと、二嶋暁子さん」

後藤が口を開いた。「昨日の今日で、まだまだショックが続いている事と存じますが、どうか事件解決のためにご協力下さい。……貴方を刺した犯人について、出来るだけ分かる範囲で結構ですから、特徴をお聞かせ下さい。例えば、刺したのが男なのか、女なのかとか」

「覚えてません」ユリは即答する。

「覚えてない？」

「はい。全く」

「そうですかあ……。ははあ……」

後藤が困惑した表情で、またハンカチで顔を拭った。

「見ていないのでは無く、覚えていないという事ですか。それは、犯人の顔を見た事は見たけれど覚えていない、という意味ですよね？」

本条が訊いた。「犯人を捕まえて、その人の顔を見れば思い出すかも知れませんか？」

「絶対無いと思います」ユリは下を見て答える。

「……奥さん、失礼を承知で言いますが、目を合わせて答えて頂けますか」

本条の言葉にカチンと来たのか、ユリはキツと本条を睨み「思い出せません！」と言う。才人は彼女を落ち着かせる様に、小さく「暁子」と呟いた。

「分かりました。それでは質問を変えます」

後藤が言った。「昨日の朝からの暁子さんの行動を、細かく教えて下さい」

「それも覚えてません」ユリは後藤の目を見て言う。

「はあ……？」

「全然覚えてないんです。私、昨日一日自分が何をしていたのか、全然覚えてないんですよ。うーん、多分、シヨックで記憶が飛んでしまったんだと思うんですけど。朝、買い物しよと家を出て、気が付いたら夜の病院に居ました。だから、お役に立てません。ごめんなさい！」

「何一つ……覚えていないんですか？」

「はい、何一つ……。私、馬鹿だから……ああ……」

ユリは両手で顔を押さえる。声を上げて泣き始めたので後藤が慌てふためく。才人は嘘泣きだなど思いつつもハンカチを差し出した。彼女の嘘泣きを見抜いたのは、通夜の時の泣き方とは全く違うからだ。彼女はハンカチを受け取り、顔に当てた。

「しかし……弱りましたな、犯人の特徴が何一つ分からないとなると……」

「聞く所によると、私を裸にして殺そうとしたそうですね。だから犯人は多分、男の変質者ですよ」

ユリはハンカチを才人に返した。触ってみると、やはり全く濡れていない。

「服は脱がされてから刺されています」

本条は手元の書類を見ながら言う。「脱がされていた衣類は、奥さんが倒れていた近くに落ちていましたが、血が付着していたり、破れている形跡は無く、全くと言っていいほど乱れはありませんでした。乱れが無いどころか、むしろ畳まれていた状態で捨てられた様な印象を受けました。だから変質者の犯行と考えると、おかしいんですよ。変質者が奥さんの着衣を無理矢理脱がして刺したのであれば、もっとぐちゃぐちゃに乱れていてもおかしく無いはずですよ」

「では暁子は自分から脱いだ、という事ですか？ 着ている服を全て？」

才人が訊いた。本条の眉がぴくりと動く。

「はい、その可能性が高いですね」

「犯人が脅して、自分から脱ぐ様に仕向けたんでしょうか？」

「いいえ。先ほど言いました様に、衣類は全て畳まれたまま捨てられたという印象を受けました。犯人の脅しに屈して、暁子さんが自分から脱いだとすれば、それが畳まれていると言うのは奇妙です。犯人がよっぽど綺麗好きだったのか、それとも……」

本条はそこで言葉を切った。「一つ言い忘れていました。暁子さんが刺されたのは、荒川河川敷ではありません。どこか別の場所で刺されて、あそこまで運ばれたんです」

「別の場所と言うのは？」

「それはまだ分かっていませんが、この真冬に屋外で服を脱ぐ人など居ませんから、室内でしょうね」

「あっ、もしかしたら、お風呂に入ろうとしていた所を襲われたのかも！」

ユリが口を挟んだ。「それなら衣類が畳まれている理由も、説明がつくわ」

「鋭いですね、奥さん。実はその可能性が高いと思っています。しかし河川敷から近い場所に位置する銭湯や健康ランドなど、全ての浴場に確認を取りましたが、暁子さんを目撃した者は誰一人居ません。よって、もし風呂に入ろうとした所を襲われたとするなら、犯

人の家の中、という事になります」

「河川敷から遠い場所にある浴場なのかも知れませんが」才人が言った。

「勿論その可能性も考え、都内全域の浴場を確認中です。単に、近い場所から始めているというだけの事です」

なるほど、抜かりは無い。この本条という刑事がいかにか切れ者であるのか、才人は震撼させられた。

「奥さんが襲われた時、風呂に入っていた可能性が高いのではと私が確信したのは、実を言うと別の理由です。先ほど奥さんは『お風呂に入ろうとしていた所を襲われたのかも』と言われましたが、そうでは無くて、私は奥さんが風呂から出た後に襲われた可能性が高いと見ています」

「そんな事まで分かるんですか？」才人が驚いて訊いた。

「ええ。救急隊員が現場に倒れている奥さんを運ぼうとした時、髪が僅かに濡れていたんだそうです。昨日はクリスマススイブでしたが、東京全域はあいにく雪どころか雨すら降らなかったもので、自然現象が奥さんの髪を濡らしたのでは無い事は確かです」

「賢いわね、この刑事さん」

ユリが才人に耳打ちする。才人は小さく頷いた。他の二人の刑事は口を挟む余裕すら無い様だ。と思っていると、後藤刑事が「あ、そうだ」と言い出した。

「奥さんの荷物に関してですがね、調べ終わりましたのでお返ししたいと思います」

後藤は大きな鞆を差し出した。昨日の朝、実家に帰ると言った時に暁子が持っていた鞆に間違いない。

「中に入っていたのは財布、保険証、携帯電話、着替えと歯ブラシ、化粧品、ポーチなどの類です。まるでどこかに泊まるうとしていたみたいですが、奥さん、覚えはありませんか」

「はい。全然」ユリは首を左右に振る。

「では、ご主人の方は？」

「さあ……旅行に行く予定は、無かったみたいですが」才人は首を傾げて言う。

「うーん……本当は奥さんの証言を元に、犯人に迫っていく形で捜査したかったんですがね。何一つ覚えてないと言うのは、いやはや参りました」

「こういうケースって滅多に無いんですか？」才人は訊いてみた。

「あるにはあるんですが、でも大抵、本当は覚えているのに犯人を庇っているか、犯人に対する恐怖心から口を閉ざしてしまうというケースが多くて、奥さんの様に記憶がすっかり飛んでしまうという事は非常に稀です……」

「やっぱり私の……私のせいで」ユリが又、両手で顔を押しさえる。

「ああ、いや、その、責めているわけではありませんので……」

「今日の所は、これでお帰り頂いて結構です」

蛭川が優しく言った。「その鞆もお持ち下さい」

才人とユリは立ち上がった。肩の荷が下りた感じた。

「奥さん」

部屋を出ようとした時、本条が呼びかけた。「貴方は結構、注意深いタイプですか？」

「うーん、どっちかと言えば……」

「はい！ 暁子は結構注意深い性格だと思いますが、それが何か？」

ユリが答えようとするのを、慌てて才人が遮った。

「最近はいウィッグと言っんですかね。ウェーブの掛かったロングヘアーのカツラが、鞆の中にありました。あと、サングラスも。……こうは考えられませんか？ 注意深い奥さんはそれを使って変装し、誰かに会おうとしていたのでは無いかと」

「……誰に？」

「そこまでは分かりません」

本条は丸眼鏡を軽く持ち上げた。「また何か分かりましたらご連絡致します。奥さんも、何か記憶が戻る様であればこちらにご連絡下さい。今度はご足労おかけしない様、お宅にお伺いしますので」

「……分かりました」

才人はユリを連れて警察署を後にした。車に乗り込み、発進させた所で二人はようやく緊張の糸を緩めた。

「あー！ お腹空いた！ ご飯行こうよご飯！」

ユリが背筋を伸ばしながら言う。「何？ もうすぐ十時じゃん。大体警察の話って、無駄に長いよ。特にあの本条って刑事、頭は切れるけど超嫌な感じ。何が『目を合わせて頂けますか』よ。お前は教師かつつの！ テーブル蹴っ飛ばして何度途中退場しようと思った事か。ああ、腹が立つ。あと、あのハゲ。ハンカチで汗をフキフキフキ。キモイし、気になって仕方無かったわ。そんなに暑いなら無理しないで、一言断って暖房緩めりゃいいじゃん。バツカじゃないの？ いつか脱水症状起こして死ぬわよ、あれ。……ああ、もう。あの人達には二度と会いたくないわ」

「気が済んだ？」

才人はクスッと笑う。「刑事に会いたくないと言うのは同感だけど、暁子をあんな目に遭わせた犯人を必死で捜してくれてるんだから、文句は言えない」

「犯人は今頃、どんな気持ちなんだろう」ユリは落ち着いて言う。

そうだね、と呟きながら才人は考え込む。

犯人は、自分の犯した罪を後悔しているだろうか。それとも、素知らぬ顔でいつもと変わらない生活を送っているのだろうか――。

人を傷つける事は決して許されるものではない。しかし、もし犯人が自分の過ちを死ぬほど後悔しているのなら、この先ずっとその重みを背負っていかなければならないのだ。

才人はそんな犯人に、少しだけ憐れみを感じた。

才人とユリは、国道沿いのファミレスにて遅い夕食を取る事になった。才人はさほど空腹というわけでは無かったがカレーライスを注文し、ユリの方は限界らしくハンバーグとグラタン、そしてチョコレートパフェを注文した。

料理を待っている間、才人はミニパソコンでメールチェックした。才人個人で使っているメールボックスには関丈史から二通、藤原千鶴から一通入っていた。合資会社印白塔で使っているボックスの方には二十通入っている。

ざっと目を通した所、会社宛てに届いたメールの方には仕事の依頼は無く、「奥さんは

大丈夫ですか」とか「三匹の子豚が可愛いです」といった仕事に関係の無い内容のメールばかりだったので、そのまま「ゴミ箱」へと移動させた。客からのメールをゴミ扱いしたくは無いが、不要なメールを格納するフォルダの名前が「ゴミ箱」になっているのだから仕方が無い。それに「ゴミ箱を空にする」という操作を選択しない限り、いつでもゴミ箱に入れたメールを読む事は出来るのだ。

関から届いていた一通目のメールは、子豚ファンにメールの返事を出しておいたという内容だった。今朝彼からの電話を受ける前に送られたものである。

二通目のメールは、夕方近くに送られている様だ。近い内に奥さんの見舞いに行く、と書かれている。詳しい日時までは書かれていない。

藤原千鶴から届いたメールは後で見ようかと思っただが、件名に「重要事項。お仕事なり」と書かれていたので、気になって開いてみる。青山のサクラドールというチョコレート店からホームページ制作の依頼があったので、才人に任せるとの事だ。

スカイビールの仕事が無くなり、先のスケジュールが全く未定であったため、この依頼は嬉しかった。関より千鶴の方が営業に向いているのでは無いかと思えてくる。才人は急いで彼女に返事を書いた。

三嶋です。

サクラドールの件、了解しました。

当面スケジュールが立っていないなかったので、助かります。

但し、当方諸事情により、

正月明けまで休もうと思っています。

打ち合わせは、来年一月四日以降で、

先方さんの都合の良い日時を折り返し連絡下さい。

(送信、と)

才人は送信ボタンをクリックする。彼は無駄な事はメールには一切書かない主義である。

「仕事？」ユリが尋ねた。

「うん、まあ」才人はパソコンの電源を落とし、鞆に仕舞った。

「ね、名刺見せてよ」

「ああ」才人はユリに名刺を渡した。

「合資会社……インパクトウ？」

「うん」

「変な名前」ユリは首を捻る。

「インパクトがあるだろう？」

才人が得意げになって言う。「ネーミングセンスには些か自信があるんだ」

「もっと可愛い名前の方がいいなあ。ミミーとか、メリーとか」

「猫の名前付けてるんじゃないから……」。ユリは、パソコンを使えるのか？」

「うーん……どちらかと言えば、苦手系」

ユリは苦虫を嘔み潰した様な顔になる。「大体あれってさ、わけの分からない用語が多すぎない？ インストールとかプロパティとか……。いつか学校でパソコンの実習があった時、多分操作ミスっちゃったと思うんだけどさ、『Aドライブをフォーマットしますか？』って質問が出てきたのね。どっちも専門用語じゃん。何それって感じで、わけ分かんなくて、とりあえず『はい』を選択したら、フロッピーディスクに入れてあったデータが全部消えちゃったのよ。あれは腹が立ったわね。それならそうと最初から『フロッピーに入ってるデータを消しますか？』って書けっつーの。その方が確実でしょ。初心者に辛すぎるのよ」

「パソコンはね、そういった失敗を何度も繰り返す事によって覚えていく物だよ」

才人は微笑んだ。「パソコンなんて、一種のゲームだと思えばいいんだ。格闘ゲームとかアクションゲームとか、最近はややこしい英単語やコマンドを必要とするゲームが随分増えたけれど、大抵は説明書に全て書いてある。それと同じ事さ。パソコンだって基本操作は全部説明書に書かれてあるんだからね。ゲームと聞くと操作を覚えられるのに、パソコンと聞くと途端に敬遠する初心者が多いのは、『パソコンは難しい物である』というイメージを、先人が植え付けたからに他ならない。確かに昔のパソコンは英語だらけで、グラフィカルなインターフェイスでは無かったから、とても操作が難しかった。僕が子供の頃はマウスなんて物が無かったから、パソコンで絵を描くにもプログラミングの知識が必要でね。でも今は違う。小学生でもコンピュータで絵を描いたり、文章を打ったりする時代だ。……コンピュータを始めたいと思う者は、まず第一に、これは難しい物だと思いい込みを捨て、ゲームだと捉える事が先決なわけだね」

才人が喋り終わった時、料理が運ばれて来た。まだ喋り足りなかったが、ユリがグラタんに集中し始めたので、話を中断する。カレーを一口食べると、とてつもない辛さが喉の奥に充満し始めた。才人は慌てて水を飲んで落ち着く。

「辛過ぎるよ。子供連れが多く来るファミレスなのに、何て店だ、まったく……。パソコンよりも、このカレーの方が初心者にはずっと辛い気がするよ」

「今の才人の話さ、とっても面白い」

ユリはスプーンを振り回しながら笑う。「長いけどさ、嫌いじゃないよ。いつも奥さんとそんな感じの話、してたの？」

「いや、暁子は一通りパソコンを使えたからね。僕の周りにはパソコン初心者が居なかったから、こういう話は滅多にする機会が無かった」

「へえー、夫婦揃ってパソコンが使えるのか」

夫婦で別々のパソコンを持っていてね、と才人が言おうとした時、

(そうか、パソコンがあった！)

彼は思わず立ち上がりそうになる。暁子は家計簿をつけたりゲームをしたりするために、自分専用のウインドウズを持っていた。あれに何か重要な手がかりが残されているかも知れない。帰ったらチェックしてみなければ……。

「ねえ、カレー、もう食べないの？」ユリが皿を指差す。

「うん……やっぱり食欲が無いみたいだ」

「じゃあ貰っていい？」

「いいけど……大丈夫？ 結構辛口だし、それに暁子は食が細いから、そんなに胃に入る

かな……」

「うーん」

ユリは腹を撫でる。「言われてみればそうね、私うつかり自分のペースで注文しちゃった」

「いつもそんなに食べるのか？」

「こんなには食べないよ。でも、お腹が空いてたらいけると思う」

「身体が違うと言うのは不便だね」

「それでも無いわよ。そりゃあさ、男の身体に移ったって言うなら色々不便だと思っけどさ、同じ女の身体なんだし、背丈もスタイルもほとんど前の身体と同じ感じだから、ぶっちゃけあんまり違和感は無いのよね。でも声が……声が全然違うから、ちょっと慣れないかな……。そう言えばさ、脳ってどうなってるのかしら」

「脳？」

「だって身体は全部暁子さんの物でしょ？ 心臓も肝臓も胃も……。と言う事は、脳も当然彼女の物よね。記憶とか感情とか、そういうのまで反映されないのは、何か変じゃない？」

魂と一緒に、脳まで持つて来ちゃったのかなあ……」

「確かにそうだね。考えもしなかったな」

「何だか怖くなってきた……」ユリはカレーを一口食べて、スプーンを置いた。

「怖い？」

「怖いよ……。もう嫌、私、早くこの身体から消えてしまいたい」

「ユリ、落ち着くんだ。あまり深く考えない方がいい」

「ああ……さつきまでは平気だったのに、何でだろ。凄く気持ち悪いの。暁子さんがじゃ無いよ。他人の身体の中に私が居るんだっていう、この不可解な現状が、すっごく気持ち悪いの。辛いよ。何で、こんな事になっちゃったんだろう……。私さえ消えれば、暁子さんが戻って来るんだよね。だったら早く消えたいよ……」

「暁子には元々の身体に戻って欲しいけれど、君が消える事を僕は望んでいないよ」

才人は優しく言った。「ずっと暁子が戻らなかつたら、その身体のまま生きて欲しい。ずっと生き続けて欲しいと思う。苦しいだろうけど、生きる事には必ず意味がある。ユリの魂が暁子に入り込んだ事にも、必ず意味があるはずだ。だから、消えたいなんて言わずに、今生きる事だけを考えて欲しい」

「生きる事には、必ず意味がある……」

ユリは目を閉じて何度もその言葉を呟いていた。

長い一日だった。一生忘れられないクリスマスになるに違いない。

才人は帰りの車内で、感傷的な気分になる。ユリは少しだけ元気を取り戻し、料理を何とか全て平らげた。デザートはチョコレートパフェだけは才人が半分手伝ったが、辛口カレーを食べて喉がヒリヒリしていたので、口直しにはちょうど良かった。

三嶋家に到着したのは、日が変わる十分前である。ガレージに車を止め、玄関へと急ぐ。ユリはしばらく建物を一瞥した後、「すっごい豪邸じゃん」と感嘆の声を漏らす。

リビングに入ると既にエアコンが掛かっており、温かな空気が漂っていたので、ユリは

驚いた。

「まさか、つけっぱなし？」

「いや、さつきファミレスから出る時にスイッチを入れた。これでね」

才人は携帯電話を見せる。「外出先から遠隔で操作出来る様になってる。他にも、室内に設置されたビデオカメラの映像を携帯電話に送る事も出来る」

「へえー、便利な世の中になったもんね」ユリは感心する。

「でも暁子には随分怒られた」

才人は苦笑しながら言う。「このシステムを入れた時ね、暁子のつけていた家計簿に初めてマイナスがついたんだ。お酒も煙草もギャンブルもやらない僕が、一度でいいから無駄遣いというのをやってみたかった」

ユリは不思議そうな目つきでエアコンを眺め回している。才人は暁子のパソコンの前に座ると電源を入れた。日記をつけていなかったか、誰かとメールのやり取りをしていなかったか、チェックするためだ。盗み読みする様で気が引けるが、彼女を刺した犯人を突き止めるためだ。

「あれ……」

プロンプトが起ち上がり、ログインにIDとパスワードを求められる。

「おかしいな」

「どうしたの？」ユリが画面を覗き込む。

「いや……これ、暁子が使っていたパソコンなんだけど」

才人は顎に手をやる。「暁子は今までパソコンにログインするのに、パスワードなんか掛けた事が無かったんだ。どうして急に掛け始めたんだろう」

「IDもパスワードも分からないの？」

「IDはAdministratorアドミニストレータ（管理者権限）でログイン出来ると思うけど、パスワードが……」

才人は暁子の誕生日や自宅の電話番号など、いくつか試してみたが駄目だった。彼女の好きな花や動物の名前なども入力してみたが、合わなかった。

「ちゃんとした言葉ならまだいいけど、ランダムな文字列だどうしようも無い。お手上げだ。この中に暁子が出た理由が書かれてあるかも知れないと思ったんだけどね」

「パスワードが無いと、全然中身が見られないわけ？」

「うん……。他に管理者権限を持ったユーザが存在すれば、パスワードをリセット出来ると思うんだけど……彼女一人が使うマシンにそんな必要性も無いし、厳しいだろうね。OSを再インストールする方法もあるけど、その場合はメールなんかのデータが消えてしまう。芳賀君に相談してみようかな」

「ハガ君？」

「うん。隣に住んでるパソコンマニア」

「ああ、パソコンオタク？」

「そうそう。パソコンマニア」才人は電話を取る。

「こんな真夜中に大丈夫なの？」

「彼の睡眠時間は把握してる。いつも三時までは起きてるんだ。……もしも、三嶋だけど、夜遅くごめん。実はちょっと頼みたい事があるんだけど、今からすぐ来てもらえる？……うん、悪いね。ありがとう」

芳賀明彦は三分もしない間に現れた。今夜はボサボサの髪をセットする暇も無かった様子で、灰色のセーターも皺だらけだ。低い声で「ど、どうも」と挨拶しながら、にやけ顔を覗かせた。彼のそんな顔を見て、すぐにユリの表情が険しくなる。

「お、お通夜の帰りか何かですか？ 喪服……」

「ああ、うん」

才人は上着を脱いでいたが、ユリは黒いワンピースのままだ。

「お……奥さん、お綺麗ですね」

芳賀はユリの方を見て薄ら笑いを浮かべる。ユリは芳賀に聞こえないくらい小さく「キモイ」と呟いて、才人の近くに隠れる様に寄り添う。

「芳賀君、これなんだけどさ……」

才人はパソコン画面を指差しながら、芳賀に席を譲る。「暁子がパスワードを忘れてしまったらしいんだ。何とかして外せないかな」

「あ、はい。ちよつと……やってみます」

暁子にいい所を見せてやらねば、といった勢いで芳賀はパソコンの前に座ると、いくつかのキーを叩き始める。ゲスト権限などから侵入を試みている様だ。しかし結果はNG。「うーん……OSをですね、再インストールするのが……一番手っ取り早いのでは無いかと……」

「その場合、メールなんかのデータは全部消えてしまうからね。彼女のインターネットのアクセス履歴も調べたいし……」

「えっ、彼女……?」

「あ、いや、そうじゃなくて、暁子のね」才人は慌てて訂正する。

「奥さん、その……何とかしてパスワードを……思い出す事は、出来ませんか?」

「っていうか、思い出せないからあなたに頼んでるんですよ?」ユリは芳賀を睨む。

「えっ……あつ、す、すいません」芳賀はびっくりする。

「まあまあ」才人はユリをなだめる。

「ちよ、ちよつと、待っててもらえますか」

芳賀はリビングを出て行ってしまった。

「もつと優しく出来ないのか?」才人はユリに言う。

「暁子さんってさあ、あんなキモイ奴にも優しく応対してたわけ? 私なら絶対耐えられない。大体、今日は会う男会う男何でこんなキモイ奴ばかりなの? 信じられない」

「もつと広い心を持たなくちゃ駄目だよ。君は気が短すぎる」

芳賀はすぐに戻って来た。何か持って来るのかと思つたが、何も持っていない。

「あの……ちよつと、しばらく出ていてももらえますか?」芳賀が言った。

「え、何で?」

「ちよつと……禁断の方法、使うもんで……ふふ」

「禁断? 法に触れる様な? それって……」才人は怪訝な表情を浮かべる。

「まあ、いいじゃないですか……この方法使えば、データを消さずにパスワードが外れる事は……保証しますから……お、お願いします」

「時間はどれぐらいかかる?」

「ご、五分ほどで済みます」

「分かった。出ようか」

才人はユリに言った。ユリは芳賀を睨み付けながら、リビングを出る。

「ね、あいつ、相当やばくない？」

オフィスルームに改造した書斎へ移動しながら、ユリが腕組みをする。「特に私を見る時の目つきが尋常じゃ無いっていうか。ストーカーの目ね、あれは」

「そうかなあ……。そんな事は無いと思うけど」

「今まで暁子さんは危機感が無かったのかしら」

「暁子は芳賀君に対してはむしろ好意的だよ。家計簿のデータがウイルスにやられた時、復旧してくれたりもしたし」

「見返りに何か期待してるんじゃない？」

「人を見た目だけで判断するのは良くない」

「うーん。でもほら、見た目と中身は紙一重って言うじゃない」

君が言うと言得力に欠ける、と才人は言いかけて止める。

二、三分待つっていると、リビングの方でガタツと物音がした。「終わりました」という芳賀の声が聞こえたので、二人はそちらに向かう。

「随分早かったね」

才人はパソコン画面を覗き込む。パスワードが解除され、デスクトップ画面が表示されている。

「ええ、まあ、僕に掛ければ、何て事無いです。ふふ……」

芳賀は照れ笑いをユリの方に浮かべる。彼女は相変わらず不機嫌そうだ。沈黙状態が続きそうになったので、才人は「ほら、お礼を言わないと」とユリに促す。彼女はぶっきらぼうに「どーも」とだけ言う。芳賀は気分を害する事も無く、むしろ満面の笑みを浮かべて帰っていった。

才人はパソコンの前に座り、メールソフトを起動する。最近受信されたメールを確認してみたが、料理教室からのお知らせと、ネットオークションの取引完了のお礼があるだけだ。

「ネットオークションで何を買ったのかな」

才人はオークションの取引履歴を探す。「ええっと、これだな。女性用ウィッグ……」

「カツラね」ユリも画面を見る。

「写真がある。確かめてみよう」

警察から受け取った鞆の中を調べる。衣類に紛れる様にして、ウェブの掛かったロングヘアのウィッグが見つかった。本条刑事が「変装に使ったのでは無いか」と推測していた物だ。

「間違いない、これだ。でもおかしいな、お礼メールが届いてる日の前後は、殆ど僕は家に居たけど、宅配便が届いた様子は無かった」

「暁子さんがこの人に送信したメールの方も見てみたら？」

「うん」

才人は送信ボックスをチェックする。「お取引の件」という件名の送信済みメールがあるので、開いてみる。送付先として指定されている住所と名前は、五十嵐早月の物になっていた。

「お隣さんだ」才人はユリを見る。

「なるほど、才人がずっと家に居るもんだから、注文した事がばれない様に、隣の家に送ってもらったってわけね」

「ちよつとこのウィッグ、着けてみてくれるかな？」

才人はウィッグをユリに渡す。彼女は受け取ると、頭に着け始めた。ただそれだけの事なのに、暁子の顔がぐんと大人になった様な印象を受ける。

「よく似合うね」

「サングラスも着けてみよっか？」

「うん」才人は鞆からサングラスを取り出す。

黒いレンズのサングラスだ。サングラスなんか今まで一度も掛けた事が無いという暁子に、遊びのつもりで才人が買ってあげた物だ。ユリはそれを掛けると、モデルの様にポーズを取って見せた。

「暁子がこんな姿で街を出歩く事なんて、僕には考えられない。……いや、彼女をよく知っている人間なら誰でもそう思うだろう。先人観というやつなのかな。暁子だと思って見ると、ああ確かにそうだと思うけど、そう言われない限りは絶対に彼女だとは思われない。たったこれだけなのに、完璧な変装だ」

「暁子さんはこんな格好で……」

ユリはウィッグとサングラスを外す。「何をしていたんだろね？」

「変装しなければいけない様な場所に行ったのか、それとも誰かに会おうとしていたのか……他にメールが無いか、見てみよう」

才人は彼女に届いたメールと、彼女が送ったメールの両方を入念にチェックし始める。

「ねえ、お風呂入っていい？」ユリが訊いた。

「ああ……ウチはシャワーだけど」

「OK」

「リビングを出て、右側の突き当たりにあるから。タオルは黒いカゴの中。脱衣場のタンスの一番下の段に暁子の使っていたパジャマがある。適当なの使って」

「今、過去形にしたね」ユリが言った。

「使っているパジャマ」

「行って来ます」

にこりと微笑んで彼女は部屋から出て行った。才人は溜息をつく。暁子の事を過去形にするのは止めようと言い出したのは自分なのに、彼女はもう死んでしまったのだと心の一部分が思い始めてしまっている。今もどこかで生きていると言う確証が欲しかった。

一通りメールに目を通してみるが、料理教室からのお知らせや、その仲間とのやり取りが中心で、その内容にも異常は無い。

——貴方は結構、注意深いタイプですか？

本条刑事の言葉が心に蘇る。

そう、暁子は注意深い性格だった。もし才人に読まれたくないメールなんかがあれば、彼女は必ず削除しておくに違いない。ネットオークションでの取引に関するメールだけを消さなかったのは、おそらく五十嵐早月が才人にウィッグの事を喋る可能性を考慮したのだろう。もしそうしなければ「どこで買ったんだ」という話になるからだ。

メールが消されているなら、きっとホームページのアクセス履歴も消されているだろう。才人はインターネットブラウザを起動し、履歴フォルダを確認する。やはりそこには、何一つ残ってはいなかった。

暁子が使っていたと思われるファイルも幾つか調べてみたが、家計簿やゲームのデータばかりで、日記をつけていた形跡は無さそうだった。

(……駄目か)

才人は椅子に凭れ、天井を見上げる。

その時、リビングのドアが開いた。緑色のパジャマを着たユリがタオルで髪を拭きながら、しかめっ面が入って来る。

「背中が何だかヒリヒリするんだけどさ、刺された時の傷なのかな。ね、ちょっと見てくれない？」

「うん」

ユリは才人に背中が見える様、少しだけパジャマを脱いだ。

「これは、縫い合わせた跡だね。無理も無い。暁子が刺されたのは昨日の夕方なんだから」

「どきつとした？」

「え、何が？」

「背中」

「別に……」

才人は目を細める。「そう言えば、犯人はどうしてナイフを抜かなかったんだろう」

「えっ、どういう意味？」ユリは服を戻す。

「河川敷で暁子が発見された時、背中にはナイフが突き刺さったままだった。ナイフが刺さったままだと、血はあまり流れないから、早急に病院に運べば助かる可能性がある。逆に、ナイフを抜けば出血が酷くなるから、そのまま失血する可能性は高い。犯人が暁子を殺すつもりだったのなら、必ずナイフを抜くはずだ。それに、凶器を残しておくという事は、証拠を残してしまう事になる」

「返り血を浴びるのを嫌がった、とか」

「だったらどうして凶器に果物ナイフなんかを選んだのかな。鈍器で頭を殴るとか、首を絞めるとか、血を浴びない方法はいくらでもあったはずなのに」

「もうっ、そんな事さ、考えてどうするわけ？」

ユリが呆れ顔で言う。「周りに鈍器が無かったからとか、暁子さんの首を絞め殺せるほど力が強くなかったとか、いくらでも説明つくんじゃない？ っていうかさ、そんな理由が分かった所で、犯人なんて分かんないじゃん」

「まあ、そうだね……。考え過ぎか」

「パソコンの方の収穫はどう？」

「ゼロ」

才人は即答する。「メールも、ホームページの閲覧履歴も全部消されてる」

「本当に注意深い人だったのね」

「いくら芳賀君でも、完全に削除されているデータの復旧までは無理だろうな……」

「シャワー浴びてきたら？ もうすぐ一時だよ」

「ああ……そうするよ」

才人はパソコンをシャットダウンさせる。

「私、もう寝るから」

「寝室は二階の突き当たりの部屋だ。僕はこのリビングに寝る事にする」

「普段は暁子さんと一緒に寝てるの？」

「部屋は同じだけど、ベッドは一台ずつだよ」

「なーんだ……」ユリは残念そうに言う。

「何？一緒に寝たいのかい？」

「契約条件の二つ目ってき、覚えてる？」

「分かってるよ……。それじゃ、どうしてそんなに残念そうな顔を？」

「決まってるじゃん」

ユリは鼻を鳴らす。「ダブルベッドを一人で占領出来ないからよ」

23

二〇〇五年、大晦日。

殺人未遂事件の捜査は依然として進んでいない様子だった。三日前に後藤刑事から電話があり、都内の全ての浴場において暁子の目撃情報は無いとの事だった。おそらくそんな情報は出ないだろうなど才人は思っていたが、見知らぬ人間の風呂場を借りたという可能性よりは、そちらであった方がずっと気が楽だった。

今まで考えなかった可能性——いや、考える事を避けてきたというべきか。やはりどう転んでもそれしか無い様に思えた。暁子は事件当日、誰かの家に居た。才人に「実家に帰る」と嘘をつき、変装をしてまで会おうとしていた相手。それは、男としか考えられない。もしかしたら暁子は浮気をしていたのでは無いか。

才人が会社を辞めてから、彼女は口数が少なくなった。自分に相談も無く勝手に会社を辞めた上、もしかしたら父親と同じ破滅の道を進んでであろう才人に、暁子は愛情を持ち続ける事が出来なくなったのでは無いだろうか。才人に対する愛情が唐突に冷め、新しい愛情を注げる相手を見つけた事を、彼女は選択したのでは無いだろうか。

今は自宅に居ながらにして、浮気相手を探せる時代である。その方法は言うまでも無く、インターネットだ。自分の好みに応じた友達や恋人を探し、その者達とコミュニケーションを図る事の出来る「出会い系」と呼ばれるサイトは今や無数に存在している。

近年、出会い系サイトで知り合った者同士のトラブルが増加している。相手を誘い出し、金目当てで暴行を加えるという事件が多く、中には殺人事件にまで発展している例もある。暁子もそんなトラブルに巻き込まれていた可能性が非常に高い。

事件の鍵は、やはりインターネットにある。暁子の使っていたパソコンの履歴は全て消されているが、三嶋家を利用してプロバイダ（接続業者）には、事件前日までのアクセス記録が残っているはずだ。しかし、プロバイダに情報開示を求める事が出来るのは、警察だけだ。

才人は警察に言って調べてもらおうとしたが、断念した。暁子の記憶が飛んだのは事件当日のみと既に彼らに話してあるからだ。それ以前の事を暁子自身が全く覚えていないと言うのはさすがに無理がある。

とにかく今は、静かに待つしか無いのかも知れない。

ユリは相変わらず暁子の身体のままだ。一週間共に過ごしてみて、彼女の特徴がだいぶ掴めてきた。

まず、家事全般は苦手の様だ。料理は麺を茹でるぐらいしか出来ない。市販の乾燥パスタにレトルトのソースを温めてかけるか、インスタントラーメンを調理する程度だ。洗濯は全自動洗濯機があるので特に問題は無いが、掃除についてはかなり大雑把だ。「家が広過ぎるのが悪い」と文句を言うので、七割以上は才人がやり直している。

暁子は灰色や薄紫色などの地味なトーンの配色を好むが、ユリは緑や赤、オレンジ系の濃い目の配色が好みで、三日前に渋谷まで一緒に服を買いに行った。絶対に似合わないだろうと才人は思っていたが、彼女の着こなしが上手いせいか、派手な色調の服装でも全く違和感が無い。本当はこの日、美容院にも行きたかったらしいが、髪を茶色に染めると言い出すので、それはもう少し待つて欲しいと才人がストップを掛けた。

ユリが元の身体に居る時は煙草を吸っていたらしいが、煙草を購入し、実際に吸ってみた所、酷く咳き込み始めた。ちなみに暁子はノンスモーカーである。「その内慣れるかな」と彼女は言うが、身体が二十九歳でも中身は未成年なことから、煙草なんか吸うもんじやないと才人が注意すると、意外にも素直に聞き入れた。根はいい子なのだ。

ユリはパソコンを敬遠していたが、才人が昔作ったゲームを幾つかプレイさせてみると、かなり受けが良かった。ホームページの制作実績もいくつか見せてみたが、発想が面白いと感心していた。

「この働きの子豚はさ、いつ寝るの？」ユリが画面を指差して訊いた。

「それは企業秘密」

才人がにやにやしながら言う。「とりたい所だけど、そうだな、ヒントをあげよう。働き者の子豚が眠る時間は約三十分もあるのに、このアニメーションを見ているお客さんはなかなかその姿に気付けずに居る。これはどうしてだと思う？」

「本当は寝てないとか？」

「はずれ」

「深夜三時か四時頃に寝てるんじゃない？ その頃ならお客さんも寝てるだろうから、誰も見ないとか」

「それも、はずれ。意外と深夜のネットユーザーが増えて多いんだよ」

「んー、じゃあさ、子豚は本当に三匹しか居ないわけ？ 一匹どっかに隠れてて、働き者が寝る時に交代するとか」

「三匹しか居ないよ」

「あつ、分かった。働いてる様に見えるけど、実は寝てる！ これどう？ ほら、瞼の上マジックで目を描いてるとか、よくあるじゃん」

才人は首を横に振る。

「もう駄目。ギブアップ。誰にも言わないからさ、早く答え教えてよ」

「気付かない？」

才人は画面を指差した。「今、寝てるんだよ」

「動いてるじゃない」ユリは画面を凝視しながら言う。

「寝てるよ」

才人は画面端に居る、作りかけの藁の家の中で休憩中の子豚を指差す。

「何言ってるの？ これは怠け豚でしょ？」

「よく見てごらん」

ユリは意味が解らないという感じで、画面に目を近づける。そこで「あっ……」と声を上げる。気付いた様だ。

「楕円形の鼻……この寝てる奴さ、もしかして働き者の子豚じゃない？」

「そういう事」

才人は微笑んだ。「午後三時になった時、三匹でおやつを奪い合うシーンがあったらどう？ あの太乱闘の時に、藁の家を造っている怠け豚と、レンガを積んでいる働き豚が入れ替わったというわけ」

「何で怠け豚が、働き豚の家のレンガを積んでるのよ」

「実を言うとそこまでは考えてない。罰ゲームか何かかな……」

「殺すわよ」

「ああ、ほら、二元に戻るよ」

藁の家で寝ていた働き豚が、レンガの家の方に歩いて行く。レンガを積んでいた怠け豚は藁の家の方に歩いて行く。二匹の豚はこっそりバトンタッチした。ジャスト三時半。働き豚はレンガ積みを始め、怠け豚は藁の家を造る作業を始めた。

「こんなのさ、分かる人居るの？」

「三時半になった瞬間のアニメーションを見ていれば、からくりが分かるだろうね。見なければ、単に藁の家で寝ていた子豚が、起きて作業を始めた様に見えるだけ」

「これ作った人は、相当な捻くれ者ね」ユリは才人を睨みながら言う。

「あ、そのセリフ……以前同じ事を言われたよ」

「誰に？」

ユリが訊いた時、インターホンの音が鳴った。才人はリビングのモニタから外の様子をチェックしてから玄関のドアを開いた。「よう」と明るい顔で現れたのは、関丈史だ。

「今から来るなら電話ぐらい掛けて欲しいなあ」才人が渋い顔で言う。

「電話はしてないが、メールはしただろ。『近い内に行く』ってさ」

「漠然過ぎる」

「これ、奥さんの見舞いのフルーツな。果物の旨い季節が終わっちゃったから、今が旬のミカンしか無いけど」

「わざわざ悪いな。暁子は今リビングに居るから……」

とは言ったものの、大丈夫だろうか。関は、人一倍女性の心情を読み取る事の出来る男だ。何かおかしいと感じる恐れがある。

「やあ奥さん、こんにちは。刺されたって聞いたけど、大丈夫？」

関はリビングに入るなり、パソコンの前に座っているユリに声を掛けた。彼女は誰よこの人という表情で、才人の方を見る。

「暁子、このミカン、関からお見舞いだって。……関、立ち話も何だから、座れよ」

才人は『関』の部分を強めに言う。

「ああ」

「セキ……さん」ユリが弱々しげに言った。

「はい？」

「ああ、いえ、どうもありがとう。ミカン、大好物なの」

ユリがホッとした様に言う。

「そりゃあ良かった。うちの実家が和歌山だから、よく冬に送ってくるんだ。有田ミカンってやつ。めっちゃくちや甘いから。ウチの段ボールの中にあと五百個ほどあるんで、また欲しかったら遠慮なく」

「うん、じゃあ無くなったら、また貰おうかしら……」

貰おうじゃ無くて頂こうだ、と才人は誰にも聞こえない声で指摘する。

「犯人はまだ捕まってないらしいな」

関は才人に向かって言った。「また奥さんを狙ってくるかも知れねえ。お前がしっかりガードしてやらないと駄目だぞ」

「分かってるよ。夜寝る時以外は離れてない」

「馬鹿。夜も一緒に居てやれよ」関は才人を睨む。

「それはちよつと……」

「はあ？」

「いや、何でも無いよ。暁子、関にコーヒー淹れてやって」

才人はユリに言った。「OK」と言い、彼女はキッチンの方へ駆けて行く。

「奥さん、何か変わったな」関がその様子を見て言った。

「そんな事は無いよ。いつもの暁子だ」才人が強い口調で言う。
「何むきになってんだよ。褒めてんだぜ。凄い前向きになったって言うか……気付かないか？ 彼女、今すんげえ生き生きしてる。この間鍋パーティーの時に逢った時とは別人みたいだ。あの時は何となく才人の事を避けてた様に見えたからな。会社の事、心から認めてくれたのかも知れねえぞ」

「その話は止めにしよう……。それより、来年一月四日だけど」

才人は話題を変える。「青山のサクラドルっていう店、知ってるか？」

「おう、当たり前だろ。すんげえ旨いって評判のチョコレート屋だろ。クリスマススイブの日に復活したんだ」

「さすが、詳しいな」

「常に流行の最先端に行くのは、女性に対する礼儀ってもんだよ、君」関は胸を張ってみせる。

「四日に、その店のホームページ制作の打ち合わせをする事になった。ネットでチョコレートを注文出来る様にもしたいらしい。見積もりはまだだけど、青山で一番人気の有名菓子店だから、結構な費用が動くと思う」

「いいねいいね。初仕事ってやつだな」

「あと、店のパソコンがネットに繋がって無いらしいんだ。ウチの会社の本業では無いけど、この作業もついでにやるから」

「了解」

関が親指を立てる。その時、ユリがコーヒーを運んで来た。慣れていないのか、カップを載せた盆を持つ両手が震えている。

「あー、おーととと、無理しない無理しない！ 俺がやるからさー！」

慌てて関は彼女から盆を受け取った。「才人、お前なあ、病み上がりの暁子さんにこんな事させんなよ。まあ気付かなかった俺も悪いけど」

「ああ……そうだね。ごめん、暁子」才人が謝る。

関はテーブルにコーヒーカップを並べ始める。

「かっこいい……」

ユリが呟いた。「最近ろくな男に会わなかったから、関さんみたいによく気の利いてかっこいい人、すっこい新鮮」

「いやいや、これぐらい、男として当たり前の事だから」

関は明らかに鼻の下を伸ばしている。才人は面白く無かったが、彼が鼻を伸ばしている間は無防備になるので、おそろく彼女の違和感には全然気付いていないだろう。

「つていうか、俺をあんまり褒めると才人が嫉妬するよ」関はユリに囁く様に言う。

「私、関さんの奥さんの方が良かったなあ」ユリは甘えた様な声で言う。

全くもって面白く無い。暁子がそう言っているわけでは無いのは分かっているが、彼女の声でこんな下品な態度を取られると腹が立つ。才人は何とか余裕を持って、苦笑いを浮かべるだけに留めるが、コーヒーカップを握る手にどうしても力が入ってしまう。

「……お前さ、やっぱり嫌われてんじゃねえの？」関が才人に耳打ちする。

「お茶菓子か何か、無かったかな。取って来よう」

才人は関を無視して立ち上がると、キッチンに向かった。戸棚を開き、スナック菓子を取り出す。袋の口は引っ張つてもなかなか開かない。

「怒ってる？」

ユリがキッチンにやって来て、小声で囁いた。

「別に怒ってない」才人は小声で答え、力を込めて袋を引っ張る。

「怒ってるじゃん」

「怒ってないよ。どうしてそう思うっ？」

「貸して」

ユリは手を差し出す。才人は半ば乱暴気味に袋を渡した。

彼女は袋の口を持って斜め前後にずらす様に引くと、簡単に封は開いた。

「……怒ってるよ、少しだけ」才人は素直に認めた。

「私、本音であんな事を言ったわけじゃ無いよ」

ユリは陶器の皿にスナック菓子を移す。「確かにいい人だと思うし、優しそうだけど、女のシンパシーを得る事に喜びを感じてそうな所がちよつとね……。俺つて女の気持ちなら何でも分かっちゃうんだぜえーみたいなオーラが滲み出てるって言うか。女の喜びそんな事を先読みして行動する男って感じ？でも最初はいいけど、だんだん自分の行動を逐一監視されてる様で鬱陶しくなってる来るのよね。だから、ああいう男は絶対長く恋愛が続きかないタイプ。少なくとも私の好みじゃ無いわよ。さっき私が彼に甘えたのは、ああして油断させて、私の変わり様を探られにくくしただけ」

「何だ、そうなのか」才人は肩の力が緩んだ気がした。

「ホッとしたり？」

「まあね。……君つて、時々恐ろしいな」

「昔付き合ってた彼氏が全く同じタイプだったから、何となく分かるのよ」

ユリはスナック菓子を盛った皿を、才人に渡した。

「ねえ、一つ訊いていい？」

ユリは才人の顔を見る。「さっきの才人の嫉妬ってさ、私が暁子さんの声であんな事を言ったから？ それとも……」

「その通りだ。君が暁子の声で、いや姿で、関に甘えたりしたからだ」

「本当にそう？」

「それ以外に無い」

才人は皿を持ち、リビングに戻る。スナック菓子をつまみながら、自分自身が本音を言っていない事に、本当は気がついていていた。

24

関は今夜初詣デートがあると言うので、それから三十分ほどして帰って行った。彼は特にユリに対して違和感を抱く事も無く、終始幸せそうな顔だった。女性の心理を読み取っている様で読み取られている事に全く気付いていない。彼が少し不憫に思えて来た。「ねえ、何か、郵便受けに入ってたんだけど」

関を見送りリビングに戻って来たユリは、小さな封筒を才人に見せる。

「宛名が三嶋暁子様になってるから、私読んじゃ駄目だよね」

「何だろうな。差出人名が書いてないね」

才人は封筒を受け取る。「切手も貼ってない。直接郵便受けに入れられた物だ」

「クリスマスカードだったら、びっくりだよね」ユリが笑う。

「開けてみよう」

封筒の中にはカードが一枚入っていた。勿論クリスマスカードでは無かった。黒マジックで走り書きした様な字で書かれている。

あきこへ

会いたい。

年が明けるまでに、

あの場所に、一人で来て。

AIより

「何、これ？」ユリは首を傾げる。

「ラブレターかな……」

才人はカードを裏返してみる。何も書かれていない。メッセージはたったそれだけだった。

「もしかしてさ、これ書いたのって、あのストーカー男じゃないの？」

「ストーカー男？」

「ほら、隣の……芳賀って人」

ユリはぶるつと震える。「あー、駄目だ。想像するだけでキモイ。絶対あいつだよ」

「芳賀君はそんな事しないよ。大体、二年もウチの隣に居るのに、今さらこんな事してど

うするんだ」

「AIって言うのは名前かしら。ね、あの芳賀って奴のさ、下の名前は何て言うの？」

「確か明彦だったかな……」

「ほら！ アキヒコのA！」

「Iは何？」

「Iは……」

ユリは言葉に詰まる。何も思いつかなかった様だ。

「あのさ……もう一度言うけど、芳賀君は絶対にこんな事はしない。彼の興味の対象はアニメのヒロインぐらいだから、暁子にこんなラブレターを書く様な趣味は無い」

「ますますキモイ」

「AIって言うのは、アイと読むのかな……」

「知能指数の事じゃないの？」

「知能指数はIQだ。それを言うなら人工知能」

才人はテーブルにカードを置いて、腕を組む。「アイって言うのは、普通は女性の名前だよ」

「じゃあこれって、女の人からのラブレター？」

「いや、ラブレターかどうかを判断するには早すぎるよ」

「才人が自分で言ったんじゃない」

「『あの場所』って、どこの事だろう……」

才人は考え込んだ。「暁子は、この手紙の差出人と知り合いなのかも知れない。おそらくこの二人だけが知っている場所なんだ」

「何か密会みたいよね。一人で来てって書いてあるし」

「女性同士が密会……」

才人は首を捻る。暁子にその手の趣味は無いので、無理がある。

「ねえ、私、どうすればいい？」

ユリが困惑した表情になる。「どの場所か分からない限り、このAIって人に会えないよね。第一、年が明けるまでに場所を突き止めるなんて不可能だし……。無視しちゃっていいのかな」

「もしかしたら」

「何？」

「このカード、暁子を刺した犯人からのメッセージなのかも知れない。暁子は犯人の顔を見ている可能性がある。だから犯人としては、口封じのために暁子を生かしておくべきでは無いと判断した。……多分犯人は、自分の事が何一つ報じられていないのを見て、暁子が事件のショックのせいか口を利けない状況にあると思ってるんだらうね。ショックから立ち直って犯人の事を喋られる前に、消してしまおう……と考えた」

「でもさ、それなら何で直接ウチに襲って来ないわけ？ 郵便受けにこんなカード投げ込む暇があったら、ナイフでも持って襲いかかって来ればいいじゃん。忍び込んで待ち伏せするとかさ」

「いや、それは無理だ。この家は高レベルのセキュリティを掛けてある。窓を割ろうとしたり、ドアの鍵を無理にこじ開けようとすれば、すぐに非常ベルが鳴って警備会社の人

が駆けつける様になってるんだ。犯人はそれを避けるために、暁子一人を外に誘い出そうとしたんじゃないかな……。しかし分らないな。暁子がこんなメッセージにつられて、一人で殺人犯に会いに行くとは思えないけど……」

「だったらやっぱりこのカード、犯人とは関係無いんじゃないの？」

「一応、警察に報告しておこうか」

才人は電話を取ると、志村警察署の蛭川に電話を掛けた。郵便受けに入れられていたカードの件を話すと「すぐに警官を向かわせます。それまで家からは絶対に出ない様に」と彼は答えた。

「……ねえ」

電話を切ると、ユリが話しかけた。「こんな事言いたくなかったけど、私、やっぱりそれしか無いと思うんだよね。……暁子さんは浮気してた。その可能性大だよ。才人だって薄々そう思っていたんでしょ？」

「うん……」才人は頷く。

「もしそうだったら、暁子さんを許せる？」

「……仕方が無い。全ての原因は、僕にあるんだから」

才人は溜息をついた。「暁子の求めていた世界を、僕が踏みにじってしまったんだ。彼女に相談もせず勤めていた会社を辞め、独立する事を決めた。……些細な事だと思っただんだ。会社を成功させて暁子と二人で幸せになればいい。彼女はきつと僕の事を解ってくれると思っただ。……だけど僕が犯した過ちのせいで、二人の距離は遠くなるばかりだった。全部僕のせいだ。……だから、たとえ暁子が浮気をしようと、僕に彼女の過ちを責める権利なんかどこにも無い……」

「そんなの変よ。才人のやった事と暁子さんのやった事は、全然違うじゃない！」

ユリは声を荒げる。「だって才人は、二人で幸せになるためにやった事でしょ？ 暁子さんのやった事は、才人を信頼できないで自分の幸せだけを考えて行動した、ただのエゴじゃない！ 原因は才人にあっても、こんなのフェアじゃ無いわ。私だったら絶対に許せない。いいえ、こんな理不尽な行動を許せる人なんて誰一人居ないわ。才人も本当は……本当は心の底では、暁子さんを許せない気持ちでいっぱいのはずよ。素直に『許せない』って言えばいいじゃない。彼女が刺された事も、この身体の中に彼女が居ない事も、そんなの全然、同情する材料なんかにはならない。許さなくていい。許す必要なんか無い！」

「君は僕にどうしろと言うんだ？ 彼女を許そうが許すまいが僕の勝手だし、君には何の関係も無いじゃないか」

「私は……私はただ、暁子さんを許して欲しくないだけ……」

「赤の他人の君に、そんな事を言われたくない」

「この、大馬鹿野郎っ！」

ユリは突然そう喚いて、才人を思い切り突き飛ばしてリビングを出て行った。彼はしばらく呆然と立ち尽くしていたが、五秒後には我に返って彼女を追いかける。ユリは階段を駆け上がり、寝室に閉じこもった。何度かノックをしたが、返事は無かった。

(暁子を許せない気持ち……か)

才人は諦めた様に俯く。暁子が浮気した可能性が浮上した時、彼の心中は複雑だった。ユリの言う通り、暁子との幸せを信じて才人は会社を作った。しかし彼女はそれを蔑ろに

して浮気に走った。許せないという気持ちと、そうなる原因を作ったのは自分だから許すしか無いのだという気持ちが、対立していた。

可能性が濃くなるにつれ、前者の気持ちが次第に強まり始めた。暁子に生きていて欲しい気持ちや、犯人に対しての憤りは最初と変わらないが、彼女に対する愛情だけは確実に衰えていく。暁子の話が出ると自然と過去形を使ってしまったり、彼女がもう死んだものだ意識し始めたり、頭では分かっているけどコントロールが出来なくなり始めているのだ。それでも才人自身は何とか暁子への愛情を深めようと、必死に彼女への不信感を潰し始めた。それが夫として当然の義務であり、ルールだからだ。だが――。

――さっきの才人の嫉妬ってさ、私が暁子さんの声であんな事を言ったから？

――それとも……

キッチンでのユリの言葉が心に蘇る。

暁子への愛情と、

彼女を許せない気持ちの間に侵入する、

もう一つの感情。

才人の一部はそれが罪だと信じている。

才人の一部はそれが暁子に対する回答だと信じている。

対立する。

交錯する。

「……ユリ」

才人は寢室のドアを軽く叩きながら、呼びかける。

返事は無い。

「赤の他人なんて言い方をして悪かった。僕が無理に頼んで、暁子を演じてもらっているユリに対して、掛ける言葉じゃ無かった。……さっきの事も、君の言う通りだ。認める。確かに僕の中には、暁子を許せない気持ちを持っている。だけど、全部が全部そうじゃ無い。……まだ一週間だし、自分の感情をそんなに早くコントロール出来ない。どうする事が正しい事なのか、判断する段階では無い。基本的に心の制御が不器用な人間なんだよ、僕は。……君と違ってね」

自分でも何を言っているのか分からなくなって来た。

「だから……つまり、そういう事だ。これじゃ駄目かい？」

返事は無い。

「君はどうして、僕に……暁子を許して欲しく無いんだ？」

部屋の中からは物音一つしない。

「……分かった。この話はもうやめにしよう」

才人は一呼吸おいた。「晩ご飯、何が食べたい？」

年越しそば、という声が小さく聞こえて来る。

才人はホッと胸を撫で下ろすと、彼女をそのままにし、リビングへと戻った。

三十分後、三嶋家にやって来たのは後藤刑事と本条刑事だった。後藤の方は結構薄着で、一方の本条は真っ白なコートを着込んでいる。雪は降ってはいないが、降ってもおかしくないほどの冷え込み様である。

才人は「暁子は身体の具合が良くないので二階で寝ています」と言い、彼らをリビング

に通す。暁子宛に届いたメッセージカードを封筒ごと渡し、彼らの反応を窺った。

「ふうむ、これだけでは何とも言えませんなあ」

後藤がカードを見ながら頭を掻く。「犯人が暁子さんを呼び出すために書いたと考えるのが自然でしょうけど、便乗犯の可能性もありますし、悪戯という事も考えられます。こんな走り書きした様な字では、筆跡鑑定も無理でしょうな。奥さんの方には心当たりは無いんですかな？」

「それが、全く……」才人は首を振る。

「せめて『あの場所』と言うのがどこなのか分ければ、犯人を捕まえる事が出来るんじゃないけど。……本条君、どう思うかね」

「分かりません」

本条はあつさりと答える。「もし今夜奥さんがこの場所に現れなかったら、犯人はまた郵便受けにカードを入れてくるかも知れません。次は場所も書いてくるかも知れない。それを期待しましょう。……また、奥さんが来ない事で犯人がしびれを切らして強硬手段に出る恐れもあります。この付近のパトロールを厳重にする様、呼びかけておきます」

「お願いします」

「一応このカードは鑑識に回します。また何かありましたらご連絡を」

「どうもありがとうございます」

二人の刑事は去って行った。

25

年が明けて、何事も無く三か日が終わろうとしていた。

正月が楽しいのは子供の頃だけだ、と才人は思う。年を取るにつれ、単なる連休だという意識しか持てなくなってくる。皆が集まってゲームをやるという親戚も子供も才人の周りには存在しない。お酒も飲まないし、テレビもニュースとスポーツぐらいしか見ないので、基本的にゴールデンウィークと同じなのである。

唯一の楽しみと言えば、おせち料理ぐらいだろうか。毎年暁子を作っていた黒豆は絶品だった。隣に住む五十嵐早月からも好評だったのだが、今年は暁子が居ないので作る事が出来ない。黒豆を頂きに来ましたとこにこ顔の早月には「今年はいい豆が入らなかった」と嘘をつくしか無かった。

定期的に暁子のパソコンのメールをチェックしているが、届くのは料理教室関係のメールばかりだ。困った事に、明日一月四日の料理教室新年会には絶対参加と書かれている。こうなったら教室を退会した方がいいかも知れないな、と風呂から出て来たユリに言う。「……うーん、でもこういうのってさあ、辞める時には何か正当な理由が無いと、近所の奥さんから村八分にされたりしない？」

彼女は腕組みを言う。「お隣の五十嵐って奥さんもメンバーなんでしょ？ 近所づきあいが悪くなったりしないかなあ。……まあ、私は全然それでも構わないんだけどさ。才人は生活しづらいだらうし、暁子さんが戻って来た時の事とか考えると、後々大変だよな」

「事件のショックで、っていう理由が、いつまでも通用するとも思えないしね」

「つていうか、ショックを受けてる女には全然見えないし」ユリは笑った。

「新年会は、何時から？」才人が訊く。

「えーとね、午後六時……」

ユリはメールを見ながら言う。「よしっ。私、参加してやるか。どうせご飯食べて、お酒飲むだけの会でしょ？」

「お酒は絶対に駄目だ」才人が注意する。

「分かってるよ。子供じゃ無いんだから」

「子供だ。……明日は僕も六時頃から青山で打ち合わせだから、ユリはその奥さん連中と一緒に居れば、まあ安全かな」

「そう言えばあれ以来、変な手紙が来ないよね。諦めたのか、単なる悪戯か、犯人も正月休みだったのかな」

「この付近の警備が嚴重になったからか……それとも……」

犯人からのメッセージが何も無いに越した事は無いが、かえって恐怖心は募るばかりだ。犯人は依然として捕まっていない。警察からも何の連絡も無い。捜査は着々と進んでいるのか気になって、正月の夜、才人は殆ど眠れなかった。

一月四日、午後五時半。

ユリは五十嵐早月と共にタクシーで居酒屋へ向かうと言うので、自宅前で別れた。才人と関はそれを見届けてから、車で青山へと向かう。

才人はこれから訪れるチョコレート店について知識を持ち合わせていなかったが、関が予習しておいたらしく、車中で細かに解説してくれる。

サクラドールの前の経営者である滝川誠太郎は、三十歳でこの世を去ったらしい。才人と同じくインパクトを大切にしているチョコレート職人で、「この店にしか出せない味を作ってる！」と豪語し、五年間海外でパティシエの修行をした後、二〇〇三年春、青山に店をオープンした。

店を建設中、この店は「ドール」という名前の店にしようと滝川氏は考えていたのだが、すぐ近くに「トール」というよく似た名前のパチンコ店があったため、店名の変更を余儀なくされた。

滝川氏の趣味は、パソコンだった。彼は「パソコンを適当にいじっていたら、このマークが偶然出来たんだ！」と、桜草を象ったロゴマークを従業員に見せた。それを見た従業員の一人が「それなら頭に桜をつけて、サクラドールとしましょう」と言い、めでたく店名が決定したという。味の素晴らしさもさることながら、桜の花びら型のチョコレートは、受験生や結婚予定のカップルらに愛され、一大センセーションを巻き起こす巨大ブームとなった。

二〇〇四年十二月に滝川氏が亡くなってから、サクラドールは閉業してしまった。この店のチョコレートのレシピは、彼の心の中にしか存在しなかったからだ。あの最高の舌触りと喉の奥がとろける様な快感を二度と味わえないのだと、ファンは嘆き悲しんだ。

そこで現在の店長、和久田翔平という謎の男の登場である。彼は自称菓子博士。ジャンルは菓子に限定されるが、口にしたチョコレートやクッキーなどを、何の材料をどれだけ使ったかを瞬時に判断する事が出来るという特技の持ち主である。

彼は滝川氏が亡くなって半年後に、サクラドールと完全に同じ味のチョコレートを開発

する事に成功した。その当時は製菓工場で働いていたが、周りの社員に「二代目サクラドルを作るのはお前しか居ない」と後押しされ、滝川氏の弟の支援もあって、昨年十二月二十四日、青山の一角にリニョールオープンした。

和久田翔平はマスコミ嫌いのため、テレビや雑誌には今まで顔を出した事が無いが、店に行けば必ず彼のふっくらとしたえびす顔が拝めるといふ。厳格な性格では無く、人のいいおじさんといった風貌で、子供達にはとても人気があるらしい。関は「おじさん」と呼んでいるが年齢は二十七歳で、才人や関よりも年下らしい。

セルシオを百円パーキングに停め、地図を見ながら二人は表参道を歩き始める。この辺りかな、と再び才人が地図に目を向けた時、

「才人ー！ あけおめー！」

藤原千鶴が大声を上げながら、才人に抱きついてきた。関はぎょつとした表情になる。道行く人も何事かと彼らの方に目を向ける。

「いい加減、そういう挨拶はやめて貰えないかな……」

才人は溜息混じりに彼女を引き離す。「心臓が悪いから」

「だって才人ったら、会社辞めちゃったら全然相手してくれないんだもの。ぶーぶー。たまにデートしてくれたっていいのにさ」

千鶴は頬を膨らませる。虹の七色をあしらったカラフルなセーターに、ボトムスはいつもの様に赤。相変わらずどこに売っているのかと思うぐらい、目に痛い配色である。才人は彼女のこのボトムスの色を「紅生姜色」と呼ぶ事になっている。他の赤色よりもそっくりだからだ。紅生姜と重ねてみれば、必ず一致する。

「もしかしてさ、この子が例のイラストレーターの藤原千鶴ちゃん？」

関は千鶴の顔をじろじろ眺め回す。「へえー、結構可愛いじゃん」

「えっ、本当に？ 見る目あるうー！」千鶴は飛び上がって喜ぶ。

「あ、俺、関丈史。一応こいつの作った会社の専務兼営業担当だから。よろしくな」

関は名刺を渡す。千鶴は「じゃ、あたしも」と彼に名刺を渡す。

「株式会社サイダーハウス・イラストレーター……。あれ、確かサイダーハウスって、才人の元勤めていた会社だよな？ へえ、そこでイラストレーターやってるんだな。あつ、だから才人は企業秘密って言ったたのか。よその会社の仕事をやるのはまずいもんな」

「三匹の子豚ちゃん。見てくれた？」千鶴が関に訊く。

「見た見た！ あれ、すんげえ可愛いぜ。反響が凄くて毎日子豚ファンからのメールが何百通って届くんだよ」

何百通は大袈裟だ、と才人は心の中で指摘する。

「ああそうだ、子豚で思い出したんだけどよお、才人。働き者の子豚ちゃんは一休いつになったら寝るんだ？ 俺、深夜に八時間ぶっ続けで画面見てたけど、いつまで経っても寝ないぞー！ どうなってんだ？」

「多分、君には一生掛かっても無理だと思う」才人が言った。

「ああ？ 何だそりゃ。ははあ分かったぞ。実は寝てないとか？ あつ、まさか暇にマジックで……」

「行こうか」才人は歩き始める。

「あつ、おい、待て！ 俺の推理では、マジックで暇に目を描いてだな……」

関の言葉を無視し、サクラドールへと向かう。ちょうど大柄な男が、店のシャッターを閉めようとしていた所だった。

「店長さーん！ あけおめー！」千鶴が笑顔で声を掛ける。

「おお、千鶴ちゃん。あけましておめでとう」

これが店長の和久田翔平か。坊主頭に、インパクトのあるえびす顔。ごつごつとした腕は、もしかしたら才人の太ももよりも太いかも知れない。

「はじめまして、印白塔の三嶋です」

「専務の関丈史です」

「はじめまして、サクラドール店長の和久田と言います。ささ、どうぞお入り下さい。ちょうど営業時間終わった所ですから、ゆつくりしてって下さいよ」

和久田は嬉しそうな顔で、三人を店内に案内する。チョコレートの甘い香りが鼻をくすぐった。熱気の籠もった厨房を通り抜け、その奥にある事務室の様な部屋に通される。四角いデスクの上にパソコンが一台と、丸いガラスのテーブル、そして丸椅子が四脚ある。六畳ほどの部屋だった。

「すみませんね、この部屋滅多に使わないもんで。ちょっと小汚くて寒いですが」

和久田は苦笑いを浮かべる。「ま、適当に座って下さいよ」

「インターネットに接続したいパソコンと言うのは、これですか？」

才人がパソコンを見ながら言う。薄汚れてはいるが、思ったよりも新しい。OSはウィンドウズの様だ。

「はい、秋葉原で、五万円で購入した中古ですが、使えそうですか」

「ちょっと調べてみます」

パソコンの電源を入れ、メモリテストを行う。

「容量は十分あるみたいなので、特に問題は無いと思います」

「そう、それは良かった。それで、インターネットと言うのは、どこに行けば買えるものなんですか？」

「いえ、あの……」

才人が一瞬言葉に詰まる。「インターネットと言うのは売り物では無くて、モデムを電話回線に繋いで、プロバイダと契約すると、IDが送られてきますから、それを設定すると見られる様になるんです」

「ふうん、じゃあ無料なんですか」

「そういうわけでも無いんですが……」

「うん？ 全然分かりませんよ。こっちは初心者なんだから、もう少し懇切丁寧に説明して欲しいなあ……」

「えーっと、要はですね、店長！」

関が勢い良く助け船を出した。「毎月決まったお金を払うだけで、インターネットが出る様になる、ってだけの話ですよ」

「おっ、分かりやすい！」和久田は両手を打つ。

「払うお金は業者によって違います。ご予算さえ教えて頂ければ、こちらでぴったりの業者を探しておきますので」

「うん、うん。分かりやすい。宜しく頼みますよ」

「初心者に横文字は禁句だ。俺に任せとけよ」

関が才人にこっそり耳打ちする。才人は出る幕が無いので、大人しく引き下がる。

「ネットが出来る様になるまで、大体どれぐらい時間が掛かるもんなんですか？ 出来れば明日から使いたいんですけど」

「即日に通する業者もあります。お勧めの物をいくつかピックアップして、明日朝ファックスしましょう」

「親切な会社だなあ。合資会社印白塔。うん、知り合いに宣伝しときましょう」

「ありがとうございます！」

関が頭を下げる。才人もつられて頭を下げる。

「じゃ、本題のホームページの話なんですけど……」

和久田は一枚の紙切れを懐から取り出した。「こんな感じで作ってもらえますか」

「えっ……」

才人は彼の差し出した紙を覗き込む。中央には丸い物体と、その周りに黒く塗りつぶされた正方形が点々と並んでいる。かろうじて中央に描かれている丸い物が人の顔と言うのは分かるのだが、見方によってはジャガイモにも見える。恐ろしく下手な絵だ。幼稚園児よりも下手かも知れない。

「あの……これは、何ですか？」関が恐る恐る訊いた。

「決まってるじゃないですか。ウチのホームページのデザイン案ですよ」

和久田は鼻を鳴らす。「このど真ん中に、俺の写真を大きく入れて下さい。俳優みたいにして、こう斜め上からのポートレートがいいですね。そしてこの周りには、色とりどりのチョコレートが散らばっているイメージで頼みます。キャッチコピーは、『チョコレート博士・和久田翔平の世界によろこそ！』で、『世界』って漢字の上に、サクラドルってルビを入れてもらえますかね？」

この四角いのはチョコレートなのか。才人は思わず目を丸くする。豆腐でも並んでいるのかと思った。

「あの……店長」関が上目遣いで言う。

「はい？」

「デザイン案と言うのはですね、本来はウェブデザイナーが作るもので……」

「えっ、そうなんですか」

和久田は瞬きを繰り返す。「でも、もう案が出来ちゃってますから」

「いやいや、店長……もう、嫌だなあ」

関が引きつった笑顔を浮かべる。「第一、お店のサイトですよ。店長の名前の方がデカデカとしちゃまずいですよ。ああそうか、これってジョークなんですかね？」

「至って大真面目ですが」和久田の顔が曇る。

「しかし……」関が困惑した顔になる。

「店長の写真は」

才人はその紙に、両手を広げたハンサムな青年のイラストを描いた。「斜め上からのアングルの写真より、こんな風に両手を広げた正面の写真と言うのはどうでしょうか？」

「おおっ……！」和久田は目を大きくする。

「この方が店長の世界というイメージが強くなります。そして周りには店長の言う様にチョコ

コレートを散らばらせませんが、単純に色の違うチョココレートを配置してしまうのは、何か野暮ったい感じがしませんか？ ほら、こういう風に……」

才人はハンサムな青年の周囲に、わざと野暮ったく四角形を描き入れる。

「うーん……言われてみれば」

「ですから、折角なので形も変えてしましましょう。例えば星型、UFO型」

「おおおっ……！」

「ちなみに、そんな形のチョココレートは実際に作れますか？」

「勿論、作れますよ。色んな型を自作するのが好きなんですよ」

「それは面白い。こうすれば、お客さんがトップページを一目見るだけで、サクラドールの店長さんはこんなに沢山の楽しいチョココレートを作れるんだ、と感激するに違いありません。人気倍増です」

「いや素晴らしい。おみそれしました。さすが本職さんは違いますね。それで宜しくお願ひしますよ」

「分かりました」

才人は関を見て微笑んだ。彼は、やるじゃねえか、という感じで目を細める。

「それで、制作費用のお見積もりに関してですが……」

才人は言いながら考える。企画構成費、コーディング、簡単なショッピングシステム……合計百六十万円ぐらいだろうか。

「ああ、予算は……」

合計額を言う前に、和久田が口を挟む。「これぐらいで、やってもらえますか？」

彼は指を二本立てた。

「三十万円……ですか。いや、それはちよつと」

「何を言ってるんですか、全然違いますよ」

和久田は首を横に振る。「三万円です」

「ぎ……三万？」

才人と関は驚いて同時に立ち上がった。

「それでお願ひします」

「なっ……」

なめてんじゃねえよ、とでも言おうとしたのか、関は拳を握り締めていた。才人が止めるより早く彼の手を抑え、間に割り込んだのは、藤原千鶴だった。

「ねえ店長さあん」

千鶴が甘えた事を出す。「もう一声、お願ひしますよおー。才人がホームページ作れば、きつと一年に何百万何千万つて儲かると思っていますからっ！」

「うーん」和久田は顔を綻ばせる。

「かっこいい店長さん！ 優しい店長さん！」

「じゃあ、十万……」

「いいんですかぁ？ 世界一の天才お菓子職人さんが、そんなケチンボで」

「ええい、百万だっ！」和久田はガッツポーズをして立ち上がる。

「きゃー、最高！ 才人、それでいい？」

それで手を打つか……。才人は諦めた様に頷くが、関の方は大満足の様子だった。

「それでは正式な概算については、明日ネット接続の件と一緒にファックス致します」
「はい、宜しく頼みます」

和久田は右手を差し出す。才人は握手を交わした。

サクラドールを出ると、三人は壁に凭れ掛かって一息ついた。

「はあー、一時はどうなる事かと思っただなあ。さっきはマジで切れる所だったよ、千鶴ちゃん、サンキューな」

「いえ。その代わり、あたしのイラストもどこかに参加させてね？」

「ああ……うん」才人は小さく頷く。

「……俺達って、最強のトリオかもな」

関は空を見上げながら言った。

才人も空を見る。

いつもと変わらぬ、淡い東京の星空。

ユリは今頃どうしているだろう――。

26

ユリは焼酎を注文したかったが、暁子が酒を全く飲めない人間である事は料理教室の全員が承知しているらしく、居酒屋の席に着いた時、有無を言わずソフトドリンクのメニューを手渡された。

暁子はこのいう居酒屋に来た時、いつも何を注文しているのだろうか。一度でも会っていれば雰囲気でどんなドリンクを注文しそうな人間か分かるのだが、会った事も無い人間の好きなドリンクなど、超能力者でも無い限り言い当てられるわけが無い。

(オレンジジュース？ ウーロン茶？ それとも、ジンジャーエール？)

ユリの視線がメニューの中を泳ぐ。暁子がもし甘い物が苦手だったら迷わずウーロン茶だろう。少なくともユリの周りではお茶が嫌いな人間など聞いた事が無いので、これが無難な選択だろうか。周りの奥様連中が次から次へと「私は生ビール大ジョッキ」「あたしはジントニック」などと頼んでいくので、ユリは運を天に任せてウーロン茶を注文した。

「暁子さんって、いつもウーロン茶よね」狐の様な目をした婦人が言う。

「仕方無いわよねえ。お酒も甘い物も苦手だと、こういうお店のドリンクって他に選択肢が無いんだから」

隣の五十嵐早月がユリを見て微笑んだ。

「う、うん。そうなのよねー」

ユリは笑顔を作って返す。とりあえず第一段階は無事通過した様だ。甘い物が苦手ならファミレスでチョコレートパフェを食べた時にでも指摘してくれればいいのに、と才人を心の中で責める。

「それじゃ皆さん、お料理を注文しましょうか」

料理教室の先生が言った。他の奥様連中が「先生」「先生」と呼んでいるので、名前は全く分からない。歳は五十代半ば、白髪交じりの優しそうな婦人だった。

甘い物が苦手なのは分かったが、辛い物はどうかだろう？ 才人がファミレスで辛い辛いとヒイヒイ言っていたカレーを食べてみた所、それほど辛い様には感じなかった。舌が辛

味を受け付けている証拠だ。しかしユリ自身が辛い物が大好きなため、舌では無く脳の方で判断している可能性もある。そう考えると、サラダや煮物などの無難な注文しか出来なくなってしまう。

適当に無難な料理を注文した所、誰一人違和感を抱いている者は無さそうだったのでホッとすする。既に喉の奥がカラカラだった。

そこに、抜群のタイミングでドリンクが運ばれて来た。ユリはウーロン茶を受け取ると、渴いた喉を潤すべく、すぐにゴクゴク飲み始めた。

「それじゃ皆さん、乾杯しましょう」

先生がそう言ったので、ユリは思わずウーロン茶を吹き出しそうになる。周囲を見回した所、まだ誰一人飲み始めていない。

全員の視線が先生の方に集中した事が幸いして、ユリがフライングした事に誰も気付かなかった。彼女は飲むのを中断し、乾杯の儀に加わる。

「あけぼの料理教室のますますの発展と皆さんのご健康を祈念して、乾杯！」

「かんぱーい！」全員が声を揃える。

どんどん料理が届き始め、ユリの緊張が高まる。しかし全員おしゃべりに夢中になっていて、誰がどの料理に手をつけるなんかは全く見ていない様子だ。これならそれほど気に病む事も無いかも知れない。

「そうそう、暁子さんのご主人、なんと去年の暮れ、会社を作られたんですって！」

早月が大声で言う。一斉に全員が暁子を見る。

(何でそんな余計な事を言うのよ……) ユリは苦い顔になる。

「へえ！ 凄いわねえ！」

「暁子さんの旦那さん、確かこの間テレビにも出てたわよね」

「あと、雑誌にも。輝ける未来のウェブデザイナーですってよ」

「えっ、そんなに凄い人なんだ？」

ユリはびつくりして聞き返す。「全然そんな感じしないのに……」

「またまた、とぼけちゃって！」太めの婦人が笑いながら言う。

「才さんの才能に惹かれたって、いつも言ってたじゃないですか」

「そ、そうだったっけ……」

ユリはまるで自分が言われた様な感じがして、頬を赤らめる。

「暁子さんのご主人が元々勤めていた会社の社長って、確か逮捕されたのよね」

「そうそう、満員電車で痴漢したんだって。しかも常習」

「最低よねえ。ご主人が怒って会社を辞めるのも無理無いわ」

早月がビールを飲みながら言う。「私だってそんなセクハラ社長の居る下で仕事なんかしたくないもの」

「会社、潰れちゃうんじゃない？」

「それがさ、暁子さんのご主人が辞めた後、新しいウェブデザイナーが入ったらしいのよ」顔の長い婦人が答えた。ここの料理教室のメンバーはやけに事情通だな、とユリは思った。彼女が知らない事を全員が知っているの、口を挟める余地が無い。

「えっ、どんな人？ かつこいいの？」太めの婦人が訊いた。

「バツ。似合わない髭を生やしちゃって、態度も偉そうで、評判悪いらしいわよ。私の旦那

那が銀河銀行に勤めてるんだけどね、ホームページ担当の村瀬って人……ああ、その髭の男の名前、村瀬って言うんだけど、デザイン力は確かに優れているけど、アイデアに乏しいって旦那が言ってたわ」

「あんたの旦那、何様よ？」パンチパーマの婦人が笑いながら言う。

「言わなかったつけ。表の顔はしががないサラリーマンだけど、裏の顔は某有名画家よ」

「えーっ！」数人の婦人が、派手にのけぞった。

「村瀬って男は、費用が安くて質が良くて目に優しいデザインさえ作れば、全ての客が満足するって勘違いしちゃってるのよねえ……」

某有名画家夫人は鼻を鳴らす。

「それって、勘違いなの？」

ユリが訊いた。「費用が安くて、質が良くて、見やすいつて結構いい事だと思うんだけどなあ……」

「あら、暁子さんがそんな事を言うなんて意外！」きつね目の婦人が驚く。

「あ……いや、客観的に見て、って話よ。私は才……主人の、インパクト重視のデザインの方が好みだけど……」

「暁子さんのご主人の作るホームページは読みにくいし、一見邪道に見えるけど……」

眼鏡の婦人が横から口を挟んだ。「ホームページにアクセスしたお客さんに刺激を与え、心の底から楽しませてくれる。インターネットと言うのはね、昔は単なる情報収集の手段の一つでしか無かった。でもネット人口が爆発的に増えて、多くの情報が氾濫するこの世の中、見やすい使いやすいといったサイトは至極ありふれていて、人々の心には殆ど残らないわけ。アイデアやインパクト重視のサイトを作る芸術家タイプのウェブデザイナーは沢山居るけど、ご主人の制作したデザインにはどれも沢山のファンがついている。私もその中の一人なんだけどね。人々の心を打つ物を作るなんて、素晴らしいじゃない」

「お料理の世界も、それと同じ事です」

先生が頷いた。「お馴染みのお料理を美味しく作る事だけが、必ずしも人の心を打つとは限りません。大切なのは、お料理を食べてくれる人の五感を、心の底から楽しませる事です。……今日は三嶋さん夫婦のおかげで、素晴らしい新年会になりそうですね。皆さん、拍手を送りましょう」

拍手喝采を浴びながら、ユリはお酒も飲んでいないのに身体がカッと熱くなっていくのを感じた。

新年会は一時間で切り上げる事となった。あまり遅くなると夫が心配する人が多いからという理由の様だ。ビールをグラスに二杯しか飲んでいないのに、すっかり泥酔した様子の早月に肩を貸しながら、ユリは店を出た。

「あっ、暁子さん」

某有名画家夫人が去り際に声を掛ける。「この前の件なんだけど……」

「この前？」

「うん、そう。例の出会い系の……」

「例の出会い系？」

「ほら、『出会いを求めチャオ』っていう私がお勧めしたサイトよ」

何の事だか分からなかったが、暁子が浮気をしていたとすれば、インターネットの出会い

い系を利用していった可能性が高いと思ひ当たる。

「ああ、あそこか。勿論覚えてるわよ」ユリが言った。

「本気じゃ無いわよね？」

画家夫人は心配顔で言う。「暁子さん、ご主人と仲良さそうなもの。だから冗談で出会い系の話なんかしちゃったけど……その、まさか浮気なんてしないわよね？」

「まさか」ユリは微笑んだ。

「そう。良かったわあ……。安心した。それじゃあおやすみなさい」

ホッとした様子で、画家夫人は手を振ってタクシーで去って行った。

(出会い系……)

ユリはタクシーを止め、運転手に自宅までの道を教える。泥酔した早月が邪魔だったが、隣の住人なので放置しておくわけにもいかない。東中野の五十嵐家前でタクシーを降りる。早月を彼女の自宅の和室に適当に寝かせると、大急ぎで三嶋家に駆け込んだ。

才人はまだ帰宅していない。

ユリはリビングにやってくると、暁子の使っていたパソコンの電源を入れる。インターネットに接続し、検索エンジンにアクセスする。入力欄に『であいをもとめちゃお』と打ち込み、彼女はエンターキーを叩いた。

続いて表示された画面に、検索結果がリストアップされる。『出会いを求めチャオ』というタイトルのページがあつたので、クリックする。

(これだわ)

薄いピンクを基調にしたホームページ。女の子の写真が何枚か表示されている。ページ上部に会員IDとパスワードの記入欄があるが、ID欄の方には前回ログインした時に使っていたIDが自動的に入力される仕組みになっている。「akiko」と。

27

芳賀明彦は暗い部屋の中で、頬杖をつきながらパソコン画面を見つめている。

ゲーム「恐怖の小学校」のプログラミングは、ほぼ終了した。後は桶谷四郎が明日持つて来るエンディングのグラフィックを当てはめるだけである。

(ああ……暁子さん)

芳賀はうつとりした表情でマウスをクリックし、画面を切り替える。いつか「ゲームの参考になりますから」と騙してデジカメで撮影した、暁子の唯一のスナップ写真が大写しになる。アニメやゲームの世界には絶対に存在しない彼女の美しい魅力ときたら――。芳賀の心臓は、皮膚を突き抜けて飛び出しそうなほど高まり始めていた。

刺されたと聞いた時にはショックだった。しかし彼女が息を吹き返し、全裸で河川敷に放置されていたという情報を入力した時には、性的興奮を覚えた。犯人との間に一体どんな事があったんだろう。自分だったらこうするのに……などと犯人の立場に立って、様々な想像を張り巡らす夜が続いた。

病院から帰って来た暁子は、より一層魅力的な女性になっていた。彼女の清楚な顔立ちとミスマッチした気の強い性格。どうしてそうなったのかは分からないが、芳賀の理想の女性像へと変身していた事で、もっと彼女に近づきたい、彼女と一緒にいたいと思う気

持ちは日に日に増してゆくばかりだ。

しかし彼女の傍にはいつも三嶋才人が居る。芳賀の中で暁子が自分の理想像と重なってからは、いつも一緒に居る。だが才人を憎む気持ちは全く無い。彼は自分の良き理解者だと今でも信じているし、彼から時々請け負うセキュリティの仕事の報酬も悪くないからだ。

そう、芳賀は決して彼が憎いわけでは無い——ただ、邪魔なのだ。

(暁子さんを幸せに出来るのは……僕だけだ)

芳賀は笑った。

(何故なら僕は……三嶋才人の知らない君を知っているから)

芳賀は声を押し殺して笑った。

マウスをクリックし、再び画面を切り替える。『出会いを求めチャオ』という名の出会い系サイトが姿を現す。暁子が「akiko」というIDでこのサイトを利用していた事は、芳賀だけが知っている。自分と暁子だけが共有する秘密。

(僕達だけが知っている。僕達だけ。この世にたった二人だけ……)

正確に言えば、暁子がメールのやり取りしていた相手の男性も知っているだろうが、その男はもう居ない。芳賀がサイトをハッキングして掴んだ「AI」という名のその男は、事件以来IDを抹消している。おそらくそいつが暁子を刺した犯人だ。警察がいずれ捕まえてくれるだろう。

暁子が出会い系を使って浮気をしていたという証拠は揃っている。それを使って何か出来ないだろうか？ 例えば脅迫。「浮気の事実を知っている」と彼女を脅し、才人にばらされたくなかったら自分の元へ来いと言うのだ。

三嶋才人はサイダーハウスを辞めたが、彼のデザインを望む者は非常に多い。サイダーハウスに居た頃以上に安定した生活が続く事は容易に予想される。そんな時、暁子が浮気していた事実を才人が知ってしまったら、彼女は身の破滅だ。それを避けるために暁子は芳賀の元へ来る。そして——。

芳賀の頭の中には既に「脅迫」の二文字が激しく飛び交っていた。よし、やろう。暁子が一人になるタイミングを見計らって、彼女に声を掛けるのだ。必ずうまく行く。

(ああ……もうすぐ暁子さんが僕のものに……)

また画面をスナップ写真に切り替え、芳賀は彼女の表情を楽しむ。

ふと、彼女の表情が歪んだ気がした。

「え……？」

気のせいでは無い。

どんどん歪んでゆく。

まるでドロドロに溶けてゆくみたいだ。

「なっ、何だっ、これは……」

芳賀はマウスのクリックを必死に繰り返す。彼の抵抗も空しく、写真は溶ける様にして画面から消え失せた。慌てて画像が保存されていたフォルダと「ゴミ箱」をチェックするが、跡形も無く消えている。

「あ……あああああっ！」

芳賀は気が狂った様に叫んだ。

ウイルスか？ トロイの木馬か？ それとも直接このマシンを制御しているのか？ い

ずれにせよ芳賀の作った高度のセキュリティがあっさり破られ、こんな事が出来る人間が世の中に存在するとは思えない。

芳賀はがむしやりに髪を掻き乱し、充血した目で画面を睨んだ。

(畜生……お返ししてやる)

芳賀はキーボードを素早く叩き、このコンピュータに接続して来た者のIPアドレスを調べる。それさえ分かれば、この爆撃を跳ね返す事も出来る。

約十秒間の沈黙が続き、接続元のアドレスは表示出来ない、というエラーが発生した。

(そんな馬鹿な……)

信じられない現象はそれだけでは無かった。芳賀が作成したファイルが、フォルダが、次から次へと画面上から消えてゆく。彼は叫びながら、ひたすらキーボードを叩いた。様々な方法で防御策を試す。しかしそのどれもがエラーで返されるばかりで、何の効果も持たなかった。

「あああ！ やめろお！ それは僕の大事な……！」

ついに先ほどまで作っていたゲーム「恐怖の小学校」が削除され、ハッキング用に使っていた自作のコマンドプロンプトも消され、「ゴミ箱」までもが消えてしまった。

ポツンと後に残されたのは、書類ファイルが一つ。

芳賀は放心した表情で、それをダブルクリックして開く。

そこにはただ一言だけ、メッセージが残されていた。

ザンネンでした。AIより

「あ……あああああっ！」

芳賀はキーボードを引きちぎり、床に投げつけた。

バックアップは無い。芳賀の作ったセキュリティは完璧で、絶対に破られるはずが無いと信じていたからだ。

芳賀は息を切らせ、アニメのフィギュアをひっ掴むと、その場に気を失った。

28

誰かの悲鳴が聞こえた様な気がした。

才人はガレージに車を停めた後、しばらく耳を澄ませる。

……やはり何も聞こえない。

才人は肩の力を緩めると、玄関へ向かう。

灯りが点いていたので、既にユリは帰宅している様だ。

「ただいま。遅くなってごめん。関と夕飯を食べて来てね」

才人は戸口で奥へ呼びかける。

「ねえ、ちよつと来てー！」

靴を脱いでいるとリビングから大きな声が聞こえる。才人が慌ててそちらに向かうと、ユリは暁子のパソコンの前に居た。

「見つけたわよ」

ユリが言った。「暁子さんは、この出会い系を使っていたみたい。IDは『akiko』。間違い無い」

才人はコートを脱いで、画面を覗き込む。そこには女性の写真が数枚並んだホームページが表示されていた。モデルでは無く一般人が携帯電話で撮影した様な顔写真なので、登録した会員の写真が、ランダムで表示される仕組みになっているのだろう。

『「出会いを求めチャオ」？ ……名前は面白いけど、デザインがぱっとしないサイトだね。どうやってここを見つけたんだい？』

「新年会で、有名画家夫人が教えてくれた」

「有名画家夫人？ 誰？」

「そんなの知らないわよ。名前まで聞いてないし。その人が暁子さんにこのサイトを勧めたの。ねえ、どうする？」

「ちよつと見せて」

ユリは才人に席を譲る。

IDは「akiko」だが、パスワードが分からないので、「パスワードを忘れた人はこちらから再取得出来ます」というボタンを見つけ、クリックする。

するとメールアドレスの入力欄が表示された。才人は暁子のメールアドレスを速やかに入力し、すぐ下の「再取得」ボタンをクリックする。

暁子のメールボックスにメールが届いた。パスワードは「サイダーハウスciderhouse」。

それを使って会員ログインする。プロフィールのページに、暁子の顔写真があった。携帯電話のカメラ機能で撮影したのか、緊張した様な眼差しを向けていた。

「本名は書いていない様だね。ニックネームは『あきこ』。 ……クリスマスイブの前日に連絡を取っていた相手は ……履歴は ……ここか。あった。『AI』」

才人は「AIのプロフィール」をクリックした。しかし「IDが見つかりません」というエラーが表示される。

「事件後に消したのかな」

「あーあ」

ユリは残念そうにソファの上に寝転がる。「結局そこまでしか分かんないか」

「でも例のメッセージカードの差出人『AI』が、暁子が出会い系サイトで連絡を取り合っていた相手というのが確実にあった」

「暁子さんの浮気相手も、彼女を刺した犯人も、イコールその人ね」

「可能性は高い」

才人は画面を閉じる。「問題は、僕達にはこれ以上何も出来ないという事だね」

「やっぱり警察に言わなきゃ駄目だよねー。でもさ、私と才人が声を揃えて『このAIって人が暁子の浮気相手です』なんて言ったりしたら、頭おかしいのかって思われるよ」

「 ……うん」

才人はパソコンの電源を落としながら、立ち上がる。

「ねっ、私、一芝居打ってみようか？」ユリは人差し指を立てて言う。

「どんな風に？」

「『思い出しました。出会い系サイトで知り合った男に刺されたんです』って言うのよ」

才人は一瞬、その手があったか、と思ったが、

「……いや、駄目だ。暁子がどこに出掛けたのかとか、知り合った男の顔とか、肝心な事が全然答えられないんじゃないや信憑性が無い」

「でも、被害者本人がそう訴えてるんだから、聞いてくれた方がいいじゃない！ ケチ！」
「僕に怒ったって仕方が無いよ。……せめてIDが残ってさえすれば、芳賀君にハッキングを頼んで、AIの個人情報を入力出来るんだけどね……」

「犯罪じゃん」

「それで犯人を捕まえられるなら、安い代償だと思うけど」

「絶対駄目。才人が捕まるなんて、駄目だからね」ユリは怒った様に言う。

「へえ……心配してくれているんだね」

「契約条件その三。毎月のお小遣いは最低三万円、直接手渡しが原則よ。お小遣いの日には刑務所を脱獄でもする？」

「ああそう……」

才人は溜息をつく。「……でもまあ、無理だと思うよ。IDは消えているんだし」

「三嶋暁子殺人未遂事件はこれにて迷宮入りか」

ユリはソファーに横になり、ポーツと天井を見つめる。

才人は床に座る。

人差し指が回転を始める。

何も思い浮かばない。

こんな日もある。

いや、少なくとも今までは無かった。

いつからだろう？

暁子を刺した犯人を、

自分で見つけてやろうと思ったのも、

一体いつからだろう？

警察に任せればいいのに――。

暁子に対する愛情か？

犯人に対する憎しみか？

真実を知りたいという欲求か？

回転が加速する。

三十三回転半で、その答えは出た。

愛情でも憎しみでも欲求でも無い。

暁子を許せない気持ちの裏側で、

才人の中で芽生え始めた、

新しい感情のためだ。

そう……彼女を、

目の前の彼女を、

ただ守りたいという気持ちだけだ。

「ユリ」

才人は小さく呼びかける。

返事が無い。

彼女はソファアールの上で、静かな寝息を立てている。
才人は彼女に近づいた。
何度も見た暁子の寝顔。
でも、この中に暁子は居ない。
このまま一年が経てば、
暁子も、ユリも、
永遠に自分の前から消えてしまう。
そう自分が決めたのだから仕方が無い。
自分で決めたのだから……。

29

暗闇。
一筋の光。
視界が開けてゆく。
ぼんやりと姿を現す真っ白な天井。
マインドスリップした時と同じ、
混濁した感覚。

(才人?)
ユリは跳ね起きた。
毛布がはらりと床に落ちる。
三嶋家のリビングだ。

(ああ……)
ユリは自分の両手を見つめる。
身体はまだ、暁子の物だ。
私など消えてしまえばいい、と思っていた。
でも今は、消えるのが怖い。
ずっとこのまま、戻れなくてもいい。
この不思議な感情は何だろうか?
ユリは部屋を見回す。
才人の姿は無い。

夕べは寝室に戻らず、リビングでそのまま眠ってしまったらしい。壁の時計が九時五十分を指している。窓の外は既に明るい。暁子の身体にスリップしてから、こんな遅い時間に目を覚ました事は無かった。

「才人……?」
ダイニングにもオフィスにも居ない。
寝室かなと思えば二階も覗いてみたが、彼の姿はどこにも無かった。
(どこに居るの……?)

孤独、という言葉がユリの心に突き刺さり、鼓動を激しく揺さぶった。
ダイニングキッチンに戻り、温かいコーヒーを飲んで一息つく。

ふと思いついて、カップを持ったままユリはオフィスに向かう。才人が使っているマツクを起動し、メールを確認した。新着メッセージは無かったが、今朝九時十五分に届いたメールが既に開封済みだった。件名は「緊急事態」とある。

満月生命の桜井です。

お世話になります。

ホームページの件で、困った事になりました。

緊急事態なので、すぐに弊社までお越し下さい。

宜しく願います。

「本当に緊急事態ならメールじゃなくて電話にすればいいのに」

ユリは首を傾げる。「大体、才人がいつメールチェックするかなんて……」

その時、インターホンが鳴った。

「はい」

ユリはすぐに玄関へと向かい、ドアを開ける。

目の前にフルフェイスのヘルメットを被った男が立っている。

呼吸が一瞬止まった。

「暁子……」

男は低い声でそう呟くと、ドアを手で押し開けた。

「会いたかったよ……」

男はユリの両肩を掴んだ。彼女は咄嗟に膝で男の下腹部を蹴った。男は小さく呻き、バランスを崩す。ユリはその隙をついて彼の手を振り解くと、そのままリビングに駆け込む。男はすぐに体制を立て直し、追いかけて来る。

「暁子……俺だよ！ AIだよ！ 忘れちゃったのか！」

男はヘルメットに手を掛け、脱ぎようとしていた。ユリはその隙に彼に渾身の力で体当たりする。二人とも倒れる。彼の懐から、フローリングの床にけたたましい音を立ててナイフが滑り落ちた。

「愛してるんだよ、暁子お！」

呪いの籠もった男の声。ユリは慌ててそのナイフに手を伸ばす。ヘルメットをかぶっていて視界が狭いせいか、男はそれに全く気付いていない。ユリの上に馬乗りになり、ひたすら彼女の首を両手で押さえ付けてくる。

（あと少し……）

ナイフまであと三センチという所で、視界が歪み始めた。朦朧とする意識の中でユリは何とかナイフを取る事に成功し、勢いよく振り上げた。

「やめろっ！」

ユリはその声に驚いてナイフを落とす。ヘルメット男の声では無く、屋外から放たれた別の人間の声だ。男は舌打ちをし、素早く彼女から両手を離すと、身を翻してリビングを走り出た。ユリもすぐ体制を整え、彼の後を追う。

廊下で二人の男が対峙していた。ヘルメット男の前に立ちふさがっているのは、関丈史だ。体格はどちらも同じ様なもので、互いに隙を作るまいと睨み合っている。

先に動いたのはヘルメット男の方だった。関の反応が一瞬遅れ、男の体当たりをもちに受けて、彼は派手な音を立てて床に転倒した。

「もう！ 何やってんのよ！」

ユリが呻いている関を飛び越えて玄関口まで躍り出た時、ヘルメット男は門の前のバイクに乗り込み、勢いよく発進した。

「お、おい！ それ俺の……」

関が大声で叫んだ。靴も履かずにユリが門前まで飛び出した時には、既に男の姿は影も形も無かった。

「買ったばかりのシルバークロウイングが……」

ようやく追いついた関は、呆然とした表情で虚空を見つめている。

「バツカじゃない？」

ユリが関を睨みつけた。「次に助けに来る時は、キー抜いときなさいよね」

30

ユリが淹れたコーヒを飲んで、関はリビングのソファで一息ついた。警察がすぐに駆けつけるらしい。ユリはもう少し落ち着きたい気分だったが、仕方なくパジャマからセーターに着替え、ダイニングの椅子に座る。

「いやあ、本当に面目無い」

関は頭を掻く。「かっこいい所を見せられなくて……」

「本当、カッコ悪い。幻滅した。マジ最低」

ユリはそっぽを向く。「……でも、ありがと。関さんが来てくれてなかったら、多分殺されてたと思うわ」

「バシッとやっつけてたら今頃一躍ヒーローだったんだけどなあ。ここまで踏んだり蹴ったりじゃ、礼なんか貰える立場じゃ無いよ……。はあ……」

「あのバイク、高いの？」

「七十万……」

関は額に手を当てる。「俺の相棒だった……」

「バラバラにされて、その内パーツがネットオークションに出品されるかもね」ユリが悪戯っぽく笑う。

「さっきの奴が、暁子さんを刺した犯人？」

「さあ……。『暁子』って呼んでたから、通りすがりの変質者で無い事は確かだけど」

その時、インターホンが鳴った。今度はモニターでチェックしてみる。後藤刑事と本条刑事が暗い表情で立っている。

「奥さん、大丈夫ですか」ドアを開くや否や、後藤が言った。

「どうって事無いです」

ユリは投げやりに答える。「中へ入りますか？」

「あ、ええ……まあ、出来れば……。詳しいお話を伺いたいもので。後ほど鑑識の者が到着します。我々は偶然近くをうろついていたので、彼らより早く到着しただけです」

後藤は丁寧に頭を下げ、本条は小さく一礼をして、玄関へと進む。

「お客さんですか？」本条が玄関先に並べられた靴を見ながら訊く。
「どうして？」

「ご主人や奥さんとは靴のサイズが違います」
「鋭い」

ユリは驚いて瞬きをする。「才人の友達兼会社の専務、だそうですね」
リビングで刑事達に関を紹介した。関はソファーに座ったまま軽く右手を挙げて会釈する。ユリはダイニングに彼らを促した。

「ご主人は居らっしゃらない様ですね。お仕事ですか？」後藤が訊いた。

「あつ、才人ならもうすぐ来ますよ」

関がリビングから言った。「来る途中で、あいつから電話ありましたから」
「どういう事ですか？」

「九時四十分頃だったかな……。俺はバイクに乗ってここに来る途中でした」

「それはまた、どうして？」

「あつ、この家がウチの会社なんです。だよ、奥さん？」

ユリは軽く頷いた。

「携帯電話が鳴って最初は無視してたんですけど、あんまりしつこいもんで出てみたら才人で……」

関は携帯電話を取り出す。着信履歴を確認しているのだ。「ええっと、それが九時四十三分ですね。緊急事態があったと連絡があったので満月生命に行ったが間違いだった、自分もすぐに帰るから急いでくれとの事でした。それで慌ててここに来てみたら、玄関のドアが開いて、奥でヘルメットを被った男が奥さんを襲ってるのを目撃して、慌てて助けに入って……」

「犯人に返り討ちにされて、バイクを盗まれて逃げられちゃったんだよね」ユリが言った。

「……そういう事です」関は溜息をついた。

「犯人の顔は見ましたか？」

「フルフェイスのヘルメットだったから、顔は見えなかった」

ユリが後藤を見て言う。「声が男だったから、あいつが男だった事は間違い無い」

「その声に聞き覚えは？」

「ありません」

「関さんも同じですか？」

「ええ……」

関が答えた時、バタバタと足音を立てて才人が息を切らしながら駆け込んできた。ユリは立ち上がった。

「ユ……いや、暁子、大丈夫か？」才人はユリに駆け寄る。

「馬鹿」

ユリは泣きそうな表情で彼を睨む。「あんなメールに騙されて、大事な大事な奥さん……の身体をリビングに放ったらかしにしたまま、普通行く？ 馬鹿じゃない？ 私がど

れだけ怖い思いをしたと思ってるわけ？ 信じられない！」

リビングの関と、ダイニングに居る刑事二人は呆気にとられてこちらを見つめている。

才人は「悪かった」とユリに頭を下げた後で「刑事さん、こんにちは」と会釈する。

「俺は無視かよ」関が睨む。

「関さん、バイクを盗まれたのよ。大事な大事なスーパーカブを」

「シルバーウイング……」

関が訂正する。「あとさ、助けに来たって事も少しは触れて欲しいんだけど」

「あんなメールと言うのは、どんなメールですか？」本条が訊いた。

「ああ……実は」

才人はリビングの床に座った。「今朝メールをチェックしてみたら、昔の僕のクライアントの満月生命という会社からメールが届いていまして、桜井という人から『緊急事態だからメールを見たらすぐに来て欲しい』との事でした。何かトラブルでもあったのかと思って、すぐに車で満月生命に向かいました。一応鍵は掛けてあるし、セキュリティも万全なので、暁子を一人にしておいても大丈夫だろうと高を括っていたんですが、こんな事になるうとは……」

「それで、満月生命に行かれたんですね」

「ええ。でも受付で桜井なんて人は居ないと言われて……。これは毘だ、と思って関に連絡を取りました」

「気付くのおせえよ」

関が溜息混じりに言う。「緊急事態をメールで連絡してくる馬鹿がどこに居るんだよ。相手がいつチェックするのも分からないのに。普通電話しろ」

「電話を使えない、っていう緊急事態だったのかも知れませんが」

後藤がジョークを言ったが、誰も笑わなかった。「……失礼。状況は概ね把握しました。犯人は満月生命の桜井と名乗って、ご主人にメールを送った。それを見たご主人が慌てて家を飛び出してゆく。そして犯人は一人になった奥さんを狙った……と。こういうわけすな」

「そういう事ですね」才人は頷いた。

「となると、ご主人のメールアドレスや、満月生命と付き合いがあった事など、犯人が知っていたという事になりますか……」

「会社のサイトにメールアドレスは書かれています。あと、ネットで僕の名前を検索すれば、満月生命のサイトを手掛けた事はすぐに分かるでしょうしね」

「ふうむ、何でもインターネットで分かっちゃいもうもんなんですね」

後藤はハンカチを取り出し、汗を拭く。

「奥さんが襲われた時の状況を、もう少し細かく教えて頂きたいのですが」本条が言った。

「えっと……インターホンが鳴ったから、出てみたら……」

ユリは考えながら言う。「ヘルメットの男が目の前に立ってて、その人が『暁子』と呼びながら掴みかかってきて、必死に抵抗してリビングの方へ逃げて、犯人に殺されそうになって、そこへ関さんの『やめろ！』って声が掛かって、犯人が逃げて、関さんのバイクを盗んでどこかへ消えちゃったんです」

「……分かります」

才人が眉をひそめる。「もう少し整理して話してくれないかなあ」

「その時間、ウチに居なかった才人にそんな事言われたかないわよ」

「いえ、私には大体分かりましたよ」

本条は少し口元を上げる。「しかし幾つか引っ掛かる点がある。まず奥さん、リビングにはインターホンのモニタがある様ですが、フルフェイスのヘルメットをかぶった男が戸口に立っているのが映ったら、普通ドアは開けないと思いますが、何故開けたんですか？」

「リビングに居なかったんだもの」ユリが膨れ顔で言う。

「では、どこに？」

「オフィス。朝起きたら才人が居ないから、どこに行ったのか気になって、メールを確認しに行ったの。そこは玄関のすぐ近くにあるから、リビングに戻ってモニタをチェックするの面倒で」

「なるほど、納得しました。……次に奥さんにお伺いしますが、貴方は犯人にバイクを盗まれたそうですね。キーは抜いておかなかったんですか？」

「はあ……。この前に着いた時、リビングの奥で犯人に襲われている奥さんが目に入って、そんな暇も無く……」

「しかしヘルメットを脱いでいる暇はあったでしょう？」

「えっ……」関が目丸くする。

「だって貴方はバイクでここまで来られたんですね。ヘルメットはどうしました？」

「いえ……。どうなったのかな。あはは」

「最初からかぶって無かったわよ、関さん」ユリが言った。

「ほう、ヘルメットをかぶらずにバイクに……」後藤が関を睨む。

「いや……。ちよっと待って下さいよ！」

関が慌てて両手を振る。「俺のヘルメット、フルフェイスなんですけど、ケータイに電話が掛かってきた時に、ヘルメットを脱がなきゃ話が出来ないんで、凄く面倒なんです。だからいつもは運転中にケータイが鳴っても無視してるんですけど、今回は才人から慌てた様子で電話が入ってたんで、その時に脱いで、次いつ連絡が来るかも分からないので、そのまま……」

「管轄が違うし緊急事態ですから、まあ大目に見るとしましょう」後藤が微笑む。

「関さんが門の外まで来た時に、奥で襲われている奥さんの姿が視界に入った……」

本条は立ち上がると、リビングのドアを開いた。「このリビングと玄関は一直線上……。となると……玄関のドアは開けっ放しだったという事になりますね。そうしなければ見えない。犯人はどうして閉めなかったんでしょう？」

「多分、閉める余裕は無かったと思う。犯人がいきなり襲いかかって来たので、私、蹴飛ばしたりして色々抵抗しましたからね」

「ドアは犯人が開けたんですね？」

「最初は私がスツと開けて……犯人がその後、手でグイッと押し開けて、って感じかな」「不可解だ」

本条が顎に手をやる。「奥さんや関さんが不可解なわけではありませんよ。犯人の行動が、です。犯人は本当に奥さんを殺そうとしていたんでしょうか？ それならドアは絶対に閉めるはずだ。ただ戸口で話をしようとしただけでも考えられませんか？」

「でも、ナイフ持ってたわよ。えーっと……」

ユリがキョロキョロとリビングを見回し、「あった。これだわ」と部屋の片隅に落ちていたナイフを拾い上げる。

「お預かります。……出来れば指紋をつけない様にして欲しかったですがね」

後藤はハンカチ越しにナイフを受け取る。指紋の心配より、後藤の汗が付着する心配の方が先では無いのかな、と才人は思う。

「そのナイフは、奥さんを殺すために持っていたのでは無いとも考えられます」

本条はまた顎に手をやった。「奥さんを殺すためなら、玄関のドアを開いた時にいきなり刺していたはずですよ。でも犯人はそれをしなかった。……しかしその数秒後には、犯人が奥さんを殺そうとしている。この間に、犯人にどういう心境の変化があったんでしょうか。考えられる可能性は一つ。殺人未遂事件当日の、奥さんの記憶です」

「記憶……？」才人が首を傾げる。

「ええ。奥さんは今日襲ってきた男と、殺人未遂事件当日に会っている可能性が高い。しかし奥さんにはその日の記憶が一切無いので、男の事は一切覚えていない。この事が、犯人の逆鱗に触れたのでは無いでしょうか？ ……今日犯人がこの家に来たのは、奥さんを殺すつもりでは無かった。ただ話をしようとしただけだった。……となると、こうは考えられませんか？」

本条はユリを見た。「今日貴方を襲ったヘルメットの男は、貴方を刺した犯人では無い。……そういう可能性もある。勿論、あくまで仮説の一つですが」

32

一通り鑑識の捜査も終わり、一時間後に警察は全員引き上げて行った。

「そうだ、和久田さんにファックス送らなきゃなあ。ああ忙しい忙しい！」

関は大声でそう言いながらオフィスへと消えてゆく。二人にさせてあげようと気を利かせたのかも知れない。リビングに残された才人は、キッチンで黙って洗い物をしているユリに「ごめん」と呟いた。

「何が？」

彼女は顔を合わそうとしない。

「……今朝の事」

「今朝の事？」

「あんな馬鹿なメールに騙された僕が悪かった」

「それだけ？」

「……リビングにユリを放ったまま出て行って悪かった。ユリのピンチに駆けつけられなくて悪かった」

「許して欲しい？」

「うん」

「どうしよっかなあー」

ユリは蛇口を止め、タオルで手を拭う。「ねえ、それじゃあさ、契約条件をもう少し厳しくするって言うのはどう？」

「と言うと？」

「あと一つ追加させて欲しいの。無茶な事は言わない。誰にでも出来る簡単な事を、たった一つだけ」

「分かった」

才人は微笑んだ。「契約条件の八つ目だね」

ユリは真剣な眼差しで才人を見つめる。

「……私を好きにならないで」

凜とした声。

そして表情。

才人の顔から微笑が消える。

身体は、凍り付いた様に動かない。

心臓の鼓動も、きつと一瞬だけ止まったに違いない。

約五秒、彼女と目が合った。

もつと長かったかも知れない。

彼女はそれ以上、何も言わない。

じつと才人を見つめ、

返事を待っている。

彼は小さく瞬きをすると、

少しかだけ微笑を取り戻し、

ゆっくりと口を開いた。

「……分かった。約束する」

そう言いながら、

才人はユリから目を反らす。

溢れ出そうな感情を、

心の奥深くへと押し留める。

「仕事、して来るよ」

才人は彼女に背を向け、言った。

リビングのドアノブを掴む。

「才人」

ユリが後ろから呼び掛ける。

何故か哀しげな声。

才人は思わず足を止める。

でも彼は振り返らない。

「ごめんなさい」

ユリが初めて見せる柔らかな声。

しかし、消え入りそうな声。

きつと泣いている。

才人は小さく頷くと、

そのまま、
俯いたまま、
振り向かないまま、
リビングを出て行った。

33

「ちょうど今、終わった所だぜ！」

才人がオフィスのドアを開くと、関丈史はファクシミリの前に立っていた。送信完了の電子音が鳴り、彼はたった今送った書類を才人に渡す。

「お疲れ様。随分早いな」才人は書類をチェックする。

「そりゃあ初仕事だからさ」関は椅子に座り、嬉しそうに回転する。

「即日開通のプロバイダって……」

才人は目を丸くする。「全部、ダイアルアップ接続？」

「だって『明日にでも使いたい』って店長が言うからさあ」

ダイアルアップ接続とは、通常の電話回線とパソコンのモデムを繋げてインターネットを行う接続方式である。工事や機器を設置する必要が無いので、プロバイダによっては即日利用が可能だ。

昔はこの方式が主だったが、回線速度が遅く、現状の利用者は少ない。高速のADSLやFTH（光ケーブル）といった接続方式には工事が必要のため、開通までには最低でも一週間から一ヶ月掛かってしまう。

「スピードが遅いって、文句言われないかな」

「文句を言われたらADSLに変更すればいいさ。あの場合は『一週間以上掛かります』って答えるより『すぐ使えます』って言った方が、お客さんに好印象だろ？」

「後日きちんと説明しないと……」

才人は渋い顔で言った時、電話が鳴った。すぐにファックスに切り替わる。見ると、先ほど関が送信したプロバイダ一覧がそのまま送り返されてきた様だ。いや、よく見ると一番料金の安いプロバイダが二重丸で囲んである。

「早っ！」関が感心する。

「店は暇なのかな……今日は定休日じゃ無いはずだけど」

才人はそう言いながら、今日が何曜日だか思い出せない。

「よっしゃ、とりあえず俺サクラドルに行つて来るわ。悪いけど車借りるぜ」

「ああ。これ、鍵」

関は車のキーを受け取り、オフィスを出た。才人はマックを起動し、メールチェックを行った。新着メールが五通。その内四通は子豚ファンからのメールで、残り一通は藤原千鶴からだった。

また偽者じゃ無いだろうなと思い、念入りに差出人情報をチェックする。今朝の満月生命社員を装ったメールは、「フリーメール」と呼ばれる誰でも自由にメールアドレスが発行出来るネットサービスを利用したものだった。ネットに繋がりがさえすればどのパソコンからでも適当な登録情報で即時発行が出来るため、そのアドレスを登録した個人を特定し

にくいのである。

調べてみたが、どうやら今度は本物の様だ。才人はメールを開く。

ちづる☆です。

昨日はお疲れちゃんでした！

イラスト、いつでも描きますので

気軽に声掛けてねー！

サイダーハウスは本日から営業開始。

でも、あんまり気合い入ってなかったり……。

そうそう、髭男が面白い事になってます！

銀河銀行のサイト案、

三つともボツくらって、しょげ返ってます。

ザマミロ。

ではでは。チャオ！

(村瀬は銀河銀行のホームページを担当しているのか)

銀河銀行と言えば、奇抜なテレビCMが話題を呼んでいる大手都市銀行である。生半かな企画力ではクライアントは絶対にOKを出さないだろう。

(僕がこのサイトを手掛ければ、一発でクライアントの心を掴めるのに……)

電話が鳴った。才人は反射的に手を伸ばす。

「合資会社印白塔です」

電話の相手は何も言わない。

「もしもし？」才人は怪訝な顔になる。

『……三嶋才人さん。俺を覚えているか』

テノールの効いた特徴ある声。才人は声紋データベースにアクセスする事無く、声の主を瞬時に導き出した。

「村瀬秀雄さん、ですね？」

才人はあまりのタイミングに少し動揺する。「まさかマスコミが押しかけた時に僕を罵倒していた貴方が、あの後サイダーハウスに入社されるとは思いませんでした」

『……………』村瀬は黙り込んだ。

「銀河銀行を担当されているそうですね」

『どうしてそれを？ まさか俺を……………』

見張っているのかとでも言いたげだ。才人にそんな趣味は無いし、彼に対して何の興味も無い。が、才人は何も言わず黙って相手の次の言葉を待つ。

『いや、そんな事はどうでもいい。三嶋さん、お願いがある。俺を助けてくれないか』

「助ける？」

才人は目を丸くする。「どういう意味ですか？」

『銀河銀行のサイトの事だ。俺にはもう限界だ。もう時間が無い。高瀬社長を失望させたく無いんだ。……頼む！ クライアントを納得させるアイデアを俺にくれないか！』

『どうして僕がそんな事をしなくちゃいけないんですか？』

『……例の取材の件は、本当にすまなかったと思ってる』

村瀬の声は暗く沈んでいた。『グランプリを取ったあんたが、ただ、羨ましかった。グランプリを確実視されていたあんたと違って、俺は運良く準グランプリになれた口だ。……俺はどうしても、三嶋才人に勝ちたかった。アメリカにデザインの勉強に出て、様々な手法を学んだものの、あんたの様な天才的な独創性までは身に付かなかった。……ヤケになった俺は、他の何かであんたをドン底に突き落とせないか、ずっと機会を窺っていた。そう思っていた矢先、あの騒ぎだ。俺はマスコミの前であんたに赤っ恥をかかせてやろうとしたんだ。……そのおかげで、スカイビールを始め、多くのクライアントはあんたの考えを非難しただろう。会社全体の事を考えず、自分自身の利益だけを考えて行動するとう、あんたの言動がな』

『スカイビールの棚橋さんにも同じ事を言われましたよ。そして、自分で色々な事を経験してみても、会社とはどういう物なのか……少し分かった気がします』

『だが、結局最後に笑うのはあんただ、三嶋さん。去年の暮れにスカイビールで勤めている知人と飲みに行った時、新しく広告プロデュースを請け負う事になったプランナーのラフが、上層部には受けても一般のアンケートではかなり不評らしい。おまけに予算も時間も大幅にオーバーして、先の見通しは暗いんだとさ。……どうして三嶋才人の様な有能な男を外したのか理解に苦しむ、と知人は言ってたよ。このプロジェクトはもう無理だが、次のプロジェクトではあんたに打診するかもな。……いい物はいい。それを決めるのは会社じゃ無い。一人一人のお客さんが決めるんだ。そんな簡単な事も見抜けず、偏った考えであんたを貶めた俺は馬鹿だった。完敗だよ……』

『その考えが正しいのか間違っているのか、僕には何とも言えません』

才人は微笑んだ。「自らの利益よりも会社としての責任を優先させる方が、当然社会のルールを重んじた大人の正しいやり方でしょう。逆に、自らの利益を優先させる方は、客観的に見ると自己中心ですが、それが一番人間的で、ある意味純粹とも言える。結局その違いだけの事だと思っんです」

『……あんたは強いな。他人に何を言われても、自分の信念を貫いている』

『そんな事はありませんよ』

棚橋に自分の考えを否定された時は、どうしていいのか分からなかった。

暁子が刺された夜も、どうしていいのか分からなかった。

きつと才人が少しだけ強くなったのは、

暁子を幸せにしたいという漠然とした気持ちよりも、

もつと、ずっと強い、

今、目の前に居るユリを守るのだという、

自分の中で一番強い感情が生まれたからに違いない。

『……俺も、あんたの様に強くなってみせる。もつと自分の力で頑張ってみて、いつか実力であんたを抜いてやるよ』

「では僕は追い抜かれぬ様、頑張ります」

『……会社、成功するといいな』

それだけ言うと、村瀬は電話を切ってしまった。

(銀河銀行の件、手伝ってあげようと思ったのに)

悪い人間では無いが、どうも思い込みの激しい人間らしい。

(そう言えばサイダーハウスの前社長も、そんなタイプだったな……)

案外二十年後、同じ様に痴漢で捕まったりして……などと才人は自分のジョークで吹き出しそうになる。

「ねえ」突然ユリが入って来た。才人はびっくりして椅子から転げそうになる。

「ノックぐらいして欲しいなあ」

「だったら『ノックしろ』って貼り紙ぐらい貼ついたら？ 大体ノックつてき、目上の人間の居る部屋に対してやるもんじゃないの？」

またユリがいつもの調子に戻っているので、才人は少し嬉しかった。電話している間に化粧を済ませたのだろうか。いつもよりファンデーションが厚い気がする。

「それで、何？」

「玄関にキモイのが来てる」ユリは玄関の方を指差す。

首を傾げながら玄関に向かうと、アニメのキャラクターが描かれたトレーナーを着た、肉付きのいい少年が立っている。ピカピカに磨き上げられた分厚い眼鏡越しに、困惑した様な表情が窺える。

「ああ、久しぶりだね。芳賀君の友達の……渋谷君だっけ？」

「桶谷です」

桶谷四郎は唇を尖らせる。「そんなに覚えにくいですか？」

「珍しいね、君が一人でウチに尋ねて来るなんて。芳賀君はどうしたんだい？」

「それが芳賀さん、下で布団敷いて寝込んでるんですよ」

「何かあったの？」

「原因究明のために二階に上がってみたら、部屋の中がぐちゃぐちゃになって……。フィギュアも、CDも、とにかく床にめっちゃめちゃなんです」

「地震は無かった様だから、きつとストレスでも溜まっていたんだらうね」

「それだけじゃありません。パソコンのデータが全部消えてるんですよ」

「全部？」才人は目を見開く。「それじゃあ、開発中のゲームも……」

「はい！ 全部消えちゃったんですよ！」

桶谷は肩を震わせて喚き始める。「幸い僕のグラフィックだけは僕自身が管理していたので無事でしたが、芳賀さんのデータにはバックアップが無くて、全部消えたパソコンの中に保管していたんですよ！」

「ウイルスにでもやられたのかな……」

「馬鹿言わないで下さい！ 芳賀さんのコンピュータは完全体です！ ウィルスやトロイの木馬にやられるなんて、絶対にあり得ません！」

「じゃあ芳賀君が自分で消したとしか考えられないんじゃないかな？ きつと、ストレスが溜まっていたんだ」

「いいえ、あれは絶対に誰かの仕業です。だって、画面にデータを消した犯人のメッセージ

ジが残ってましたもん」

「メッセージ？」

「直接見てもらおうと思ったんですけど、部屋がぐちゃぐちゃなんでデジカメに撮って来ました。これです」

桶谷はポケットの中からデジカメを取り出し、レビュー画面を才人に見せた。芳賀がいつも使っているマシンが映っている。拡大すると、真っ白になったデスクトップ画面の上に、『ザンネンでした。AIより』と書かれたテキストが開かれている。

「AI……？」 才人は目を見開いた。

「美少女戦記ミラクルピーチのアイちゃんの名を騙るなんて、許せない！」

桶谷は拳を握った。「見つけたら、月に代わってお仕置きしてやる！」

「あかさ、芳賀君のパソコンのデータを消したのは、このAIって人なのは間違い無い？」

「多分そうですね。っていうかそれしか考えられない」

「AIが……芳賀君のパソコンに……」

「消えちゃった物はもう仕方ありません。でも、芳賀さんの方がもう使い物にならないって感じで……何か可哀想で……」

「しばらくそっとしておいた方がいいかも知れないね」

「駄目です！ そんなのは！」

桶谷は才人の両肩を掴む。「芳賀さんのショック症状は、時間じゃ絶対に解決してくれません！ お願いです！ 何とか助けてあげて下さい！」

「そう言われてもねえ……」

困った事になった。芳賀からAIについて詳しい話を聞こうにも、現状ではきつと何も話してはくれないだろう。

「そうだ！ 芳賀さんは、三嶋さんの奥さんの事が大好きなんです！」

「えっ……？」

「奥さんに、芳賀さんを励ましてもらう様、頼んでくれませんか？ お願いします！ それできつと治るはずですよ！」

「ちょ、ちょっと君ね……」

才人は桶谷の手を振り解く。「それはいくら何でも、無理というものだよ」

「無理でもお願いします！ 頼みましたよ！」

桶谷は深々と頭を下げると、出て行ってしまった。

「……という事だけど、どうする？」

才人は振り返り、オフィスルールの影に隠れているユリに訊いた。

「私が引き受けると思う？」 ユリは笑顔で訊く。

「普通なら放っておくんだけだね……。芳賀君のパソコンのデータがAIに消されたっていうのを聞いて、彼の話を聞かずに居られなくなった」

「大体さ、あの男ってアニメのヒロインしか興味無かったんじゃないの？ それがどういう経緯で私を好きになっちゃうわけ？ バッカじゃないの？」

「彼が好きなのは君じゃなくて、暁子の方だよ」

「あ、そうか……」

「一言『元氣出して』ぐらい、言っておいたら？」

「あのねえ……」

ユリは才人を睨む。「人ごとだと思って簡単に言わないですよ。第一、あの男の家にはちゃんと足を踏み入れる事ですら、嫌なんだから」

「じゃあ彼を呼んでくるから」

「そう言う問題でも無いわけ」

「この間、暁子のパソコンのパスワードを解除してもらった恩があるだろう。色々お世話になってるんだからさあ……」

「私には関係無い。絶対嫌」

「一言励ますだけでいいんだ」

「駄目」

「暁子ならきつと、引き受けていたと思うんだよ」

「契約条件六つ目、違反。次破ったら本気で出て行くからね」

「何でも言う事聞くから」

「だったらさっきのアニメオタクに断って来て」

「……ユリ」才人はユリの目を正面から見据える。

「な、何よ？」

「……昼ご飯、何が食べたい？」

ユリはにっこりと微笑む。

「オムライス！」

34

サクラドールの前は閑散としていた。一瞬潰れてしまったのか、と思って慌てて近付くと、ドアの前に「準備中」の札が掲げられている。関丈史は反射的に時計を見る。間もなく午後一時だ。

「こんにちは」

関は硝子戸を押し開け、奥へと声を掛ける。途端にドスドスという足音が近づいて来て、コック帽をかぶった和久田翔平が姿を現した。

「いやあ、昨日はどうも！」

「今、準備中なんですか？」関は札を指差す。

「色々と研究中なものです。UFO形のチョコを作ってる所です。夕方にも『宇宙チョコ』と銘打って、売り出す予定です」

「もう売り出しちゃうんですか？ さすが、チョコレートのは天才は違いますね！」

関は見え透いたお世辞を言ってしまったが、和久田の顔はこれ以上無いというぐらいに縮んでいる。

「ケーブルを持って来ましたので、パソコンのある部屋の電話回線と繋いで、早速業者との手続きを始めようと思います」

「どうぞどうぞー！ 今日中に使えるんでしょうね？」

「はい。勿論」

関は和久田に促され、事務室へと進む。持ってきたケーブルをパソコンのモデムジャック

クに差し込み、もう一方を壁のモジュラージャックに接続する。和久田はニコニコ顔でその作業を背後から見守っている。

パソコンの電源を入れる。モデムの設定を一通り終え、オンラインサインアップ作業に移る。料金支払用のクレジットカード番号の入力を求められたので、ここだけは和久田に打ち込んでもらう。

プロバイダとの契約はすぐに完了した。インターネット接続用のIDとパスワード、メールアドレス、各種情報が、サイト上に表示される。

「えっと、プリンタはありますか？」関は訊いた。

「はい。そこに」和久田はデスクの下を指差す。どうしてこんな所に置かれているのかは分からないが、一応パソコンに接続されている様なので、電源を入れる。契約情報を二枚プリントアウトし、一枚は控えとして関が持った。

「もう、使えるんですかね？」和久田が訊いた。

「あと少しだけ待って下さい」

随分せっかちな店長だな、と思いつつ、IDとパスワードなどを速やかに設定していく。ダイヤルアップ接続の設定には慣れている。ホテルの企画営業部に居た頃、部員の中では一番早く関の自宅のインターネットが開通したため、同僚からはよく設定を頼まれたものだ。

「終わりました」

関は手頃な検索エンジンをトップページに表示する。

「おっ、おっおっ……！」

和久田は画面をかじりつく様に覗き込む。「すっげえ……！」

関は和久田に席を譲る。検索エンジンの使い方を教えると、彼はフンフンと頷き、まずは自分の名前を入力して検索を掛けた。「和久田翔平に該当するページが見つかりませんでした」とメッセージが表示されたので、彼は酷く落胆する。

「このインターネット、壊れてんじゃないですか」和久田が渋い顔で訊く。

「ホームページが出来上がれば、すぐに名前でヒットするようになりますよ。それじゃ作業は終わりましたので、これで……」

「ああ、ちょっと待った！ これ、持って行って下さいよ！」

和久田が差し出したのは、写真だった。「さっき使い捨てカメラで撮ったんですけど、ページに全部使して下さい。手を横に広げた物とか、腕組みをした物とか、チョコレートを食べている所とか、一応二十四パターンあります」

「はあ……」

関は引きつった笑みを浮かべ、写真を受け取る。

「あ、それとね」

「まだ何かあるんですか？」関はうんざりする。

「これ、うちのロゴマーク」

桜草が印刷されたステッカーだった。「先代がパソコンをいじって、偶然出来上がったという伝説のロゴなんですよ。これもホームページの片隅にでもお願いします」

「伝説のロゴなのに、片隅っすか……」

「社長さんに宜しくお伝え下さい」

関は資料——と呼べるのかどうか微妙だが——を鞆に詰め、サクラドールを後にした。

才人が芳賀明彦の家を訪れると、桶谷の姿は無く、芳賀一人が一階の和室で布団を敷いて横になっている状態だった。いつになく血色の悪い顔をしており、吹き出物も増えている。額に手を当ててみたが、熱は無い様だ。

「桶谷君から芳賀君のパソコンのデータが消されたって聞いたけど……」
才人が優しく訊いた。芳賀は黙って才人から目をそらす。

「AIという人に、データを消される、心当たりでもあったのかい？」

芳賀は頑なに口を閉ざしたまま、布団をかぶり込んだ。

仕方が無い——才人は最後の手段を使う事にした。

「暁子がさ、芳賀君の事をとて心配してるんだ」

才人がそう言った瞬間、芳賀は慌てて身体を起こし、彼を凝視した。

「あ……暁子さん、が……僕を……？」彼の声は哽れてしまっている。

「うん。それで暁子が君のために、腕によりを掛けてオムライスを作ったんだよ」

「暁子さんが……僕のために……」

信じられないといった顔つきで、芳賀は瞬きを繰り返している。本当は才人が作ったのだが、そんな事は死んでも言えない。

「食べに来ないかと誘いに来たんだけど、その調子だと無理そうだね」

「い、行きます……！　すぐ、着替えて来ますっ！」

芳賀は空を飛ぶ様に布団から出て、素早く身支度を始めた。彼が鍋パーティーの時に着ていたワイシャツを身につけ、髪をワックスで固め、手ぐしでセットし始める。

「か、かつこよく見えますかね……？　僕……」

「上出来だよ」

才人はそう言いながら、吹き出しそうになる。芳賀の準備が整ったので、二人は三嶋家に移動する。リビングに近付くにつれ、彼の鼻息がどんどん荒くなってきた。

「芳賀君を連れて来たよ」

才人はキッチンに居るユリに声を掛ける。彼女は電子レンジで温め直したオムライスをダイニングテーブルに乗せると、芳賀に向かって「こんにちは」と会釈する。

「こ、こ、こんにちは」

「どうぞ、座ってね」ユリが優しく言う。

「は、はいっ」

芳賀は緊張した様子でテーブルに着く。「美味しそうですね……ふふっ」

「私が芳賀さんのために、よりに腕を掛けて作ったのよ」

「腕によりを」才人が小声で囁く。

「そうそう、腕によりを掛けて、作ったの。残さず食べてね」

「はいっ、頂きますー！」

芳賀はスプーンを取ると、まず一口食べた。顔色がみるみるうちに回復してゆく。

「さ、最高です……。こんなオムライス、今までに食べた事ありません……。暁子さん

の愛情が、身に染みます……」

そんな馬鹿な、とユリの唇が声を発さずに動く。

「ところで芳賀君さ、AIの事だけど」頃合いを見計らって、才人が言った。

「……パソコンのデータを、消されました」芳賀が食べながら言う。

「どうしてAIに狙われたのか、心当たりは？」

「……分かりません」

「ねっ、食べさせてあげよっか？」

ユリが訊いた。芳賀の顔が真っ赤になり、震えながらスプーンを皿の上に落とす。

「い、いえ、そんな事……ああ、でも……」

「どうしてAIにデータを消されたのか、本当に心当たりは無いのかな？」

才人はもう一度訊いてみた。

「じ、実は……」

芳賀は肩を落として話し始める。「ある出会い系サイトをハッキングしていたら……偶然、AIという男の情報を手に入れてしまって……多分、そのせいで……」

「出会い系サイトをハッキング？」才人は驚く。

「ええ……『出会いを求めチャオ』という名前のサイトなんです……」

暁子がアクセスしていた出会い系サイトと同じ名だ。

「芳賀君がどうしてそのサイトのハッキングを？」

「趣味なんです……。色んなサイトのサーバに忍び込んで、顧客情報を集めて……。その裏で高く買ってくれるので……」

「完全に犯罪だね」

才人は溜息をつく。「それじゃ狙われても仕方が無い」

「でも、絶対僕がハッキングしていた事は、誰にもばれないはずなんです……。誰にも発見されていないセキュリティホールを突いたプログラムを組んで、侵入したわけですし……僕がアクセスした形跡も、サーバ上には残ってないはずなんです……」

「見落としがあったのかも知れないよ」

「いいえ！ 絶対にありません！」

芳賀は自信を持って言った。

「それじゃあさ、出会い系サイトは星の数ほどあるのに、どうして君は『出会いを求めチャオ』というサイトだけをハッキングしたのかな」

「た、単なる偶然です」

「さっき芳賀君は『AIという男』って言ったよね。『アイ』と聞けば誰だって女だと思っるのが普通だけど、君は迷わず『男』と言った。という事は、君はAIの事をよく知っていたという事になる。沢山の会員が居る中で、どうしてAIの事をそんなに良く知っていたのかな？」

「あ……アイウエオ順です。会員リストをアイウエオ順でソートをかけた時、一番上にくるのがAIだったんで……。それでよく覚えて……」

「なるほど。まだAIの情報は持つてる？」

「パソコンに入っていましたけど、全部消されてしまいました……AIに」

芳賀は意気消沈とした様子だった。

「AIが登録した名前や住所、電話番号なんかは覚えてない？」

「苗字は確か……池上」

「イケガミ？」

「池山か池本だったかも知れません。……名前までは覚えてません。確か、漢字一文字だったのは覚えてるんですが……」

「その他の情報は？」

「分かりません。住所は多分、東京だと……。でも、どうして三嶋さんは、AIの事をそんなに訊くんですか？」

「暁子を刺したのが、そのAIだからだ」

才人が言うと、また芳賀の目が大きくなった。が、すぐにオムライスの方に視線を戻す。芳賀はまだ何かを知っていきそうな雰囲気だったが、恍惚とした表情で食べている彼を見ていると、これ以上の質問が思い浮かばなくなった。

彼が食べ終わりにかけた頃、関丈史が戻って来た。彼は疲れた様子でダイニングにやって来ると、芳賀の隣の席にドカッと腰掛けた。

「いやあ参ったよ。見てくれよこれ」

関は和久田から受け取った資料をテーブルに並べる。

「な？ 酷いだろ。この写真とか。まるでジャバ・ザ・ハットだぜ」

「随分と目立ちたがりな店長だね。マスコミ嫌いじゃなかったのかな」

「テレビに映るのは嫌いだけど、ホームページに顔を出すのはOKなんだろう。変な店長だよ、まったく……」

「お疲れ様。とりあえず午後からラフを作り始めるよ」

「あの……」

芳賀が恐る恐る手を挙げた。「ごちそう様でした……。本当に美味しかったです。僕、今まで生きてきた中で、こんなに幸せを感じた事はありませんでした……」

彼の皿はケチャップの跡も残らないぐらい、綺麗になっている。

「あれ？ おぼっちゃま。居たのか」

関が今気付いたかの様に言う。「何食ってたの？」

「それじゃ、僕はこれで……」芳賀は立ち上がる。

「待って」

ユリは皿を指差す。「後片付け、して行きなさいよ」

「あつ……はい……」芳賀は慌てた様子で皿とコップをキッチンに運ぶ。

「洗い終わったら、さっさと帰って。もう用は無いから」

「は、はい」

芳賀は頷いて、皿洗いを始めた。

「奥さん、やけに今日は機嫌悪くねえか？」関が才人に耳打ちする。

「でも何故か芳賀君、凄く嬉しそうだよ」

才人は芳賀の横顔を眺めながら言う。彼は皿を洗いながら、澁刺とした表情を見せていた。

(……終わった)

芳賀明彦は椅子に凭れながら、満足げな表情を浮かべる。

ほぼシステムが復旧した。セキュリティに関してはまだ未着手だが、簡単なゲーム開発やハッキングをするための環境は整った。もう午後十時を過ぎてしまったので、桶谷四郎にその旨連絡を入れるのは明日にしよう。彼の就寝時間は九時だ。

(それにしても……)

暁子の作ったオムライスが美味しかったが、少し卵の味付けが甘かった気がする。芳賀の記憶では、確か暁子は甘い物が苦手なはずなので、この点は意外だった。しかしそんな事はどうでも良かった。胃も心も満たされ、芳賀はとても幸せな気分だった。彼女が自分のためにオムライスを作ってくれたという事は、案外脈あり、という事なのかも知れない。

AIが暁子を刺した犯人だと言うのは分かっていたが、それを三嶋才人が知っていた事には非常に驚いた。暁子が話したのだろうか？ だとすれば浮気の事実まで話さなくてはいけなくなるし、話すにしても警察が先のはずだ。「三嶋暁子殺人未遂事件」に関して、一通りネットで情報収集してみたが、AIの事などどこにも出ていないし、警察の捜査も大して進んでいない様子だ。才人が一体どこで情報を得ているのか、芳賀には全く分からなかった。

(せめてAIのデータが残っていれば……)

謎のハッカー・AI。彼は一体何者なのだろう。芳賀が完全だと信じていたセキュリティをあっさりと破り、全てのデータを削除して消えた時には悔しい思いをしたが、これまでに興味の対象が一つ増えた。いつか彼のマシンをハッキングし、あの時の復讐をしてやるのだ。

さて、今夜はこのパソコンに侵入してやろう。全人類のデータがこの小さなパソコンで閲覧したり、改ざんしたり出来るのかと思うと、神様になった気分になる。

芳賀の記憶の中は、いつも沢山の値が詰まっている。パソコン用語、ホームページのURL、ID、パスワード、IPアドレス、メールアドレスなど、パソコンに関する事ならば何でも記憶している。人の名前や住所、電話番号などは全く覚えられないのに、これらの値だけは、頭の中のデータベースからすぐに取り出す事が出来る。

(そうだ、あそこがいい……)

芳賀はいくつかキーを叩いた。

標的のサーバへの侵入を試みる。

高度のセキュリティが掛けられているが、どこにでも穴はある物だ。三十分もしない内に、侵入に成功した。

(え……)

芳賀は画面に目を近付けた。

(これは面白い……)

暁子が刺され、魂を失ってから二週間が過ぎた。AIはあれ以来姿を見せず、正体についても依然掴めていない。だが油断は禁物だ。いつまたユリの前に現れ、彼女を殺そうとするのか分からない現状では、言い知れぬ不安が解消出来ずに居る。

それでもユリがドライブに行きたいと言うので、殺伐とした雰囲気打ち消し、この日は目一杯楽しもうと思った。セルシオでは気分が出ないとダダをこねる彼女の提案で、五十嵐早月のアルファロメオを借りる事になった。幸い、右ハンドル仕様である。「契約条件の九つ目、お願いしていい？」

五十嵐邸を出発してしばらく経った時、助手席のユリが唐突に言った。

「また？」才人は表情を曇らせる。

「今日だけでいいのよ。難しい要求はしないから」

「……この際だ。良ししよう」

「今日一日だけ、私を好きになつて欲しい」

ユリは才人を見て言う。

「……我が儘だね」才人はハンドルを切った。「そして難しい要求だ」

「じゃあ、交換条件」

彼女は人差し指を立てる。「今日一日、私は世界で一番素直な子になる」

「いつもそう願いたいね」才人は笑った。

「条件成立つて事で、いい？」

「分かった。でも、どうすればいい？」

「デートを楽しもう」

彼女は前に向き直る。「心の底からね」

三時間掛けて、海岸沿いに出る。

冬の海は淡い灰色をしていた。

岬に車を止め、二人は車を降りる。

潮風を浴びながら、才人はユリを見る。

彼女は海を見ていた。

彼も海に目を向ける。

「寒いけど、寒くないね」

ユリはよく分からない事を言う。どういう意味、と訊こうとしたが、才人は黙った。

「冬の海と言うのを、一度見てみたかったの」

彼女は穏やかな表情で話す。「誰も居ない、私だけがこの情景の中に居るんだっていう実感。……そう、本当の私は、こんなだった。こんな冬の海みたいに孤独だった」

才人は黙って聞いている。

「……昔の私は、とても頭が良かったのよ。以前言ったでしょ？ クラスでは近年稀に見る天才児と恐れられていたって。これは小学校の頃の本当の話。……お前は特別な能力のある人間なんだと周りが囁し立てている内に、私は段々自分以外の人間は全員馬鹿なんだと認識し始めた。周囲の人間とコミュニケーションをとる事を極端に嫌う様になって、家族でさえ埃の様に扱い、随分酷い仕打ちをしました……」

そんな毎日が続いたある日、私に突然、寂しいという感情が芽生えた。震えが止まらなかつた。私一人の足下に全ての人間が集合していると思っていたのに、気が付くと、私一

人だけが別世界でポツンと取り残されてた。手を伸ばしても誰もその手を取ってくれない、微笑んでも誰も微笑み返してくれない。まるで私が、この世界にもう存在しない人間であるかの様に……。

孤独が怖い。自分が周囲の人間から離れた場所に居るという事が怖い。私は何とかして皆と同じ世界の一員であると思える様、昔の自分を心の中に閉じ込めて、新しい自分を創り出した。色んな人間に出逢って、その人をトレースして……そうして気が付くと、今の人格になってた。成功なのか失敗なのかは分からない。もしかしたら、これが生まれ持った本来の私なのかも知れないって、思う事にした。

それでも孤独が怖いという気持ちだけは、ずっと消えないのよ。だから私は……貴方と一緒に過ごす事に決めた。朝起きたら才人が居なかった日、私はあのメールを読むまでリビングで泣いていたのよ。寝室に一人きりの夜も、本当は才人に抱き締めてもらいたかった。寂しかった。いつもいつも強がり言ってばかり居るけど、そんな人間になってしまったから、もう変えられないの。この自分を、変えられないの……。

こんな苦痛を味わうぐらいなら、いつそ消えてしまいたいって思った。暁子さんの身体に居るといふ不可解な現状が気持ち悪いという理由よりも、誰よりも孤独が嫌いなのに、こんな風に人を傷つけてしまう人格である自分を消してしまいたかったんだと思う。

でも……でもね、生き続けて欲しい、生きる事に必ず意味があるって言ってくれた才人の言葉が深く心に残って温かかった。今まで生きてきた中で一番温かかった。

私……才人が好き。大好きだよ。でも貴方は、私を好きにならないで欲しい。こんな私なんか、好きになっちゃいけないのよ」

ユリは才人の胸に飛び込んで、
声を上げて泣いた。

彼に見せる二度目の涙。

才人は、彼女を強く抱き締める。

今この腕の中に居る世界で一番素直な女性は、

暁子では無く、ユリなのだ、

彼は初めて身体中で認識した。

38

夕暮れの帰路は黄昏色に染まっている。

アルファロメオは緩やかなスピードで海岸線を駆け抜ける。

「冬の海は、どうだった？」才人が訊いた。

「大っ嫌い」

ユリが微笑む。「多分もう二度と来ないよ」

「僕もだ」

寒いけど寒くないね、と彼女が話した理由。

彼女は心に温かさを秘めていたからかも知れない。

ユリの表情を横目で見ながら、才人はそう思った。

「あれ、何だろう」

しばらく海岸線を走り続け、急カーブに差し掛かった時、数台の車が路肩に停まっているのが見えた。何人かの男がガードレールから崖下を覗き込みながら、何やら大騒ぎしている。

「事故かな？」

才人はブレーキを踏む。幅の広い4WDが斜めに停めてあり、道を塞いでいるのだ。

「これじゃ通れないな。ちよつと行つて来る」

「私も行く」

二人は車を止め、騒いでいる男達の方へと近付いた。

「すみません、あの4WDちよつと動かして欲しいんですが」

「ああ、俺のだ。すまん」

帽子をかぶった男が慌てて車に戻る。

「事故ですか？」才人はジャージを着た男に訊いてみた。

「ああ、そうらしい。バイクが木っ端微塵だ。ほら、見てみなよ」

男が避けると、ガードレールが大きく外側に向かつて折れ曲がっていた。

「猛スピードでカーブに入つて、ハンドルを切り損ねて激突つて所かな」

「あれじゃ、多分死んでるな……」別の男が言った。

才人とユリは、折れ曲がったガードレールに触れない様、崖下を覗き込む。

見覚えのある型のバイクが、既に瓦礫と化している。

(シルバーウイングだ)

才人は咄嗟にそう思った。色とシートの形で判断したが、他がぐしゃぐしゃになっているので、よく似た同じ型なのかも知れない。

「可哀想に」

ユリは崖下を見ながらそう呟く。

「車、避けたよ」さっきの帽子の男が戻つて来た。

「あ、はい。……行こうか」

「うん」

二人は車に乗り込み、再び家路を辿り始めた。

途中ファミレスで夕食を済ませ、ようやく帰り着いた時、車内の時計は午後九時十五分を指していた。五十嵐早月を呼ぼうと五十嵐邸の前で車を止めようとした時、ユリが「ねえ、あれ」と怪訝な表情で前方を指差した。

パトカーが二台停まっている。見覚えのある近所の人達が集まって何やら騒いでいたが、彼らの全員怯えた様子だった。才人は車を停めて、そちらを凝視する。

「また事故……つて事は、無いよね？」ユリが言った。

「あれは、芳賀君の家だ」

才人は車を降り、そちらに早足で進む。芳賀明彦の門を黄色のテープが塞ぎ、警察の間が慌ただしく出入りしていた。門の前で騒いでいる野次馬の中に早月の姿を見つけたので、才人は近付いた。

「何かあったんですか？」才人は訊いた。

「大変よ！ 芳賀さんが殺されたのよ！」早月が叫んだ。

「えっ……！」

才人は目を見開いた。「殺されたって……?」

「そう。変な眼鏡の子が発見したらしいわ」

桶谷四郎の事だ。

「才人、どうしたの?」

呆然と立ち尽くしている才人の肩に、ユリの手が触れる。

「芳賀君が殺されたらしい」

「嘘……」

ユリは芳賀の家に目を向ける。

彼の事を嫌っていたが、酷くショックを受けた様子だった。

今日一日、世界で一番素直な子になると約束した彼女の、それが本音なのだろうか。

「ね、中に入れないかな?」ユリが訊いた。

「無理だと思うけど、どうして?」

「だって犯人はAIだって、警察に伝えなきゃ!」

「ああ……」

そうだ。芳賀はAIにデータを消されている。もし彼が才人には話していないAIに関する秘密のデータを幾つか持っていたとしたら? AIを脅迫し、逆に殺されてしまったという可能性も十分あり得る。

「あの、すいません」才人は入り口で見張っている警官に声を掛ける。

「駄目駄目。部外者は立ち入り禁止だ。下がちなさい」

「事件の事でお話したい事があるんですが」

「とにかく下がちなさい」

警官は頑として聞かない。

「ねえ、中の後藤か本条って刑事さん、居る?」

ユリが警官に訊いた。「居たら伝えて欲しいの。三嶋才人が大事な話があるって」

警官が訝しげな顔を見ると、小さく頷いて中に入って行った。しばらくして後藤刑事がハンカチで顔を拭いながら現れる。

「やあ、どうも。例のヘルメットの男の件で、この近くを聞き込み捜査していた所、事件に遭遇したもんで……。ところで私にお話があるそうですが?」

「暁子の事件とこの事件、もしかしたら関連があるかも知れませんが」

「何ですって? 本当でしょうか。……とりあえず中へお入り下さい」

後藤がテープを上げ、才人とユリを中に通す。振り返ると五十嵐早月が神妙な面持ちで立ち尽くしていた。

「今日は、本条という刑事さんと一緒では無いのですか?」

芳賀の家の玄関まで来た時、才人が訊いた。

「本条は別件で動いています。実はそれも暁子さんの事件に大きく関係する事なのですが……、まあもう少し後でお話します。彼ももうじき、こちらに駆けつけますでしょう」

「殺人現場ってどこ?」ユリが訊いた。

「二階です。パソコンのある部屋です」

「見て来てもいい?」

「駄目ですよ。写真をお見せするぐらいの事は出来ますけどね。とにかくこちらの客間へ」

後藤は厳しい顔で言った。彼が客間と言ったのは、芳賀が先日布団を敷いて寝込んでいた和室の事だ。今は布団のあった場所には和式のテーブルが置かれている。

「殺されたのは、ついさっきです」

三人が座った時、後藤が言った。「桶谷と言うんですかな、あの眼鏡の少年が芳賀さんから今日の午後三時頃に電話を受けたそうです。『七時に人と会う予定があるから、八時半頃に来てくれ』と芳賀さんが言ったそうです」

「七時に人と？」

芳賀が桶谷以外の人間を家に呼ぶ事は無いはずだ。

「おそらく犯人と見えています。桶谷さんは就寝時刻が九時なので、八時半じゃ困ると電話で断ったそうですが、芳賀さんは『いい儲け話があるから我慢しろ』と答えたそうです。これはもう誰の目から見ても明らかです。芳賀さんは犯人の弱みを握っていて、脅迫していた。おそらく多額の金を要求したんでしょう。そして犯人がこの家を訪れ、二階に居た芳賀さんの後頭部を鈍器でガツンです」

「ガツン、ですか……」才人は少し震える。

「頬や鼻にも何点か殴られた形跡があります。最初の一撃で振り返って、襲撃者の顔を見ただんでしょう」

「後藤さん」警官がポラロイドで撮影した写真を持って来た。

「ご苦労さん」

後藤は敬礼し、写真を受け取る。「実は遅かれ早かれ、三嶋さんにはご意見を伺おうと思っていたんですよ。あいにく私はパソコンに詳しく無いものでね。パソコンの世界には何かこういう暗号めいた物があるのかと思ひまして……」

「何でしょうか？」

後藤は一枚の写真を差し出した。才人とユリが覗き込む。芳賀のパソコンの画面が映っている。よく見るとワープロソフトが起ち上がっているのが分かる。そして、そこにポイント、一文字だけ入力がかされてあった。

{

「……これ、何だと思えますか？」後藤が訊いた。

「総称してカッコって呼びますね。僕は」

才人は肩を竦める。「しかし正式名称はカーリーブラケットと言います。プログラミンクのIF文でよく使われる記号です」

「はあ、カーリーブラケット……」後藤は手帳にメモする。

「これがどうしました？」

「実はこれ、芳賀さんが死ぬ間際に残したダイイングメッセージだと見えています」

後藤は別の写真を見せた。「キーボードのこの『{』のキーとシフトキーだけに、芳賀さんの血痕がくつきりと付着しているんですよ。おそらく芳賀さんは、殴られてから自分の指に血をつけ、この二つのキーを選んで押したんです。弾みで押ししまったのであれば、もっと色んなキーが押されているはずですからねえ」

「シフトキーを押さないと、カーリーブラケットは出ないんです。シフトキーを押さずに

このキーを押すと、確か別の記号が出るはずですよ」

「となると、ますます芳賀さんが何かの意図があつて、押した可能性が高いですな」

後藤が咳払いをする。「そのカーリーブラケットという記号が、何か犯人を特定する様な言葉に変換は出来ませんか？ 例えば、犯人の名前になるとか……」

「カーリー・ブラケットさんっていう名前の外国人がどこかに居そうよね」

ユリが言った。「フルーツバスケットとか、トレジャープラネットにも、少し似てる」

「もしかしたら形かも知れませんがね。この記号、見方によっては髭にも見えます。犯人は髭を生やしているとか」

「うーん。髭を生やしている人が世の中に何万人居るか……」後藤が頭を掻く。

「きつと、もつと居ます」

才人が言った。「もしこれが開く方のカッコでは無くて、閉じる方のカッコだったら、『む』なんですけどね」

「む？ どういう事ですか？」

「閉じる方のカーリーブラケットと同じキーには、平仮名の『む』が描かれているはずですよ。大抵のキーボードはそうなっています。例外もありますが」

「なるほど……。うーん、『む』みたいな平仮名を残しておいてくれた方が、我々にとって参考になるんですけどねえ。犯人の名前が武藤とか、村田とか……。この開く方のカッコと同じキーには何が描かれてるんですか？」

「カーリーブラケットの他には、スクエアブラケットという四角い形のカッコと、鍵カッコと、あとは半濁点ですよ」

「半濁点？」

「ああ、ハ行につける丸の事です。パピペポの丸。でもシフトキーと同時に押した時に出るのは、カーリーブラケットだけです」

「はあ……」

後藤は困った顔になる。「いやどうも、参考になりました。……おつと、本題を忘れていましたね。奥さんの殺人未遂事件とこの事件が何か関与があるそうで？ どうしてそう思われるんですか？」

才人は、AIという人物が芳賀のパソコンにハッキングし、データを全て削除した事件を話した。暁子が出会い系サイトを利用していた事までは話さなかったが、三嶋家の郵便受けにカードを入れたAIとハッキング犯のAIが同一人物で、今回の殺人事件も時期的に見てAIの犯行である可能性が高い。

ついでに芳賀自身もハッキングを行い、AIの個人情報をどこかで得ていた可能性が高いと才人は話した。専門用語が多く後藤は終始戸惑い気味だったが、解説を交えながら三十分かけて話すと、彼は全貌を理解した様子だった。

「ではこれで捜査を進めて行きたいと思います。三嶋さん、奥さん、ご協力感謝します」

後藤は敬礼する。才人とユリはホッと一息ついて立ち上がった。

その時、携帯電話の音が鳴り、後藤が出る。彼は二、三言話していく内、驚愕した表情へと変わってゆく。才人とユリは顔を見合わせる。

「……AIが見つかりました」

後藤は電話を片手に、才人に言った。「ただし、死体でね」

『殺人未遂事件被疑者、盗んだバイクで事故死――』

七日午後五時三十分ごろ、東京都H岬近くの海岸線の国道で、男性の運転する大型バイクが猛スピードで走行していたため急カーブを曲がりきれず、ガードレールを突き破り崖下に転落、大破した。運転手の男性は全身を強く打っており、病院に運ばれて間もなく死亡した。大破したバイクは盗難車である事が判明したため、警視庁は七日、運転手の男性を被疑者死亡のまま、窃盗容疑などで書類送検した。

また、板橋区在住の男性のアパートからはいくつかの血痕が見つかっており、同区内で先月二十四日に起きた東中野主婦殺人未遂事件の被害者の血液型と一致した。今回死亡した男性が殺人未遂事件の被疑者である可能性が高く、今後この男性の詳しい動機などについて、殺人未遂容疑で調べを進めていく方針。(二月八日・大河新聞)』

39

二月に入り、合資会社印白塔は早くも成功の兆しにあった。

女性が経営している店を口説きにかかるといふ関丈史の作戦が功を奏したのか、サイト制作依頼が爆発的に増えた。また、某おもちゃメーカーから「三匹の子豚」を商品化したという依頼も来ており、印白塔はサイダーハウスを超える勢いで急成長していた。

村瀬秀雄の予想した通り、一月末にスカイビールの棚橋から新商品の広告プロデューサー依頼が舞い込んだ。サクラードルの他、美容院など三件のサイトを制作中だった三嶋才人は、「もう少し検討したい」と返事を出した。何ヶ月も掛かる巨大プロジェクトよりも、小さな仕事を数多くこなす方が、今は楽しくてたまらなかった。

AIが死亡してから、ユリは一段と明るくなった気がする。自分を殺そうとしていた犯人が居なくなつて、安心の日々が訪れたのかも知れない。

結局あの男は何者だったのだろうか。被疑者が死亡しているせいか、各紙報道ではAIの本名や年齢などには触れていない。AIの殺人未遂容疑が確定すれば、もう少し踏み込んだ情報が流れるはずなのだが、警察はなかなかその判断を下さない。本条刑事がいつか言っていた仮説も少し気になった。その事が才人にとっては心残りではあった。

また、AIは殺人未遂容疑で現在調べを進められているが、芳賀明彦を殺した犯人では無い事が判明している。AIは一月七日の午後五時半に事故死している。午後七時に芳賀明彦を殺害出来るはずが無いのだ。

もう一つ不可解な事がある。芳賀が殺害された三日後、後藤刑事からの報告で、AIの部屋からインターネットカフェの会員証と、パソコンの「初心者入門」や「出会い系のすすめ」などの入門書が何冊か発見されたらしい。つまりAIはパソコン初心者なのだ。出会い系の会員になったり、才人宛にフリーメールを送る事は入門書通りに出来たとしても、芳賀のパソコンをハッキングする事など到底出来るはずが無いのである。

となると、芳賀のパソコンをハッキングしたAIは一体何者だったのか。死亡したAIとは別人なのか。数多くの疑問が残ったものの、これ以上ユリを不安にさせたくない気持ちから、なるべく事件の事は警察に任せ、忘れてしまおうと才人は思った。もうユリに危険は何も無いのだから。

三匹の子豚商品化の話が順調に進み、その作者が藤原千鶴である事が世間に知れ渡ってしまったので、彼女はサイダーハウスを解雇された。しかし気落ちしている様子は全く無く、合資会社印白塔への再就職を希望しているらしい。

青山のイタリアンレストランで、才人と千鶴はランチをとっていた。商品化の経過を彼女に報告するためである。

「あたしさあー、ちょっと最近、関君にメロメロなんだ」

一通り報告が終了すると、千鶴が突然話題を変えた。「彼、かっこいいよねー。彼女居るのかな？ 居ないならこれはもう、チャンスってやつ？」

「やめた方がいいと思うけどね」才人が笑う。

「あーっ、それってヤキモチ？」

「焼き餅ならお正月に食べたよ」

才人のジョークに、千鶴はつまらなそうな顔をする。「ごめん、スルーしてくれ」

「暁子さん、元気にしてる？」

「うん。元気だよ」

「最近の暁子さんって、すごい綺麗だよね。悔しいけど、あたし、絶対に勝てないなって思った。だから諦める事にする」

「何の話？」

「以上。おしまい。デザートまだかなあ」

千鶴がそう言った後、タイミンク良くウエイターがデザートを運んで来た。髪を金色に染めたヤンキー風の少年だった。彼は繊細な声でデザートですと告げた後、深々と頭を下げた。見た目と中身は紙一重と言うのは、やはり迷信だなと才人は思った。

「……そう言えばさ、いつだったかな、真つ黒なワンピース着た暁子さんが、この前を歩いてたのよねー」

千鶴はケーキを食べながら言う。

「え、それいつの事？」

「うーん……。そうだ、あの日はサクラドールでクリスマスセールやってたんだ。去年のクリスマスのお昼頃だよ。でも多分見間違えたよねー。刺された次の日もん」

ユリが病院を抜け出した日だ。

彼女は黒いワンピースで通夜に現れた。

別人の姿が無い。

彼女が青山に？

一体何のために？

——色々事情があったのよ。気持ちの整理もつけたかったし。

気持ちの整理。

気持ちの整理とは何だ？

才人の指がいつの間にか回転を始めている。

何かが、心の中で弾けた気がした。

確かめなくては、と才人は思った。

「どうしたの？ 才人。ケーキ食べないなら貰うよ」

「悪い、急用が出来た。電車で帰ってくれる？」

才人は立ち上がって、コートを羽織った。

「ちよつと、才人、どこへ行くの？」

彼女の驚いた声を背に、才人は店を走り出た。

車に乗り込み、板橋区の春川由里の自宅へと向かう。

——煙草、買ってきて。セーラムピアノシモね。

車中、彼女の言葉が次々と蘇る。

——女に年を訊くのは失礼よ。

滑り込む様にして路肩に車を停めると、駆け足で春川家に向かい、インターホンを鳴らす。しばらくして出て来たのは、春川由里の母親だった。

「あら、確か貴方……」

「三嶋です。お通夜で一度お会いしましたね」

才人は頭を下げた。「葬儀の方には出られずに済みません。是非、お線香を」

「まあ、それだけのためにわざわざ……。どうぞ。あの子が喜びます」

母親は微笑んで、才人を中へと促した。

大きな仏壇の前に、お通夜で見た春川由里の笑顔が立てられている。

才人はその前に座り、線香をあげる。

目を閉じて、しばらく黙祷した。

ふと、お供え物に目を向ける。

同級生が供えたのか、菓子類が多い。

しかしピーナッツや固焼き煎餅ばかりだ。

「……甘菓子がありませんね」

「ええ、そうなんです」

彼女は微笑んだ。

「あの子、甘い物が食べられないんですよ」

母親の笑顔と春川由里の笑顔が、才人の中で今、完全に重なった。

後藤刑事から連絡が入り、AIが明日にも殺人未遂事件の容疑者として書類送検される事になったと聞かされた。本条刑事は渋い顔をしていたが、他に物的証拠が見つからないため、事故死した彼の犯行と見て間違い無いと判断したのだそうだ。

あちこちで幾つかの情報を入手した後、才人は自宅に戻った。

間もなく午後五時を回ろうとしている。暁子と過ごしていた頃は毎日定時で帰宅していたとは言え、日没前の夕刻を共有した事は平日では一度も無かった。

「才人、おかえりー!」

リビングに入ると、ユリがキッチンから大声で言った。

「ねっ、ちよつとちよつと、料理教室で覚えたのよ、このカボチャスープ。味見してくれる？ 多分私の中ではダントツね。今でも美味しいんだけど、一晩寝かすともっと美味しくなるんだって」

「うん……」才人は鞆をリビングに置き、キッチンに向かう。

エプロン姿のユリは嬉しそうに小皿にスープを注ぐと、才人に渡した。彼はスープを冷ましながら、一口すする。

感想を待っているのか、ユリはじつと才人を見つめる。彼は俯いたまま何も言わない。

「どうしたの？ まずい？」

ユリがキョトンとした表情で訊く。

才人は小皿をテーブルに置く。

喉の奥から込み上げる感情。

抑えようとしても、止まらない。

もう止まらない。

彼はユリを見る。

柔らかな表情。

「……才人？」

ユリは心配そうに才人の顔を覗き込む。

才人はユリを唐突に抱き寄せ、

彼女の唇にキスをした。

ユリは一瞬だけ、

ほんの一瞬だけ、

瞳を閉じた。

才人にはそれが解った。

しかし彼女は、才人を突き放した。

驚いた表情で、才人を見つめるユリ。

「才人……どうして？」

「条件の二つ目……」

才人は言った。「契約不履行でこれにて終了……かな」

「どうして、こんな事をするの？」

ユリは唇を震わせていた。

「君は本当に頭が良かったんだね……」

才人はダイニングテーブルに着いた。「よくも今まで僕を騙し通せたものだ。感服するよ。

僕には到底考えつかない。……もう、全て終わりにしよう」

「どういう事……？」

「君は春川由里じゃ無い。全くの偽者だ」

才人はユリを睨んだ。

「私……私は……」

「春川由里は甘い物が嫌い……彼女の母親からそう聞かされた後、いつもケーキやチョコレートを美味しそうに食べていた君が、本当は一体誰なのか、僕は考えてみたんだ。でもその答えはすぐに出た。君は病院で目覚めた時、クリスマスイブの事故の記憶を持っているたね。ただし、それは車に撥ねられた被害者の記憶じゃ無い。車で撥ねた加害者の記憶だったんだ。そうだろうか？ 事故当時、乗用車を運転していた建設作業員、新見純さん？」

ユリは青ざめた表情のまま俯く。

「……被害者の春川由里ばかりに目を向けてしまって、あの事故の加害者の方がどうなったのか、失念していた。お通夜で春川由里の母親が『事故を起こした運転手の家族が今朝謝罪に来られた』と話していたのを思い出した。そう、本人では無く家族が来たんだ。となると運転手本人は無事では無い可能性が高い。」

そこで新見純の行方を調べた所、彼女の運転していた車は飛び出して来た春川由里を撥ねてしまった後、弾みで近くの建物に衝突し、横転したらしい。春川由里はそのまま死亡してしまっただけで、新見純はそのショックで意識不明の重体。今もまだ、病院で眠っている。ずっと意識が戻っていないらしい。

よく思い出してみれば、病院で目覚めた君は全く嘘を言ってなかった。『事故に遭った』とは言ったが『車に撥ねられた』とは一言も言ってない。慌てて走ってた、と言ったのは、車で走ってたって事だったんだね。

お通夜で泣いていた君は、自分の死を実感して泣いていたんじゃない。加害者の立場として、自分が死なせてしまった被害者の死を悼んでいたんじゃないか？

一連の勘違いの件に関しては僕の落ち度だけけど、お通夜があつた夜、僕が君の事を死んだ春川由里だと勘違いしている事に気付き、君はそのまま彼女に成り済ましてやろうと思った。つまりお通夜以降の君は、全て春川由里を演じていたんだ。

ああそうそう、病院で既に君は『ユリ』と名乗っていたね。その時は春川由里の名前など僕も君も知らなかったはずなのに。僕はそれが本名かどうかを一度尋ねた。だが君は曖昧な態度をとった。よく知りもしない人間に自分の本名など名乗れないという注意深さなのか。新見純が飼っていた猫の名前、それがたまたま『ユリ』だったってわけだ」

ユリは才人の正面に座った。彼の目をじっと見る。

「……病院での君の言動を振り返っていく内、もう一つ思い出した事がある。君は、クリスマスイブを『アツシ』という男と一緒に過ごすつもりだったと話していた。それ以来その男の名前は君の口からは全く出て来ないので、もしかしたらと思いついて、事故死したA Iの本名を調べてみた。後藤刑事が教えてくれたよ。A Iの本名は池上篤^{いけがみあつし}。A・Iのイニシャルをそのままニックネームとして使ったんだね。つまり君の恋人のAツシというその男こそ、暁子の浮気相手A Iの正体だったんだ。

君と池上は恋人同士だった。その君が、自分の正体や彼と恋人同士であった事を隠して僕と接していた本当の理由は何なのか。

僕は最初、君が殺人未遂犯である池上をかばっているんだと思った。しかし暁子が利用していた出会い系サイトを突き止めたり、A Iの正体を暴くのに協力的だった君の態度を考えると、どうもそうは思えなかった。それに、かばうつもりだったのなら、家にやって来た池上に対して抵抗したというのも変だ。

そう、全ては逆だったんだ。君はA Iを殺人未遂犯に仕立て上げたかったんだ。そんな事をしなければならぬ理由は一つしか無い。暁子を刺したのは君だったんだな」

「……………」

ユリの目にはうっすらと涙が浮かんでいる。才人は続けた。

「池上篤と暁子は出会い系サイトで知り合って、恋に落ちた。暁子は池上の家に行き、風呂に入り……おそらく、ベッドで横になった。その時は池上の方が風呂に入っていたんじゃないかな。彼女が裸でベッドに入った直後……君が来たんじゃないのか？」

「そう……篤と、クリスマスケーキを食べようと思ったのよ」

「ケーキを切るために果物ナイフも持っていたね？」

「持っていたわ。……私が篤の部屋を訪れた時、彼女は裸でベッドに入っていて、こちらに背中を向けていた。もしかしたら眠っていたのかも知れない。とにかく、じっとして動かなかった。……私が愛した篤が、他の女と一緒になるうとしてる。今の人格が変わってから、やっとな掴もうとしていた幸せなのよ。誰にも邪魔させないわ。……気が付いたら、私は果物ナイフで……その女の背中を刺した。」

……彼女の顔は見なかった。どこの誰なのかも、私には分かんなかった。皮の手袋をしてたから、指紋はついてない。ナイフをそのままにして、慌てて外に停めていた車に乗り込んだ。そしてあの子……由里さんを撥ねてしまった。彼女が急に飛び出してきたせいじゃ無い。殺人を犯してきた私が、一刻も早く遠くへ逃げようと必死だったせい。……私、二人も人を殺してしまった……」

「そして事故で意識を失った君の魂は、暁子の身体に移った」

「……きつと天罰ね」

「病室で暁子として目覚めた時、君はとても冷静だった。事故に遭う直前の事は多分シヨックで一時的に忘れていたんだろうけど、僕と話したり、新聞を見たりする内に、次第に状況が掴めてきた。春川由里を撥ねてしまった事、そして自分が殺した女が、今自分が乗り移っている相手だという事に気付いてしまった。」

その時に君が受けた精神的苦痛は、僕には計り知れないよ。だが平静を取り戻してみても、意識不明の新見純本体が目覚ましさえすれば、元の身体に戻れるかも知れないという期待を、君は抱いたんじゃないのか？

つまり元の身体に戻った時の事を、即座に考えなくてはならなかった。春川由里の一件だけなら事故か過失致死で処理されて終わりだけど、そこに殺人未遂罪が加わると状況が変わってくる。君は知恵を振り絞った。何とかして元の身体に戻っても捕まらずに済む方法は無いだろうか？ とね。

その結果導き出した答えが、春川由里に成り済まし、僕の傍で三嶋暁子として生活する事だったんだ。由里のふりをしたのは、新見純の存在を僕に知られない様にするため。暁子を演じる事にしたのは、被害者という立場を利用して、新見純の無実を晴らすためだ」

「最初は……そうだった」

彼女は涙をテーブルに落とした。「だけど今は、そんな気持ちは全く無いわ。きつと暁子さんと居る事が、段々楽しくなってしまうからだと思う。才人と過ごす毎日に、幸せを感じ始めたからだと思う。こんな幸福な日々を暁子さんから奪ってしまった事……私、ずっと後悔してるの。」

才人がまだ心の底から暁子さんを愛しているなら、これ以上、私が貴方の傍に居る事は耐えられなかった。でも才人の中に暁子さんを許せない気持ちがあると知った時、スツと私の心が軽くなったの。このまま元に戻れなくてもいいって思っ、貴方に甘えてたの。酷い女でしょ。それでも私は……貴方に惹かれた自分自身を、止められなかった。

信じて貰えるかどうか分からないけど、いつか元の身体に戻れたら、才人と暁子さんに会いに行っ、新見純の口から本当の事を告白するつもりだったのよ。私の罪に対する罰を、二人に決めて欲しかった。勿論そんな事をしたぐらいで彼女への償いになるとは思っ

てないけど……私には、そうするしか無かった」
「君が暁子に対する想いを変えたきっかけは、一体何だったんだい？」
「暁子さんが、裸のまま河川敷に捨てられていたと……」
ユリは深い息をついた。「才人から聞かされた時よ」

41

「河川敷に暁子を捨てたのは、やっぱり池上だったんだね」

才人は既に理解していた。「君が暁子を刺して池上の部屋を出た後、風呂から出て来た彼は、ベッドで死んでいる暁子を見て驚いた。部屋には自分と彼女しか居ない。自分は殺してないが、このまま通報すれば自分が殺人犯だと疑われてしまう。その様な事を思い、池上は暁子を抱えて車に乗せ、近くの河川敷まで運び、投げ捨てたんだ。酷い事をするよ。人として最低だ」

「……あの男を人として最低だと思う気持ちは、私も才人と同じ。その事実を知った時、もう彼を愛せないと思つたわ。許せなかった。どうしてこんな男のために暁子さんを刺したのか……自分でも悔しいと思う。勿論、私も人の事は言えないけれど……」

「そんな事は無い。だって君はちゃんと自分の罪を償おうとしているじゃないか。春川由里のお通夜に現れて、心の底から彼女の死を悼んで泣いていた。あの時の涙を僕は忘れないうよ。そして僕から毎月貰う小遣いの三万円は、彼女の母親に送金しているそうだね。だけど彼女は君を全く責めていない。悪いのは由里を追いつめた暴走族だ。お願いだからもう送らないで欲しい、そう言つてたよ。」

暁子の件だつて、最初は罪から逃れたい一心だったんだろうけど、池上の行動を知つてからの君は、そんな想いで事実を隠し続けていたんじゃない。暁子の中に居る君が、実は彼女を刺した真犯人だったというショックを僕に与えたくないために、事実をねじ曲げようとしていたんだろう。君が春川由里として接して来た裏には、僕のためでもあったんだと信じているよ」

才人は優しく言った。

「一方——池上篤の行動は常軌を逸し始めた。暁子が生きていると報道で知つた池上は、ずっと暁子が一人になる機会を窺っていた。おそらく暁子が生き返つた事でまた彼女に好意を持ち、無理矢理連れて行こうとでもしていたんだろう。彼女を河川敷に捨てた人間の行動とは思えない。相変わらず最低な奴だ。」

メッセージカードを郵便受けに入れて暁子一人を呼び出そうとしたが、うまく行かなかった。そこで偽のメールで僕を外に誘い出しておいて、暁子が家に一人きりになった所へ池上が行くという方法を実践した。これは成功し、一応彼の望み通りの展開にはなつたが——。

ここで僕はおかしな事に気付いた。君は僕に届いたメールが怪しいと最初から気付いていたね。それだけ注意深いのに、どうしてインターホンが鳴った時は、確かめもせずにくぐ出て行ってしまったのか。君は、本当は知っていたんじゃないか？ ドアの前に立っているその男が、池上篤であるよね」

「その通りよ。本条という刑事もその辺りを少し疑つていたみたいで、内心びくびくして

いたけれど……」

「池上が君を殺そうとしていたんじゃない。やつて来た池上を君が殺そうとしていたんだな？ 愛せなくなった彼を殺人未遂犯に仕立て上げるために。正当防衛という手段を使っ
て」

「ええ。暁子さんに歪んだ愛情を向けていた彼をわざと挑発して、私を襲わせた。彼の性格上、絶対にどこかに凶器を持っていると思っていたら、案の定、懐からこぼれ落ちて来たわ。それを使って彼を殺そうとした。キッチンのだんじりじゃなく、彼の持っていた凶器を利用してしようとしたのは、その方が正当防衛を立証しやすいし、被害者である暁子さんの口から『この男がこのナイフで私を殺そうとした。抵抗している内に彼に刺さってしまった』とも言えば、被疑者死亡のまま殺人未遂容疑で送検されるのは目に見えていたから。……関さんに邪魔されたけどね」

「自分からは池上に会いに行かず、池上の方を自分の元に来させる事によって、正当防衛の説得力は格段に増す。君は本当に頭がいいよ。AIの名を騙って、芳賀君のパソコンをハッキングしたのも君なんだろう」

「そうよ。芳賀はね、暁子さんのパソコンにプログラムを仕込んで、ずっと彼女の行動を監視していたの。彼がああパソコンのログインパスワードを破った時、私はそれに気付いた。芳賀は禁断の方法と言って誤魔化していたけれど、実際はただ彼女のパスワードをあらかじめ盗んでいて、それを入力しただけ。」

「暁子さんが出会い系を利用していた事も、AIの事も、芳賀は当然知っていたはず。でもそれをずっと黙っていた所を見ると、きっと彼は良からぬ事を企んでいたのね。例えば、出会い系を使って浮気をしていた事を夫に知られたくなかったら、自分と一緒になれ……とでも私を脅迫するつもりだったに違いないわ。」

「私はそんな彼を懲らしめるために、プログラムを組んだ。才人がシャワーを浴びている時や、ゲームをしている様に装って作ったりもした。完成したのは新年会の前日。新年会から帰って来て、彼がパソコン画面を見ている様だったから、その時しか無いと思った。」

「彼のパソコンからは本当は暁子さんに関与するデータと、出会い系をハッキングした記録だけ消せればいいと思っていた。でもいつ才人が帰ってくるか分からない上、予想以上に彼の抵抗が厳しくて、ゆっくりと対象のデータを選んでいる暇が無かった。新作のゲーム、面白そうだったのに……悪い事をしたと思ってる」

「池上の死については……単なる事故なのか？ 明らかに僕とユリを追いかけてあの岬まで来ていた様子だったけど」

「単なる事故よ。私は何も関与していない。切羽詰まった彼が、私と才人を二人とも殺すつもりで追いかけて来たのかも知れない。……あの日、崖下に転落したバイクを見て、ああ、これも天罰なんだな……って思った。死んだ篤に対しては何一つ情が湧かなかったわ。……彼の死に様を眺めながら、たった一つだけ、私は可哀想だと思った。関さんのバイクがね」

長い沈黙が続いた。

ユリは泣き濡れた顔を、軽く手で拭い取る。
それを見て、才人の胸がちくりと痛む。

「話は、おしまい？」

彼女は鼻をすすりながら立ち上がった。「離婚届……書かなきゃね」

「……僕が一つだけ分からなかったのは、芳賀君を殺した犯人だ」

才人はユリを見て言う。「芳賀君より前に死んだ池上篤でも無い。勿論、あの日僕と一緒に居た君でも無い。となると一体誰なんだろう？ 芳賀君は誰かを脅迫していた。多分復旧後のパソコンでまたハッキングをしていたんだと思うけど、その記録が全然残っていなかったから、分からずじまいだ。残っていたのは、ダイニングメッセーজのカーリーブラケットだけ」

「私には分かったよ。誰が犯人なのか」

「えっ」

才人も立ち上がる。「誰なんだい？」

「内緒」

ユリは悪戯つぼく笑うと、抽斗からボールペンと離婚届を取り出した。

「才人が契約条件破ったんだからね。才人からサインしてよ」

「……ああ」

才人はボールペンを受け取る。

「暁子さんを殺したのが私だと知って……私と居るのが辛くなった？」

「分からない」 才人はそう答えながら、ゆっくりと名前を書く。

「それとも暁子さんを殺した私が、これ以上才人と一緒に居るのが……辛いからかな」

才人は何も言わず、ボールペンをユリに渡した。

「ああ……結婚もしていないのに、離婚届を書くなんて、前代未聞だわ」

ユリは『三嶋暁子』とサインした。

思いの他、美しい字だった。

「才人……私を、恨んでる？」

「……そんなはず無いじゃないか」

「……ありがとう。今まで本当に……ごめんなさい」

ユリは才人の手に触れる。「私はもう一人で生きてゆける。才人がくれた温もりだけで、生きてゆける。……森田暁子として、ずっと生きてゆくよ。整形もしないし、髪も染めない。それが私の出来る、暁子さんに対する、最大の償いだから」

「……ユリ」

「純って呼んでよ」

「純……。君って……建設作業員だったんだね」

「いつか言ったでしょ？ うーんと身体を動かす仕事がしたいって」

純は微笑んだ。

才人は彼女を抱き締めた。

「辛くなったら、いつでも戻って来ていいからな」

才人は優しい声で言った。

「……うん」

彼女の声は、消えてしまいそうだった。

きつともう戻って来ないだろう、と才人は思った。

「さよなら」

二人はもう一度、短くキスをした。

さよならなら、暁子。

そしてさよなら——ユリ。

エピローグ

二週間が過ぎた。才人は関の使っているノートパソコンを持ったまま、青山のサクラドルに向かった。時間は午後六時ジャスト。閉店時間である。

シャッターを閉めようとしているのは、やはり店長の和久田翔平だった。ホームページの納品日以来の再会である。『チョコレート博士・和久田翔平の世界にようこそ！』という奇抜なネーミングのサイトは意外にも受けが良く、開始早々一日三千件ものアクセスを記録している。

「店長。その節はどうも」

才人が頭を下げた。和久田は振り向くと、満面のえびす顔を彼の方に向ける。

「おおつ、三嶋さん！ どうもどうも。おかげ様で星形チョコもUFO型も大盛況ですよ。プラネタリウムシリーズと銘打って、今度色んな星座の形で売り出そうとも思ってるんです」

「それは楽しそうですね」

才人も微笑む。「ちょっと宜しいですか？　すぐ済みますので」

「え？　ええ、構いませんよ。どうぞどうぞ」

和久田は事務室へと才人を促した。「おっと、お茶入れますね」

「いえ……お構いなく。本当にすぐ済みますので」

才人は持参したノートパソコンの電源を入れ、「ペイント」というお絵描き用のソフトを起ち上げた。

「店長は、このソフトはご存知ですか？」

「えっ、勿論知ってますよ。絵を描くんでしょ？」

「サクラドル先代の滝川誠太郎氏は、確かパソコンが趣味だったそうですね。きつとロゴマークを作っている時、このお絵描き用のソフトを使って、うんうん唸っていたと思うんです」

「はあ……」

「それで偶然出来たと言っているのが現在のサクラドルのロゴマーク、桜草ですね」

才人は鞆からロゴの描かれたステッカーを取り出す。「でも偶然出来たにしては、随分立派なロゴですよ。そう思いませんか？」

「はあ、それはまあ確かに……」

「と言うより、そんな事はまず、あり得ません」

「何が言いたいんですか？」和久田は首を傾げる。

「最初からパソコンに入っている物を利用した、と考える方が自然でしょう」

「だったら何なんです？ まさか著作権に引っ掛かるとでも……？」
「それは問題ではありません」

才人はペインットの文字ツールをクリックした。キャンバスに文字を描くための物だ。「滝川さんが一体どうやって桜草のロゴマークをパソコンの中から出したのか、気になりませんか？ 簡単な事です。パソコンには明朝体やゴシック体など、様々な字体が入っています。これをフォントと言いますが、何も文字だけではありません。キーを叩くとイラストが表示される物もあります」

「面白いですね」

「ウィンドウズに標準で入っている絵文字フォントには『ウィンディンクスWingdings』という名前のフォントがあります。例えば……」

才人は文字ツールで、文字を入力出来る状態にする。そして今度は「表示」メニューから「書式バー」をクリックし、フォントを選択出来る状態にする。フォントには先ほど才人が話した『Wingdings』を選択し、文字サイズは出来るだけ大きな物に切り替えた。

「本当に面白いですよ。試しにやってみましょうか」

才人は和久田を見る。「好きなアルファベットを一つ言ってみて下さい」

「じゃあ……『M』で」

「大文字のMを入力するためには……シフトキーと、Mキーを同時に入力、と。ほら、爆弾のマークが出て来ましたね」

「本当だ……」

和久田は驚いた。「びっくりですね」

「びっくりでしょう？ ちなみに『N』だとドクロマークが出ます。『O』だと旗が出ます。滝川さんは偶然この事に気付いて、サクラードールのロゴマークを出したんですよ」

「へえ……それじゃ、桜草は何のキーを叩くと出るんですか？」

「シフトキーを押しながら……」

才人はキーを押した。「カーリーブラケットです」

桜草のマークが画面に現れた。

「なるほどねえ」

和久田は頭を掻いた。「いやあ面白かったです。勉強になりました」

「話はまだ終わっていませんよ、和久田店長」

才人はノートパソコンの電源を落とした。「ウチの隣に芳賀というパソコンマニアが住んでいたんですが、先日何者かに殺害されてしまいましたね。彼が死ぬ間にパソコンに残したダイイングメッセージが、今まさに僕が導き出した答えそのものだったんです。カーリーブラケット。フォントを『Wingdings』に切り替えると、サクラードールのロゴマークになる。和久田店長、貴方が殺したんだ」
「……話がよく、飲み込めなかつたんですが」

和久田の顔は明らかに引きつっている。

「事件当夜、芳賀君は午後七時に人と会う予定があると聞いていたそうです。この店の閉店時間は午後六時。芳賀君は店長と会うために、そんな時間を設定したんでしょうね」

「だからっ、話がよく分からないんですが！」和久田が大声で言う。

「では最初から説明しましょう。」

貴方はマスクミ嫌いなので、顔をテレビなどに一切出しませんよね。という事は貴方の顔を知るためには、この店に来る必要があったはずです。しかし年中自宅に引きこもっている芳賀君が、この店がオープンしてから青山に来た事など一度も無かった。

現在はホームページがありますから、それにアクセスすれば、否が応でも貴方の顔が目に入りますが、芳賀君が殺された時にはサクラドールのホームページはまだ完成していませんでした。もつとも、打ち合わせなどは一通り終了していて、資料一式は全て僕の手元に揃ってはいましたが」

「……………」

「つまり芳賀君は貴方の顔を一度も見るとは思いません。なのに貴方の顔を見て、彼はあのダイイングメッセージを残した……」

そもそも芳賀君は死ぬ間にキーが打てる状況だったにも関わらず、どうして犯人の名前を直接打たなかったのでしょうか。その方が確実でしょうか。何故ロゴマークなんかでメッセージを残す様な真似をしたのでしょうか。

その結論は一つしかありません。芳賀君は犯人の顔とロゴマークは知っていたが、その顔の主が和久田翔平という名前である事までは知らなかったんです。しかしそんな不可解な状況を作りだしたきっかけが……、そう、一度だけありました。

以前、芳賀君が僕の家にオムライスを食べに来た事がありましたね。その時、ウチの会社の関は、彼が食事をとっているテーブルに資料一式を並べ始めたんです。そう、貴方が撮影した二十四枚の写真と、桜草のロゴマークの事です。写真にもロゴマークにもその写真の男が和久田翔平という名前であると示す情報までは、どこにも書かれていなかった。僕や関の口からも店長の名前は出ていない。

ついでに関はプロバイダの契約情報が書かれていた紙も一緒に並べていましたから、芳賀君がその時にそれも盗み読みました。……面目ありません。もう少し嚴重に情報を管理すべきでした。ちなみに契約情報の紙の方には『和久田翔平』という名前が書かれてあつたはずですが、芳賀君は人の名前をなかなか覚えられない性格なんです。

家に帰った芳賀君はプロバイダをハッキングし、契約情報に書かれていたこの店のIDとパスワードを使って、貴方のメールボックスに侵入した。貴方がパソコンでメールを受信するまでは、プロバイダに保管されるんです。そして……おそらく貴方にとって不利益な事が書かれたメールが送信されたんでしょうね。だから彼は、その事で貴方を脅迫した」

和久田の表情から怒りが読み取れた。才人はさらに続ける。

「芳賀君は、貴方と誰かの間でやり取りされるメールの内容を読んで、脅迫の材料にした。そして彼は、貴方宛にメールを出した。おそらくお金を要求したのだと思います。芳賀君自身はお金持ちのボンボンなのでお金には困っていないはずですが、前日にショッキングなトラブルがあったせい、相当むしゃくしゃしていた様です。

貴方はそのメールで呼び出され、店を閉めた後、凶器を持って芳賀君の家に向かった。そしてこつそりと家に忍び込み、たまたま背を向けていた彼を背後から殴り殺した。

その時の芳賀君の心理は、おそらくこうだったと思います。『自分を襲ったのは、確か桜草のマークと一緒に写真に映っていた男だ。でも名前が分からない。そうだ、ロゴマークをそのままダイイングメッセージにしてしまえばいいんだ。幸い、絵文字フォントのカリーブラケットが、そのままあの桜草のマークになる……』

「いい加減にしてくれないか！」

和久田はデスクを叩いた。「証拠があるなら、見せてみるよ！ 馬鹿げてる！」

「パソコンを拝見させて頂きます」

デスクの上のパソコンの電源を入れ、メールソフトを起動した。

「その時やり取りしたメールが残っていたって言うのか？ そんな物は無い！」

「どうでしょうか」

才人は「ゴミ箱」フォルダをクリックした。

そこにメールは、存在した。

「ここに芳賀君から届いたメール、それに……貴方が誰かとやり取りしたメールが、全て残っています」

「どう……して……」和久田は呆然としている。

「ゴミ箱は『ゴミ箱を空にする』を選択しない限り、ずっとフォルダの中にデータが残ったままなんですよ。インターネットを始めたばかりの人なら、必ずそんなイージーミスを犯していると思っていました」

「警察には……」和久田は拳を震わせて、才人を睨んだ。

「実はもう呼んであります。そろそろ来る頃です」

「……そうか」

彼は諦めた様に肩を落とすと、高らかに笑い始めた。「インターネットでさあ、ドラッグの裏取引が出来るって情報を掴んでさあ……。ネットって便利だよな。たとえば店で忙しく働いていても、クリック一つで注文すれば、絶対にばれずに手元に代物を届けて貰えるんだから……。あの男が俺のメールを盗み見なんかしなければ……。絶対にばれる事は無かったのに。天罰ってやつかな。お空のどこかで、神様はちゃんとしてるって事なのかもな……」

パトカーのサイレンが近付いて来た。

「サクラドールのチョコがもう食べられないと思うと、残念です」

「あんだ、ウチのチョコ食った事ないじゃねえか」

和久田は笑った。「チョコは苦手なのかい？」

「正直に言うとは好きではありません」

才人は微笑んだ。「でもチョコレートパフェだけは、少し好きになりました」

警官が数人やって来て、殺人容疑で和久田翔平を連行して行った。一緒に来ていた本条刑事が才人を睨んだが、軽く一礼すると何も言わずに去った。

これで良かったのかな、才人は思う。

何が良い事で、何が悪い事なのか、時々分からなくなる。

指を三十四回転させても、きっとその答えは永遠に出ないだろう。

池上篤という男が暁子を刺し、

彼女を河川敷に投げ捨て、

関のバイクを使って事故死した。

間違った情報だけど、

神様は、それでいいのかも知れない。

藤原千鶴と打ち合わせをしたレストランのすぐ近くで、けたたましい工事の音が響いて

いる。ビルを建設中だ。才人が横断歩道前で信号待ちをしていた時、その建設現場で働いている作業員達の話し声が耳に入った。大きな声なので鮮明に才人の聴覚を通過する。

「昨日入った彼女、よく働くよなあ」

「ああ、去年の暮れ頃に一度真つ黒な服で現れた女だろ？」

「そうそう。あの時、事故で運ばれた新見主任からの指示を持って来てくれた女だよ。先週亡くなった主任とどういふ関係なのか知らないけど、彼女のおかげで助かった」

「名前、何て言ったっけ？」

「さあ……。でも働きっぷりはびっくりするほど主任に似てるぜ」

「じゃあ主任二号とでも呼ぼうか」

「ああ、それいいな」

信号が青に変わる。

才人は横断歩道を渡り始める。

途中でふと足を止め、

建設中のビルを振り返る。

ユリの楽しいげな声を、今、確かに聞いた気がした。

――了